

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11

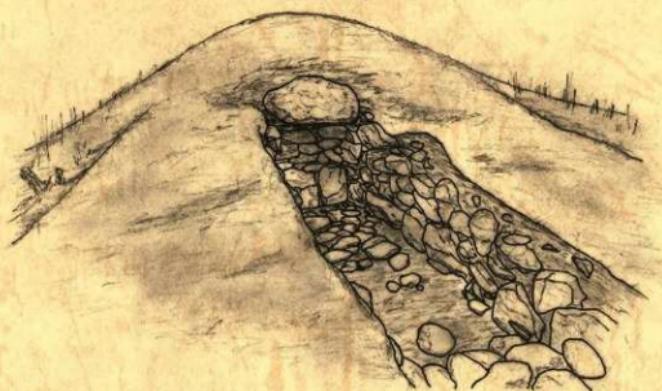
善通寺旧境内

善通寺陣所跡

旧善通寺僧行社

菊塚古墳

樽池西手山頂墳3号



平成18（2006）年3月

善通寺市教育委員会

表紙イラスト：梅池西手山頂墳3号

扉写真：菊塚古墳出土器台付装飾壺 鹿小像アップ

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11

善通寺旧境内

善通寺陣所跡

旧善通寺偕行社

菊塚古墳

椿池西手山頂墳3号



平成18（2006）年3月

善通寺市教育委員会



1. 第1トレンチ全景(南東から)



3. 第2トレンチ西部検出状況(北西から)



2. 第2トレンチ全景(東から)



1. 第3トレンチ北壁(南西から)



3. 第3トレンチ周溝 完掘状況(南東から)



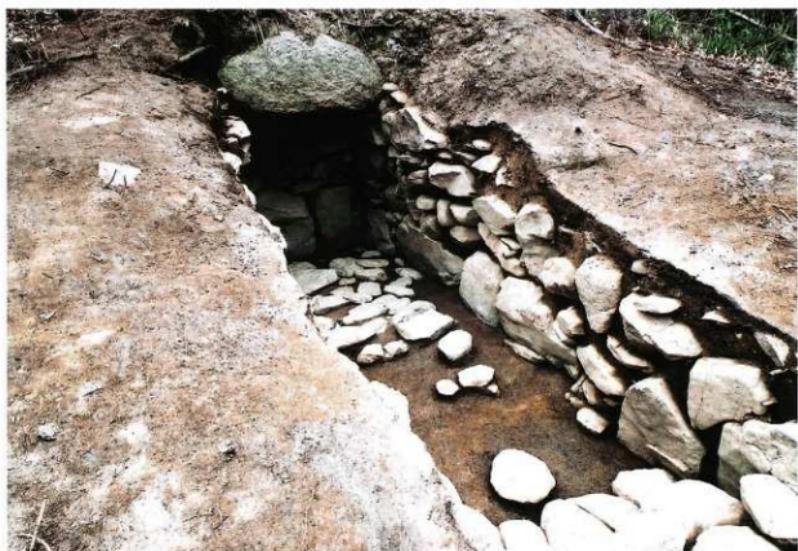
2. 第3トレンチ全景(東から)



1. 菊塚古墳主体部出土器台



1. 石室全景(南から)



2. 玄室全景(南西から)



1. 人骨出土状況(西から)



2. 玄室内遺物出土状況(南から)

卷頭図版 6 樽池西手山頂墳 3号



1. 樽池西手山頂墳 3号出土土器

例　　言

1. 本書は普通寺市教育委員会が平成17年度国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（普通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は普通寺市普通寺町3-5(普通寺旧境内・H17ZKK)において平成18年1月10~12日、同善通寺町3-3-1(普通寺陣所跡・H17ZZA)において平成18年1月12・13日、同文京町2-1-1(旧普通寺僧行社・H17KZK)において平成17年9月5・6日、同善通寺町字大池東(菊塚古墳・H17KD)において平成17年8月31日から9月30日まで、同善通寺町字伏見奥(樽池西手山頂墳3号H16TNS3・H17TNS3)において、平成17年2月10日から3月10日まで、および平成17年11月1日から12月1日まで発掘調査を実施し、調査中および調査終了後に各遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。現地調査・整理作業は、普通寺市教育委員会文化振興室 室長補佐 筒川龍一の指導・協力のもと、同主事 渡邊淳子が担当した。現地調査および整理作業に参加した調査補助員は下記に記す。
3. 本書の執筆は渡邊および、普通寺市役所 海邊博史、関西大学大学院生 細川晋太郎、奈良大学文学部文化財学科考古学研究室 高田晃裕が行なった。執筆分担は、付章1を海邊が、第6章第4節④遺物土器を渡邊・高田が、鐵器【石突】を細川が、同【鉄釘】を海邊・細川が、その他を渡邊が行った。また、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長 松下孝幸氏より玉稿を賜り、付章2に掲載した。菊塚古墳・樽池西手山頂墳3号の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、付章3に掲載した。編集は渡邊が行った。
4. 各遺跡の実測は、渡邊および調査補助員が行った。写真撮影は渡邊が行った。また本書に掲載した挿図の実測・製図は、平成14年度菊塚出土遺物(須恵器)を海邊が、樽池西手山頂墳3号出土鐵器を海邊・細川・田村隆明が、その他は渡邊・田村および調査補助員が行なったほか、中里伸明氏のご協力を得た。遺物の接合検討、復元作業は平成14年度菊塚古墳出土遺物(須恵器)を筒川が、その他を、渡邊・海邊・田村が行った。なお遺物実測図中、土器の断面は黒塗りが須恵、白抜きが土師質を表す。遺物の写真撮影は、西大寺フォト(撮影杉本和樹氏)に委託した。鐵器X線写真は、香川県歴史博物館(撮影高木敬子氏)のご好意を得た。
5. 樽池西手山頂墳3号の調査および整理作業は奈良大学文学部考古学研究室(代表 植野浩三助教授)の全面的なご指導、ご援助を頂いた。香川県埋蔵文化財調査センター 片桐孝浩氏には報告書作成について多大なご指導を頂いた。また、事業実施および本書の編集にあたっては、次の方々・機関よりご教示、ご協力を得た。記して謝意を表します。

香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・香川県歴史博物館・四国学院大学考古学研究部・總本山普通寺・高畠製陶株式会社・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・パリノ・サーヴェイ株式会社・山本建設有限公司・東 信男・安

藤文良・大久保徹也・大嶋和則・大野宏和・小野秀幸・片桐節子・加納弘之・川端聰・藏本晋司・近藤展由・佐藤竜馬・白川雄一・高畠尚・高畠将・富田尚夫・中里伸明・中山尚子・信里芳紀・乗松真也・萩原裁・松田朝由・松下孝幸・松下眞実・松本和彦・宮脇ヨウキ・宮脇武一・森下英治・山田哲也・山元敏裕・渡部明夫・渡邊誠(順不同・敬称略)

調査補助員

(発掘および整理作業) : 田村隆明(四国学院大学考古学研究部)・高田晃裕・奥山広規・山口遼介・具志堅有紀・福山博章(奈良大学文学部考古学研究室)・松木瑠子・小山真咲(四国学院大学学生)・池見渉(徳島文理大学学生)

発掘作業員

合田貢・田中澤次・森岡富明・横田茂夫



平成16年度調査メンバー



平成17年度調査メンバー

目 次

例 言

第1章 遺跡周辺の位置と環境	1
第2章 善通寺旧境内	6
第1節 調査の経緯と経過	6
調査日誌(抄)	8
第2節 調査の成果	8
①基本層序・造構	8
②遺物	10
第3節 まとめ	10
第3章 善通寺陣所跡	11
第1節 調査の経緯と経過	11
調査日誌(抄)	12
第2節 調査の成果	13
①基本層序・造構	13
②遺物	13
第3節 調査のまとめ	13
第4章 旧善通寺僧行社	14
第1節 調査の経緯と経過	14
調査日誌(抄)	15
第2節 調査の成果	16
①基本層序	16
②造構	16
第3節 調査のまとめ	16
第5章 菊塚古墳	18
第1節 調査の経緯と経過	18
第2節 調査の方法	20
調査日誌(抄)	20
第3節 古墳の立地	21
第4節 調査の概要	22
第5節 調査の成果	22
①基本層序・造構	22
②遺物	23
第6節 調査のまとめ	27
①各トレンチの検討	27
②墳丘復元案	27
付章1 平成14年度出土遺物	30
第1節 須恵器	30
第2節 小結	31

第6章 槽池西手山頂墳3号	36
第1節 調査の経緯と経過	36
調査日誌(抄)	37
第2節 調査の方法	40
第3節 古墳の立地	40
第4節 調査の成果	42
①墳丘・周溝	42
②前庭部	42
③横穴式石室	44
④遺物	52
第5節 調査のまとめ	62
 付章2 香川県善通寺市槽池西手山頂墳3号出土の古墳人骨	64
第1節 はじめに	64
第2節 資料	64
第3節 所見	66
第4節 考察	67
第5節 要約	67
 付章3 菊塚古墳・槽池西手山頂墳3号から出土した木材・炭化材の樹種	72
第1節 はじめに	72
第2節 分析方法	72
第3節 結果	72
第4節 考察	75
 主要参考文献	77
 写真図版	81

挿図目次

第1図 善通寺遠景	1
第2図 調査地と周辺の主要遺跡	2
 善通寺旧境内	
第3図 調査区位置図	6
第4図 トレンチ配置図	7
第5図 調査区平・断面図	9
 善通寺陣所跡	
第6図 調査区位置図	11
第7図 調査区配置図	12
第8図 調査区北壁土層断面図	13

旧善通寺僧行社

第9図 調査区位置図	14
第10図 旧善通寺僧行社平面図	15
第11図 旧善通寺僧行社正面	15
第12図 旧善通寺僧行社背面	15
第13図 作業風景	15
第14図 調査区平・断面図	17

菊塚古墳

第15図 調査区位置図	18
第16図 第2トレンチ平・断面図	24
第17図 第1・3トレンチ平・断面図	25~26
第18図 菊塚古墳出土土器実測図	27
第19図 墳丘復元案	29

付章 1

第20図 主体部須恵器出土状況図①(床面上)	32
第21図 主体部須恵器出土状況図②(床面上層)	33
第22図 菊塚古墳主体部出土器台付装飾壺	34
第23図 菊塚古墳主体部出土大型器台	35

樽池西手山頂墳3号

第24図 調査地位置図	36
第25図 流入土除去	37
第26図 人骨取り上げ	37
第27図 指導風景	38
第28図 石室実測	38
第29図 墳丘測量	38
第30図 墳丘測量図およびトレンチ配図	41
第31図 北・西トレンチ平・断面図	43
第32図 石室実測図	45
第33図 石室内および前庭部 埋土土層断面図	47~48
第34図 閉塞石 立面図	47~48
第35図 調査区地区割り図	47~48
第36図 玄室遺物出土状況図①	50
第37図 玄室遺物出土状況図②	51
第38図 美道、前方部出土遺物出土状況	53~54
第39図 樽池西手山頂墳3号出土土器実測図①	55
第40図 樽池西手山頂墳3号出土土器実測図②	56
第41図 樽池西手山頂墳3号鉄製品実測図①	60
第42図 樽池西手山頂墳3号鉄製品実測図②	61

付章 2

第43図 遺跡の位置	65
第44図 樽池西手山頂墳3号出土人骨 人骨の残存図	68
第45図 樽池西手山頂墳3号出土人骨 大腿骨	69

付章3

第46図 菊塚古墳の木材	74
第47図 樅池西手山頂墳3号の炭化物	75

表 目 次

第1表 樅池西手山頂墳3号 出土土器観察表	57
第2表 樅池西手山頂墳3号 出土鉄製品観察表	62
第3表 出土人骨一覧	66
第4表 年齢区分	66
第5表 大腿骨計測値	68
第6表 大腿骨	68
第7表 樹種同定結果	73

付図 菊塚古墳墳丘測量図

写 真 図 版 目 次

菊塚古墳

卷頭図版1-1 第1トレンチ全景(南東から)
卷頭図版1-2 第2トレンチ全景(東から)
卷頭図版1-3 第2トレンチ西部検出状況(北西から)
卷頭図版2-1 第3トレンチ北壁(南西から)
卷頭図版2-2 第3トレンチ全景(東から)
卷頭図版2-3 第3トレンチ周溝 完掘状況(南東から)
卷頭図版3-1 菊塚古墳主体部出土器台

樅池西手山頂墳3号

卷頭図版4-1 石室全景(南から)
卷頭図版4-2 玄室全景(南西から)
卷頭図版5-1 人骨出土状況(西から)
卷頭図版5-2 玄室内遺物出土状況(南から)
卷頭図版6-1 樅池西手山頂墳3号出土土器

善通寺旧境内

図版1-1 第1・2トレンチ遠景(北東から)	83
図版1-2 第3・4トレンチ遠景(東から)	83
図版1-3 第5トレンチ遠景(南西から)	83
図版1-4 第6トレンチ遠景(南東から)	83
図版2-1 第1トレンチ全景(南東から)	84
図版2-2 第1トレンチ西壁(北東から)	84
図版2-3 第2トレンチ全景(北東から)	84
図版2-4 第3トレンチ全景(南から)	84
図版2-5 第4トレンチ全景(南から)	84

図版2-6 第5トレンチ全景(南東から).....	84
図版2-7 第6トレンチ全景(南東から).....	84
善通寺陣所跡	
図版3-1 調査区遠景(南西から).....	85
図版3-2 調査区南東部(東から).....	85
図版3-3 調査区東壁(北西から).....	85
図版4-1 調査区北壁(南西から).....	86
図版4-2 北壁遺構面(南東から).....	86
図版4-3 北壁遺構面深掘(南西から).....	86
旧善通寺僧行社	
図版5-1 調査区遠景(東から).....	87
図版5-2 調査区北壁(南から).....	87
図版5-3 調査区全景(東から).....	87
菊塚古墳	
図版6-1 遠景(南西から).....	88
図版6-2 遠景(西から).....	88
図版6-3 主体部現況(北西から).....	88
【第1トレンチ】	
図版7-1 周溝検出状況(南東から).....	89
図版7-2 トレンチ全景(西から).....	89
図版7-3 拡張区南壁(北から).....	89
図版7-4 調査区遠景(西から).....	89
【第2トレンチ】	
図版8-1 トレンチ西部(北東から).....	90
図版8-2 トレンチ全景(西から).....	90
図版8-3 墳丘盛土堆積状況(北から).....	90
図版8-4 墳丘裾土層堆積状況(東から).....	90
図版8-5 調査区遠景(北東から).....	90
【第3トレンチ】	
図版9-1 周溝完掘状況(南西から).....	91
図版9-2 トレンチ東部(南西から).....	91
図版9-3 周溝検出状況(南東から).....	91
図版9-4 調査区遠景(北西から).....	91
【出土遺物】	
図版10 主体部出土器台付装飾蓋.....	92
図版11 主体部出土大型器台.....	93
樽池西手山頂墳3号	
図版12-1 平成16年度調査前(南東から).....	94
図版12-2 落葉除去後(南から).....	94
図版12-3 平成17年度調査前(南から).....	94
図版13-1 腐植土及び流入土(土層)除去後(南から).....	95
図版13-2 開口部(南から).....	95

図版13- 3	玄室内炭化物堆積状況(南から).....	95
図版13- 4	玄室内炭化物層除去後(南から).....	95
図版14- 1	開口部より玄室を望む(南から).....	96
図版14- 2	石室全景(南から).....	96
図版14- 3	天井石より開口部を望む(北から).....	96
図版15- 1	玄室(南西から).....	97
図版15- 2	玄室(南東から).....	97
図版15- 3	玄室 奥壁・左側壁 北東隅(南西から).....	97
図版15- 4	玄室 奥壁・右側壁 北西隅(南東から).....	97
図版16- 1	仕切石と閉塞石(西から).....	98
図版16- 2	閉塞部より玄室を望む(南から).....	98
図版16- 3	奥壁より開口部を望む.....	98
図版16- 4	仕切石と閉塞石.....	98
図版16- 5	閉塞石と閉石.....	98
図版17- 1	玄室 人骨出土状況(北西から).....	99
図版17- 2	擾乱土中遺物出土状況(南東から).....	99
図版17- 3	羨道部遺物出土状況(東から).....	99
図版18- 1	玄室遺物出土状況(南から).....	100
図版18- 2	玄室床面遺物出土状況(南から).....	100
図版18- 3	玄室床面敷石検出状況(南から).....	100
図版19- 1	土器・鉄釘出土状況(南から).....	101
図版19- 2	土器出土状況①(西から).....	101
図版19- 3	土器出土状況②(南から).....	101
図版19- 4	鉄釘出土状況①(No.27・南東から).....	101
図版19- 5	鉄釘出土状況②(No.10他・南から).....	101
図版20- 1	前庭部全景(南から).....	102
図版20- 2	墓道検出状況(南東から).....	102
図版20- 3	前庭部全景(南から).....	102
図版20- 4	前庭部全景(南西から).....	102
図版20- 5	墓道検出状況(南から).....	102
図版20- 6	墓道埋土中安山岩剥片検出状況(東から).....	102
図版21- 1	北トレンチ全景(南東から).....	103
図版21- 2	北トレンチ全景(北から).....	103
図版21- 3	北トレンチ西壁周溝土層(北東から).....	103
図版21- 4	前庭部壇丘裾(西から).....	103
図版21- 5	前庭部壇丘裾遺物出土状況(南から).....	103
図版22- 1	西トレンチ全景(北西から).....	104
図版22- 2	西トレンチ南壁壇丘盛土土層(北から).....	104
図版22- 3	西トレンチ南壁周溝土層(北から).....	104
図版22- 4	調査地埋戻し状況(南から).....	104
【出土遺物】		
図版23	出土土器.....	105
図版24	出土土器.....	106
図版25	出土土器.....	107
図版26	出土鉄器 石突・鉄釘.....	108
図版27	出土鉄器 石突・鉄釘 X線写真.....	109

第1章 遺跡周辺の位置と環境

普通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師(空海)が誕生した場所として有名な田園都市であり、総本山普通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊市(高瀬町・三野町)、南は仲多度郡琴平町、まんのう町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

普通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の土砂堆積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されている。南から北に下る緩やかな傾斜になっているため、たいがいの場所から瀬戸内海や対岸の岡山方面を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には、まれに縄文土器片が包含されていることが知られていたが、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したことが確認されている。

普通寺市の北には、讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我押師山・筆の山・香色山が麓を連ねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、古くから信仰の対象であった。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、古くから文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・普通寺市の五条遺跡・普通寺市から多度津町にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期古段階の弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では遺構・遺跡の範囲などについては現在も詳細は不明であるが、出土した弥生土器は畿内第1様式中段階から新段階に相当することが確認されている。

これらの遺跡群は自然堤防上に立地しており、現在の海岸線から2~3kmの距離があるが、当時の海岸線が現在の標高5m付近と推定すれば、三井遺跡や中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間



第1図 普通寺遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我押師山(この手前の小丘が甲山)・中山・火上山



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、市内吉原町から旧石器も出土しており、現在のところ本市の古代文化は約2~3万年前まで遡ることができる。

普通寺市街地の北一帯には、香川県を代表する弥生時代の中核的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまでおよんでおり、ここが旧陸軍第十一師団の練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。

昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小兒壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土した。また、県道整備工事の際に国立病院付近から弥生土器に加えて須恵器や小玉などが大量に出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまでおよんでいることが確認された。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲におよぶ可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連續性が考えられる、県下でも例のない存在であることが分かっている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの河道によって分断されていることが判明し、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群では、これまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。終本山普通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された普通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。昭和58年には、遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる普通寺の前寺・仲村庵寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端やその下層の弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。昭和59年には、普通寺西遺跡から弘田川沿いの約600m下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500m²の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の堅穴住居・小兒壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部など、多くの遺構・遺物が確認された。特に弥生時代終末期の堅穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる倣製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡、多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500mの仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小兒壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。その後も、国立普通寺病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査

- 1：阿佐陀堂遺跡 2：高瀬遺跡 3：乾遺跡 4：中村遺跡 5：永井遺跡 6：樅木遺跡群 7：金藏寺下所遺跡
8：五条遺跡 9：九頭神遺跡群 10：石川遺跡 11：甲山北遺跡 12：旧練兵場遺跡群 13：香色山遺跡群 14：四国学院大学構内遺跡 15：生野本町遺跡 16：生野南口遺跡 17：御忍林遺跡 18：我持篠山遺跡群 19：鶴が峰西麓遺跡 20：瓦谷遺跡 21：南原麻板遺跡 22：北原シンネバエ遺跡 23：下吉田八幡古墳 24：丸山古墳 25：鶴が峰4号墳 26：白山古墳 27：王墓山古墳 28：宮が尾古墳 29：野田院古墳(24~29：国指定史跡(有岡古墳群))
30：鶴が峰山頂古墳 31：御館古墳 32：岡(南光)古墳群 33：丸山1号墳 34：丸山2号墳 35：守田1号墳
36：寺田2号墳 37：鶴の巣古墳 38：大麻山横黄陵古墳 39：大麻山庭塚古墳 40：宮ガ尾2号墳 41：瓦谷1号墳
42：大塚池(吉原桜黄陵)古墳 43：北原古墳 44：善通寺伽藍 45：仲村庵寺 46：野田院跡 47：香色山経塚
48：仲村城跡 49：甲山城跡 50：菊塚古墳 51：三井遺跡 52：椿池西手山頂塚3号

第2回 凡例

が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。この遺跡の東側には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いている。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小兎塚古墳・箱式石棺墓などが確認された。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。九頭神遺跡の北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年から昭和60年にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二度実施されており、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも複数の旧河道間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいざれも同時期に併存したものであることがわかる。したがって弥生時代頃の善通寺周辺には、「大集落」というよりはむしろ「小国」が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅劍3口・大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅劍2口・細形銅劍5口・中細形銅劍1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅劍5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など青銅器が数多く出土している。また、近年旧練兵場遺跡では、小銅鐸をはじめ複数個の銅鐸片が出土し話題となった。市内出土の弥生時代青銅器の数が県下出土数の約4割を占めていることは特筆すべきことである。旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎えて、丸龜平野の肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などを行ない耕作面積を増大させた。この勢力が地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えるこの地の勢力はさらに発展を続ける。

この頃の集落域は現市街地の北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定される。この地区の古墳は確認されているだけでも400基以上を数え、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は、前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心の大麻山枕貸塚・大麻山経塚、野田院古墳・御忌林古墳・大窟経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれている。御忌林古墳と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している。中でも野田院古墳は、標高405m(平地との比高差約370m)という全國的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古級の前方後円墳である。大麻山北西麓のテラス状平坦部に立地しており、前方部は盛上、後円部は積石で構築されている。史跡整備に伴う発掘調査によって壺形土器が多数出土した。また、後円部と前方部の具体的な構築方法を確認するなど、多くの成果が得られた。築造年代は3世紀末頃と推測される。

また有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鎌子塚古墳(消滅)・磨臼山古墳・鶴が峰2号墳(消滅)・

鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。王墓山古墳では、石屋形を有する横穴式石室が検出され、内部からは金銅製冠帽や象嵌付き鉄刀、多数の馬具・鉄製品・装飾品・土器などが出土した。また、菊塚古墳でも石屋形を検出し、多数の遺物が出土した。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部を中心に群集墳が多数出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には周辺の装飾古墳と共通したモチーフのほか、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸龜平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯氏の氏寺である伝導寺(仲村庵寺)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかし、この寺は短期間で消滅し、後に500m程南面に移転されたものが現在の普通寺伽藍ではないかと考えられている。奈良時代末、宝亀五(774)年この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師空海が誕生する。平安初期、大同二(807)年に唐から帰朝した空海が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として普通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂のほか、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、普通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした豪族(佐伯氏)や普通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために經筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚(香色山1号経塚)が、平成9年夏に発見され注目を集めた。

普通寺は戦国時代、永祿元(1558)年には香川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その後復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封廻制度を確立してからのことであるが、四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ寺のうち五カ寺が現市内に所在するこの地域は、總本山普通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

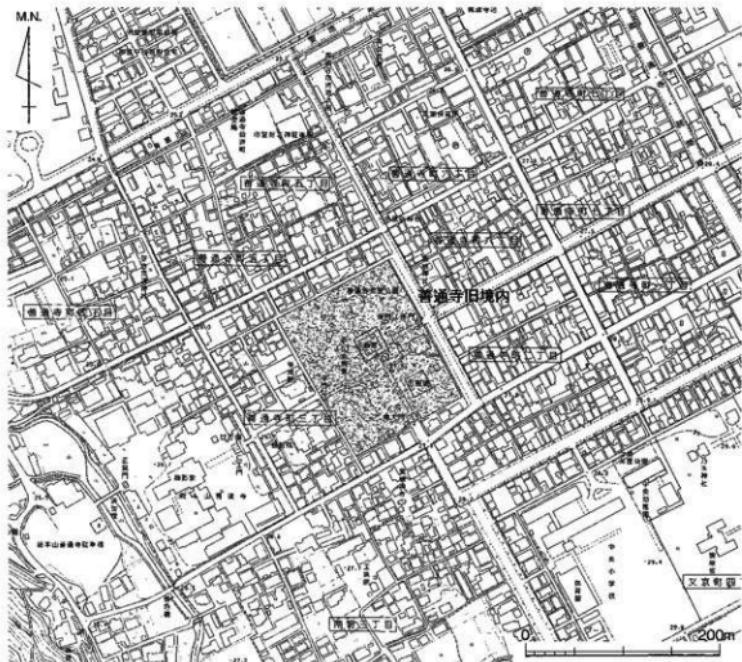
明治29(1896)年には陸軍第十一師団が設置され、門前町に加えて軍都としての性格を帯びるようになり、これに伴い道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより普通寺町として都市化が始まり、昭和29(1954)年3月31日に竜川村・与北村・筆閑村・吉原村との合併により市制が施行され普通寺市が誕生し、現在に至っている。

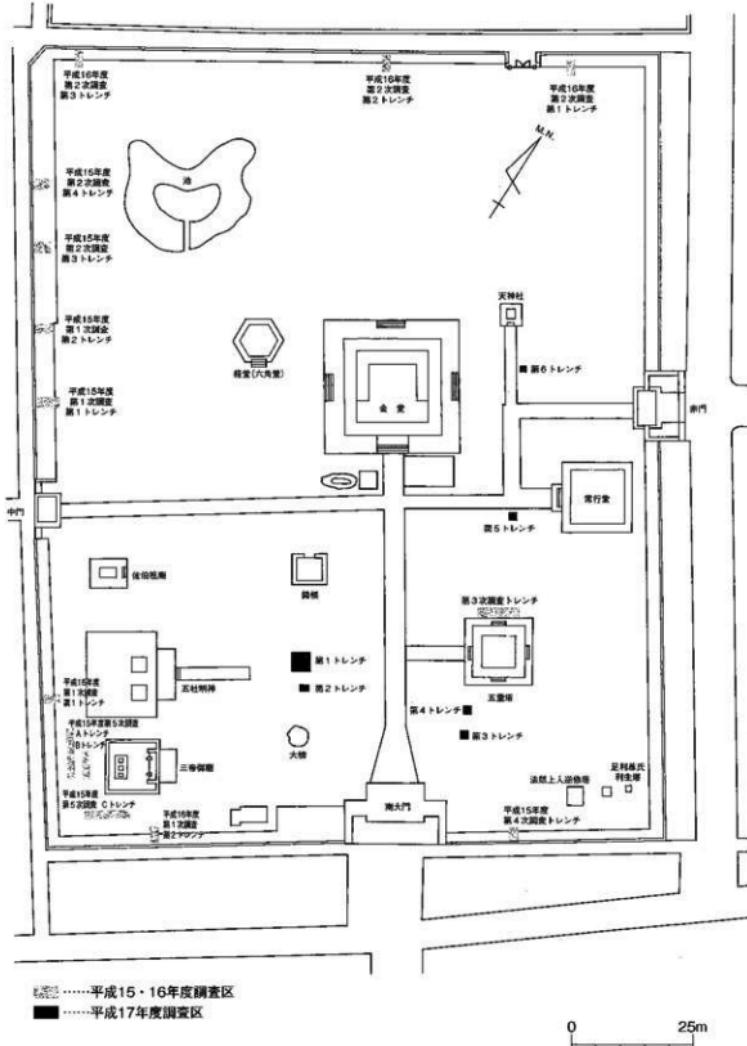
第2章 善通寺旧境内

第1節 調査の経緯と経過

總本山普通寺は平成18年に創建1200年を迎える。それに伴い昨年度より境内整備が実施されており、昨年度までに境内四周塀沿い等の確認調査を行っている(第4図)。今年度は五重塔ライトアップの照明設備設置計画が浮上した。旧境内は約30年前の部分的な調査や平成15・16年度の確認調査以外に広範囲の調査は実施されておらず、遺構の状況などが不明確である。そこで、本年度は照明設備建設予定地において、確認調査を実施した。調査方法は照明設備基礎部分にトレチを設定し(第4図)、重機および人力にて掘削を行った。そして土層断面の観察、写真撮影、縮尺20分の1での図化を行った。なお、遺跡が県指定史跡に指定されているという重要性を勘案し、調査面積および下層の掘削は最小限に留めた。



第3図 調査区位置図(1 : 5,000)



第4図 トレンチ配置図(1:1,000)

調査日誌(抄)

1月10日(火) 天候: 晴

トレンチの設定をする。第1・2トレンチの重機掘削を行う(1日)。水準点測量を行う。第1トレンチは、トレンチ西壁部分を地表面より1.7m(工事掘削深度)深掘りしたところ、現地表面より、0.6m下層で基盤層を検出した。

1月11日(水) 天候: 晴

第3~6トレンチの重機掘削を行う(1日)。第3・4トレンチは近世・近代の客土・遺物包含層のみ。第2・4~6トレンチは第1トレンチと同じく基盤層を検出したが、明確な遺構は確認されなかった。同トレンチの平面図を作成する。

1月12日(木) 天候: 晴

午前中は、普通寺旧境内の各トレンチの写真撮影と土層断面図の作成をする。終了後、重機により各トレンチの埋め戻しを行う(半日)。

1月16日(月) 天候: 雨

室内で遺物の洗浄を行う。

1月17日(火) 天候: 晴

室内で遺物の注記および遺物台帳の作成をする。

1月18日(水) 天候: 晴

室内で図面・写真的整理を行う。

第2節 調査の成果

①基本層序・遺構

調査地は普通寺旧境内南東部の五重塔周辺に該当する。照明設備基礎部分およびハンドホール設置箇所に合計7トレンチ設定した(第4図)。

第1トレンチの土層は表土を除くと、3層に分層できる(第5図)。第1層はにぶい黄褐色砂質土である。土層②が該当する。いぶし瓦や土器を含む近世の包含層で、水平に堆積している。締まりは悪い。第2層は黄褐色砂質土。土層③が該当する。第1層の下層に位置し水平に堆積している。第3層は基盤層である。土層④~⑥が該当する。上面は黄褐色砂質土で、非常に良く締まる。この面で平面精査したが、上層の瓦を非常に多く含む搅乱の他は明確な遺構は存在しなかった。さらに西壁部分を工事掘削深度まで深掘りしたが、にぶい黄褐色微砂層・疊を多量に含む灰黄褐色粗砂層の自然堆積となり、人為的な痕跡は確認されなかった。

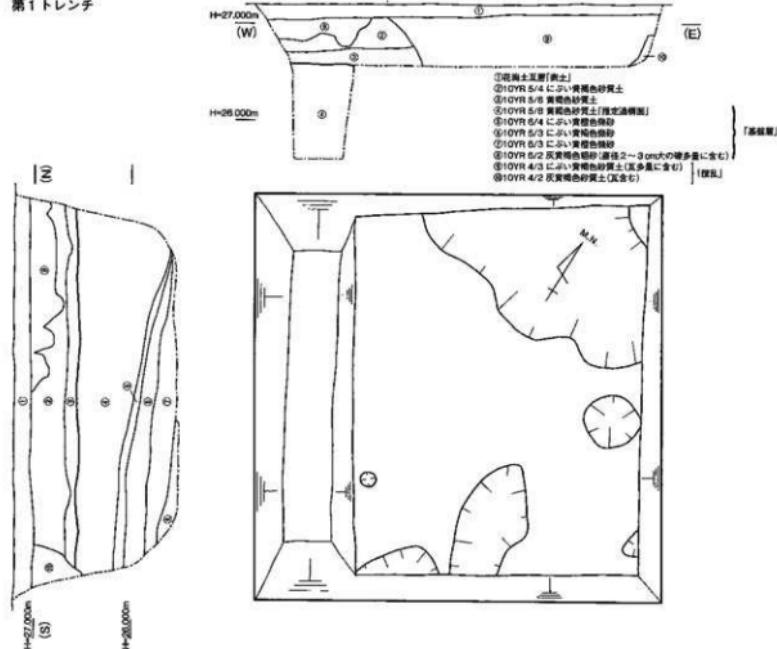
第2トレンチの土層は表土を除くと、3層に分層できる(第5図)。第1層はいぶし瓦や土器を含む近世の包含層で、水平に堆積している。土層②が該当する。第2層は、第1層の下層に位置し水平に堆積している。暗褐色砂質土で遺物がないため時期の判別は困難であるが、現状では近世以前の包含層としておく。第3層は褐色砂質土で、非常によく締まる。土層④が該当する。基盤層である。

第3トレンチの土層は表土を除くと、2層に分層できる(第5図)。第1層は、炭化物を多く含む黒色砂質土である。土層②が該当する。第2層はにぶい黄褐色砂質土で、いぶし瓦を含む近世の包含層である。土層③が該当する。

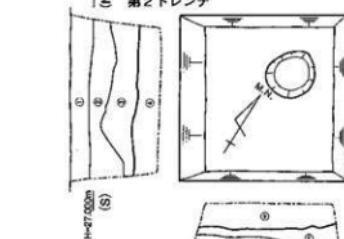
第4トレンチの土層は表土を除くと、にぶい黄褐色砂質土およびにぶい黄橙色砂質土でいぶし瓦を含む近世の包含層である(第5図)。土層②・③が該当する。

第5トレンチの土層は表土を除くと、3層に分層できる(第5図)。第1層は、にぶい黄褐色砂質土である。土層②が該当する。いぶし瓦を含む近世の包含層で、水平に堆積している。締まりは悪い。第2層は、褐色砂質土である。土層③が該当する。瓦を含む包含層である。第3層は暗

第1トレンチ



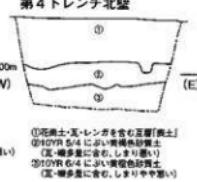
第2トレンチ



第3トレンチ北壁



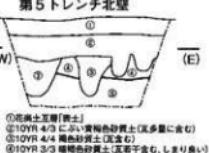
第4トレンチ北壁



第5トレンチ西壁

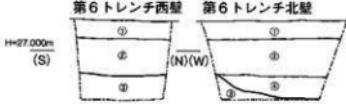


第5トレンチ北壁



- ①花崗岩互層「灰土」
②10YR 4/3 に近い黄褐色砂質土
(灰多量に含む)
③10YR 4/4 黄褐色砂質土
(灰多量に含む、しまり悪い)
④10YR 4/6 黄褐色砂質土
(灰多量に含む)
(しまり非常に良い)

第6トレンチ西壁 第6トレンチ北壁



0 2m

第5図 調査区平・断面図(1:50)

褐色砂質土である。土層④が該当する。瓦を若干含む包含層で、締まりは良い。この層上面で近世の瓦を含む多数のピットが検出された。第4層は、褐色砂質土で基盤層である。土層⑤が該当する。締まりは非常に良い。

第6トレンチの土層は表土を除くと、3層に分層できる(第5図)。第1層は、にぶい黄褐色砂質土である。土層②が該当する。いぶし瓦を含む近世の包含層で、水平に堆積している。第2層は、にぶい黄褐色砂質土である。土層④が該当する。西から東へ下方に傾斜している。完形の瓦を多く含み、板石が出土した。寺院の遺構に伴う板石の可能性があるが、出土状況から現位置は保っていないと判断される。第3層は、褐色砂質土である。土層③が該当する。非常に良く締まる。旧境内北部は平成15・16年度の確認調査で弥生時代の包含層が存在することが明らかになっている。第3層は土質からみてこの弥生時代包含層に該当する。

②遺物

近世の包含層や搅乱土から瓦・土器が出土した。近世・近現代のものが殆どである。その他に、古代の蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、室町期の軒平瓦が出土した。また、第1トレンチ搅乱土より縄文土器の破片が出土した。

第3節　まとめ

第1・2・5・6トレンチで基盤層および遺構面を検出したが、明確な遺構は検出されなかつた。ただし包含層・搅乱土からの出土ではあるが、創建期に近い時期の軒瓦が出土していることから、周辺に寺院に関連する遺構が存在している可能性は高い。

また第6トレンチで弥生時代包含層(遺構面)を検出しており、平成15・16年度調査の北西面土手状遺構下層の土層と一致する。旧境内北西部で確認されていた弥生時代包含層が北部前面にわたって存在していることがほぼ確実となった。

さらに今回の新たな所見として、縄文土器の出土が挙げられる。搅乱土からの出土ではあるが、縄文時代から当地に人為的な営みがあったことが示唆される。

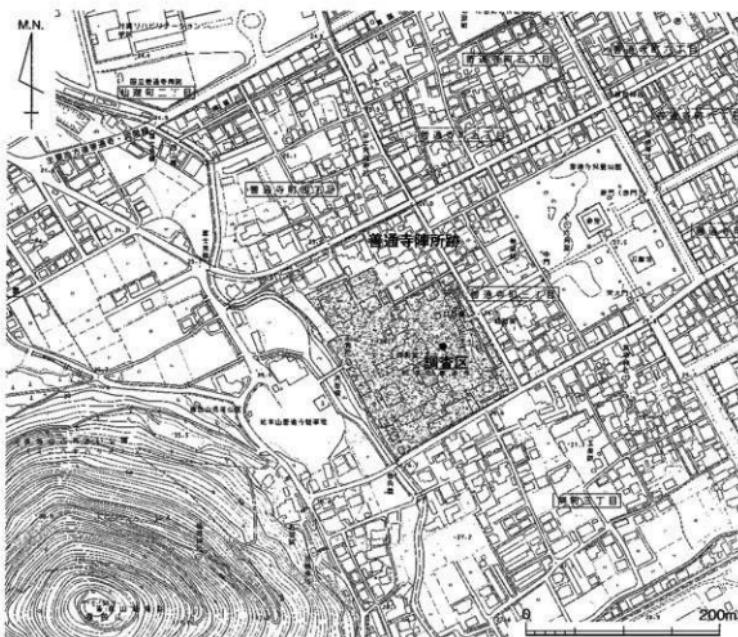
第3章 善通寺陣所跡

第1節 調査の経緯と経過

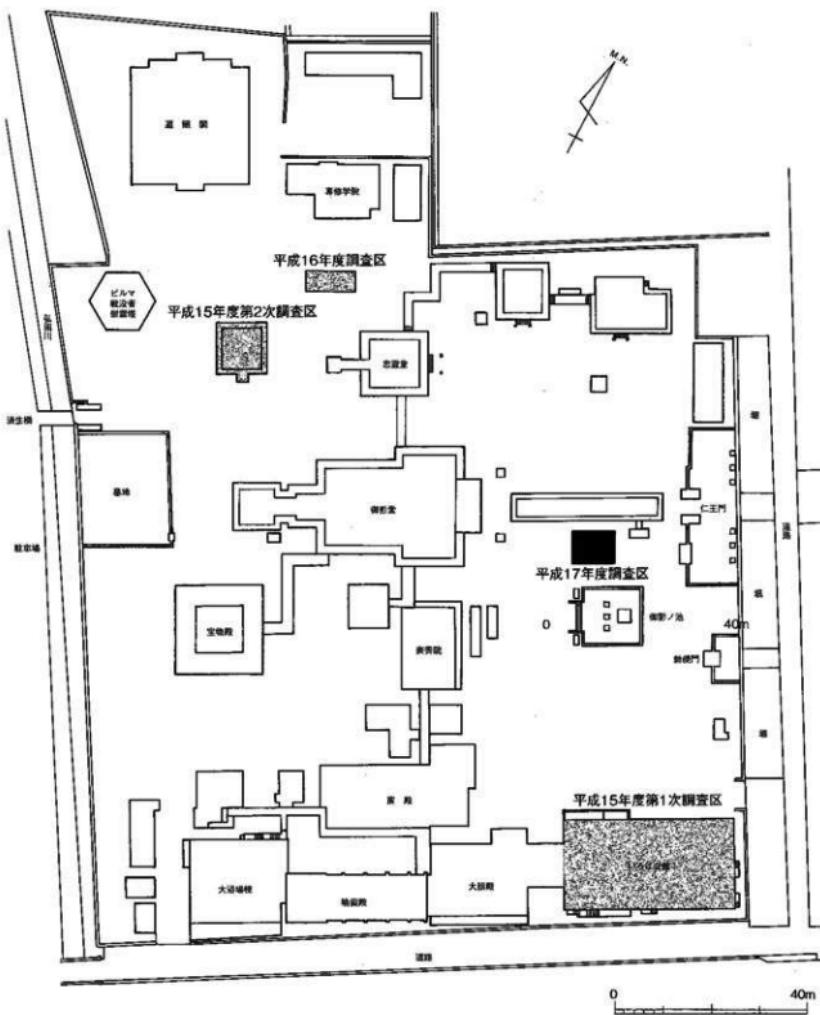
總本山普通寺は平成18年に創建1200年を迎え、それに伴い昨年度より境内整備が実施されており、普通寺西院(誕生院)でも建物の建設が計画・着工されている。当該地は善通寺陣所跡と称し周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されている。本遺跡は寛文3(1663)年に香西成資によって作成された『南海治乱記』に、阿波国の三好実休が香川氏征討のため、長禄元(1558)年、金蔵寺に本陣を構え(金蔵寺陣所)、さらに軍勢を進めて普通寺に陣所を移したという記載が見られる。この陣所跡が現在の善通寺西院と伝えられている。

昨年度までに行われた建物建設に伴う確認調査では、西院南東隅(平成15年度第1次調査)で中世後半から近世にかけての溝、ピット、土坑を、北西部(平成15年度第2次調査)で7世紀末から8世紀に遡る大規模な溝状造構を検出している(第6図)。

今回の調査地は御影堂前(東)にあたる。当地に売店移転建設が計画されたため、確認調査を行うこととなった。



第6図 調査区位置図(1 : 5,000)



第7図 調査区配置図(1:1,000)

調査日誌(抄)

1月12日(木) 天候:晴

午前中は、善通寺旧境内の各トレンチの写真撮影と土層断面図の作成をする。終了後、重機により各トレンチの埋め戻しを行う(半日)。

引き続き、陣所跡(御影堂前)に移動し、重機掘削を行う。

1月13日(金) 天候:曇のち雨

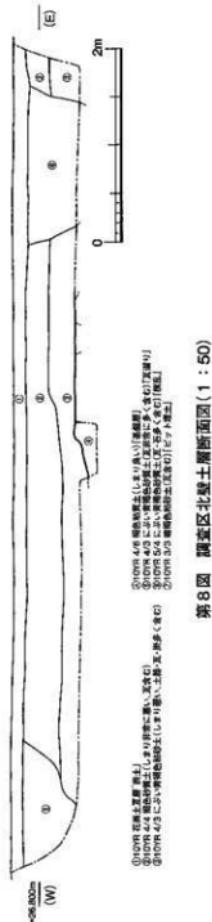
重機掘削を行う。基礎・配管がいたるところに

ありかなり搅乱をうけている。工事掘削深度より0.3m下層で基盤層を検出するが、明確な遺構は検出されなかつた。水準点測量を行う。午後より、北壁の土層断面図を作成する。終了後、埋め戻しを行う。

1月16日(月) 天候:雨
室内で遺物の洗浄を行う。

1月17日(火) 天候:晴
室内で遺物の注記および遺物台帳の作成をする。

1月18日(水) 天候:晴
室内で図面・写真の整理を行う。



第2節 調査の成果

①基本層序・遺構

調査区は売店移転予定地に任意でトレンチを設定した。当該地は水道管などの配管が多数あり面的な調査が困難であったため、北・東壁際を筋掘りし土層を確認した。

基本層序は、表土・搅乱を除くと3層に大別できる。第1層は褐色砂質土である。土層②が該当する。近代の堆積層で、瓦を含み締まりは悪い。この面で瓦溜りや搅乱が存在する。第2層はにぶい黄褐色砂質土である。土層③が該当する。同じく近代の堆積層で、土器・瓦・炭を多く含み締まりは悪い。第3層は、褐色粘質土である。土層④が該当する。基盤層(遺構面)であり、締まりは良い。瓦溜りのピットが検出された以外は明確な遺構は確認されなかつた。

②遺物

第1・2層および搅乱土・瓦溜りより土器・瓦が出土した。いずれも近世・近現代の所産である。

第3節 調査のまとめ

調査地は普通寺跡所跡の中心部に該当する。今回の調査区は既に搅乱を多く受けているため、当初想定していた中世後半の陣所跡に関する遺構や平成15年度調査で検出した古代の溝状遺構に関する遺構・遺物は発見できなかつた。今後周辺の調査事例の増加により、当遺跡の全貌が明らかになることを期待したい。

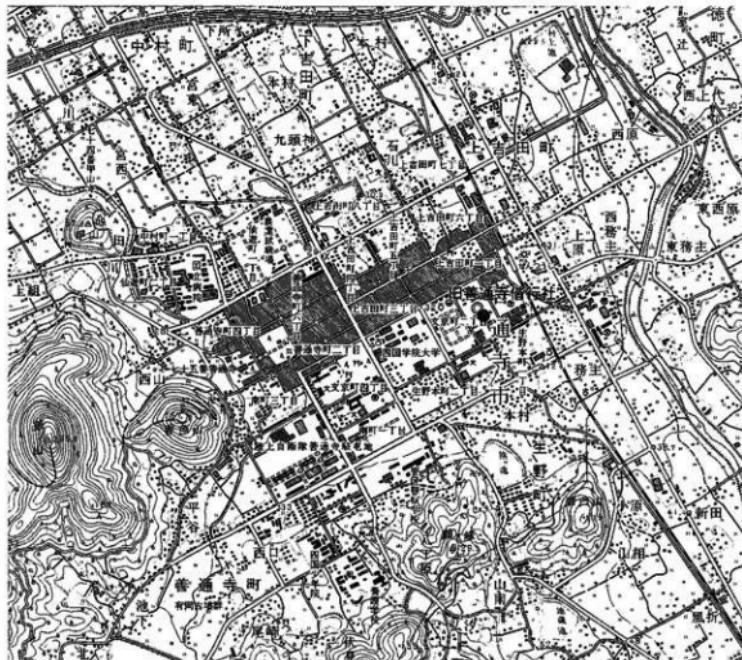
第4章 旧善通寺偕行社

第1節 調査の経緯と経過

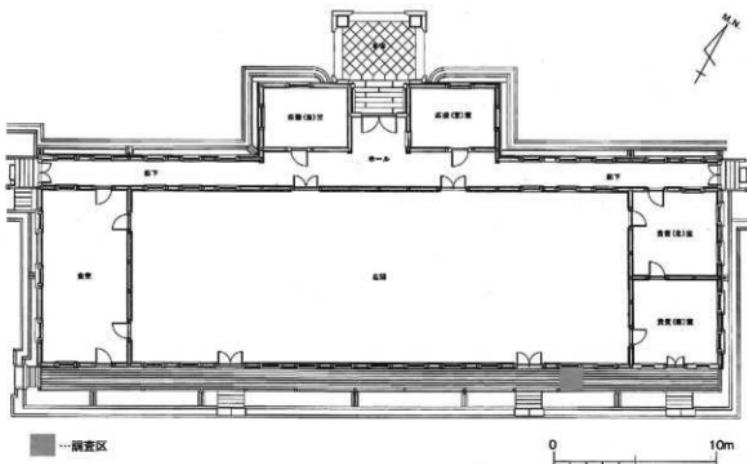
調査地は、重要文化財旧善通寺偕行社敷地である。この建物は平成13年に国重要文化財の指定を受け、現在復元整備を進めている。復元工事にあたり地下遺構の有無を把握するため、確認調査を行った。

調査方法は、建物の軒先部分に任意で東西1.4m・南北方向1.25mのトレンチを設定した。基盤層まで掘削し、土層断面の観察、写真撮影、縮尺10分の1での図化を行った。

旧善通寺偕行社の概要 明治36年(1903年)、旧陸軍現役将校の親睦事業団体である「偕行社」の集会所として建設された。全体的にルネサンス様式を基調とした端正なつくりで、木造平屋建て寄棟造りの屋根を持ち、切妻造りの玄関ポーチが取り付く。戦後、アメリカ軍の進駐や善通寺市庁舎および公民館、善通寺市立郷土館として利用され内部は改変・改修を受けているが、外観は明治期の面影を残している。平成13年に国の重要文化財の指定を受けてより、復元整備(平成18年度終了予定)を進めており、現在は解体復元工事中である。



第9図 調査区位置図(1 : 25,000)



第10図 旧普通寺僧行社平面図(1:300)



第11図 旧普通寺僧行社正面



第12図 旧普通寺僧行社背面

調査日誌(抄)

9月5日(月) 天候:暴風雨

旧普通寺僧行社基礎部分の調査。基礎部分1ヶ所に小規模なトレチを設定する。レンガ積の下部には「たたき」が敷かれていた。

9月6日(火) 天候:暴風雨

旧普通寺僧行社基礎部分の調査。室内で実測図面の製図を行う。



第13図 作業風景

第2節 調査の成果

①基本層序

土層は、整地土を除くと大きく3層に分層される(第14図)。第1層は堆積土である。土層②～④が該当する。各層とも非常に良く締まった粘砂土である。旧普通寺僧行社建設時の整地土の可能性も考えられるが、均質で水平に堆積していることから自然堆積と考えたい。第2層は、旧普通寺僧行社基礎掘形埋土である。土層⑤～⑦が該当する。第3層は、旧普通寺僧行社基礎である。土層⑧・⑨が該当する。

②遺構

トレンチ北西隅で身舎基礎および基礎掘形を、南西部で庇基礎(下屋柱礎石)および基礎掘形を検出した(第14図)。埋蔵文化財関係の遺構は確認されなかった。

身舎基礎は煉瓦布基礎で地表面より下層にさらに6段分の煉瓦積があり、下3段分は煉瓦の小口幅半分外側に追出して、これをフーチング(註2)としている。煉瓦積の工法は地上と同じくイギリス積である。さらにその下層には厚さ0.22mの「たたき」(註1)が続く。土層⑨が該当する。浅黄橙色でやや締まる。最下層は基礎掘形に沿って「たたき」を敷く。土層⑥が該当する。浅黄橙色でややもろい。掘形は外面から0.40m外側より掘り込まれ、深さは0.60mを測る。埋土(土層⑤～⑦)は「たたき」が互層になっている。

庇基礎掘形は基礎中心から0.42m外側より掘り込まれ、深さは0.25mを測る。最下層は基礎掘形に沿って「たたき」(土層③)を敷く。埋土は土層⑤の一層である。

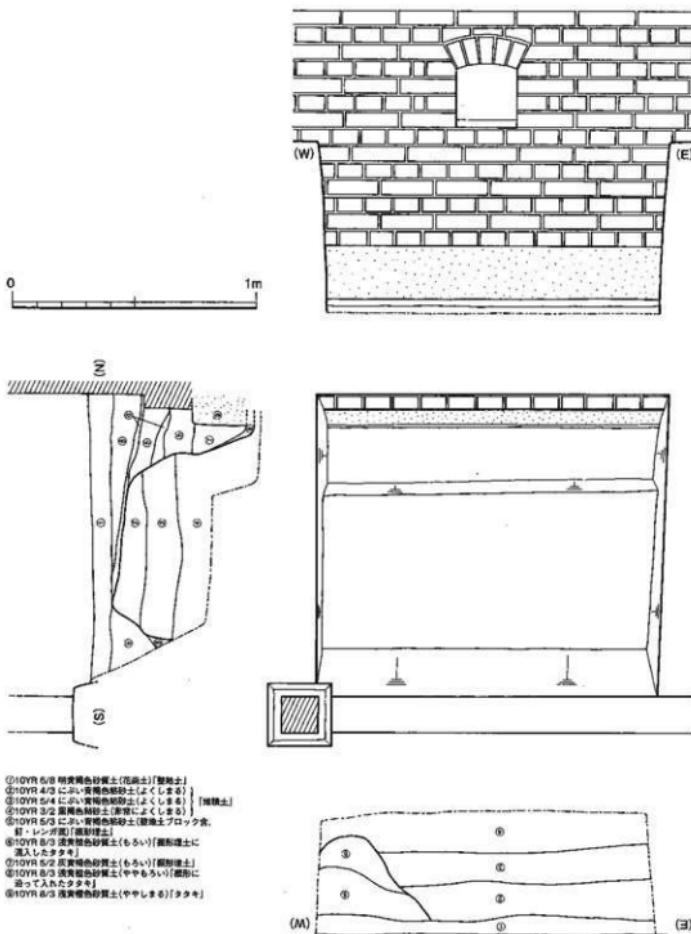
なお遺物については、基礎掘形埋土より旧普通寺僧行社関連の煉瓦・釘が出土した他は、埋蔵文化財関係の遺物は全く出土していない。

第3節 調査のまとめ

今回の調査では、埋蔵文化財に関連する遺構は確認されなかつたが、旧普通寺僧行社の基礎構造を把握することが出来た。基礎地業には「たたき」が施されている。まず掘形を掘りこみ、最下層に約0.03m「たたき」を敷く。次に掘形約半分ぐらいいの深さまで掘形と地業設置予定部分との隙間に埋土で埋める。そして地業設置予定部分に赤土と石灰・砂を混ぜたものを流し込み叩き締める。これが、煉瓦布基礎の地業「たたき」となる。その上に煉瓦を3段イギリス積で積み、布基礎フーチングとする。掘形との隙間に周辺の土と石灰を含む土とを交互に詰める。さらに煉瓦を積み、周辺の土で掘形を埋め、これを煉瓦布基礎とする。以上のような作業行程が窺える。今回検出した旧普通寺僧行社基礎部分の「たたき」は厚さ0.22mと薄く、硬度も手で強く触れると崩れてしまい堅緻でない。明治期洋風近代建築の築造構造の一端が窺える。

註1 「たたき」=(三和上)…赤土に石灰と砂を混ぜて叩き締めたもので、幕末から明治期の近代化遺産と呼ばれる洋風建築物や土蔵・社寺・民家の基礎に使用された。

註2 「フーチング」…柱または壁を支える基礎の広がり部分。一般にその基礎のことを総称していいう。



第14図 調査区平・断面図(1:20)

第5章 菊塚古墳

第1節 調査の経緯と経過

菊塚古墳は戦前から丸龜平野屈指の首長墳と認識はされていたものの、発掘調査が行われ詳細が判明したのは、近年のことである。調査以前は盾形の周庭帯の存在から中期古墳とする説や後期古墳と考える説が並立していた。

平成12年度調査 菊塚古墳において周辺地の圃場整備の計画に伴う照会が善通寺市教育委員会にあった。古墳周辺の工事は水路や畦畔の改修が中心で、現存する墳丘への影響は無いが、周庭帯の痕跡と推定できる地割りへの影響が想定されたため、墳丘南東側の水田を中心に確認調査を実施した。調査の結果、周庭帯は基盤層を削り出して構築していることを確認したことや、後円部墳丘裾を検出することができた。

平成13年度調査 以前より墳丘の流出が確認されていたが、墳頂部の菊主神社に通じるコンクリート製舗装路の下部の空洞化などが確認され、安全面から改修が急務であった。現状のまま放置すると、墳丘自体が崩壊する恐れがあったため、保存を前提とした墳頂部の造構の確認調査を



第15図 調査区位置図(1:5,000)

行った。併せて後円部墳丘の測量調査も実施した。その結果、調査前不明であった主体部が南に開口する横穴式石室であることが判明した。また石室内には、中四国では王墓山古墳に次いで2例目の発見となる石屋形を検出した。後円部の測量の結果、直径39m前後の規模になることが分った。

平成14年度調査 前年度の調査を踏まえ、玄室全面および羨道の一部の調査を行った。その結果、石室は石屋形を有する両袖式横穴式石室であることを確認した。遺物も盗掘を受けていたものの、玄室を中心に多数の遺物が出土した。

石室は後円部のほぼ中央部に位置する。奥壁が後円部のほぼ中心にあたり、奥壁の位置が墳丘の設計にも大きく影響していたと考えられる。石室形態は羨道が狭く袖部が内側に突出しているなど、九州型横穴式石室の影響を受けた可能性がある。また石屋形の存在は、菊塚古墳の性格を考える上で最も顕著な遺構である。石屋形の位置が王墓山古墳とは異なり奥壁側に据えられている。この形態は肥後地方にある通有の石屋形の形態と言える。

遺物は大部分が玄室内から出土した。出土遺物は、須恵器・土師器などの土器類、耳鏡・ガラス製小玉・水晶製切子玉・碧玉製勾玉などの装飾品、杏葉・鏡板・辻金具・鏡などの馬具類、鉄鋸・石突・太刀・刀子・鉄鎌などの鉄製品と多種多様である。また出土須恵器の年代より菊塚古墳の築造時期が、おおよそ6世紀中葉を中心とした時期に該当することも判明した。

平成15年度調査 墳丘の形状を把握するために前方部端の検出を試みた。2次にわたる調査で前方部北側および西側に計10本のトレーナーを設定した。調査の結果、前方部長25m、墳丘長64mの前方後円墳であることが判明した。また前方部西側前端では基盤層を削り出した幅5.5mの周溝を検出し、これまで周堤のみと考えられていた墳丘復元を変更する必要が生じた。なお、後世の削平のため詳細な墳丘の形状を確定させるまでには至らず、今後の課題が残った。

平成16年度調査 墳丘の形状を把握するために後円部墳丘裾の検出を試みた。後円部北東辺に計4ヶ所のトレーナーを設定した。その結果、後円部墳丘裾に溝状遺構が存在することが明らかになった。また墳丘裾の検出位置から後円部の規模が、墳丘測量で推定された直径約39mであることがほぼ確実となった。

市教育委員会は遺跡の重要性を考慮し、関係諸機関と協議の上、埋蔵文化財調査事業として保存を前提とした遺構の確認調査を行った。

現地調査については市教育委員会担当者を調査員として実施するとともに、四国学院大学考古学研究部・四国学院大学学生および地元作業員が参加した(個別氏名は例言に記した)。

調査は昨年度までの成果を踏まえて、墳丘形態、規模の確認および遺構の残存状況を把握するため、墳丘裾から周溝部分にトレーナーを設定した。調査面積は計46.5m²である。調査期間は平成17年8月31日から同年9月30日まで行った。整理期間は調査中から適宜行い、平成17年3月31日に終了した。

第2節 調査の方法

調査は掘削が可能な古墳北半の前方部前端部・前方部側辺部の後円部取り付き部付近・後円部周溝推定部分にトレントを設定した。計3本のトレントを設定し、遺構の検出に努めた。調査区は現況において畠地および更地・荒蕪地となっている。トレントは最も遺構が把握できるように長さ、幅ともに全て任意である。作業効率のため適宜、平面および断面の観察・縮尺20分の1での図化・写真撮影を行いながら下層の掘削に努めた。

調査日誌(抄)

8月31日(水) 天候: 曇のち晴

午前中は、調査道具の準備と調査地周辺の測量を行う。前方部の草刈をして、第1・2トレントを設定する。

午後より、室内で測量の結果をもとに第3トレントの調査位置を確定する。

9月1日(木) 天候: 晴

後円部・前方部の草刈を行う。後円部周辺の測量を行う。第3トレントを設定する。第1トレントの埋土、および第3トレントの表土剥ぎを行う。室内で、水準点測量の確認と、全トレントの設定位置図を作成する。

9月2日(金) 天候: 晴

第1トレントは、H15年度調査時の埋土剥ぎを行う。

第2トレントは、表土剥ぎを行う。

第3トレントは、堆積土を掘削する。遺物はほとんどない。

9月3日(土) 天候: 晴のち曇

第1トレントは表土剥ぎを行う。第3トレントは、引き続き堆積土を掘削する。

調査終了後、台風接近のため各トレントを防水保護する。

9月7日(水) 天候: 曇のち晴

各トレントの水抜きを行う。第1トレントは堆積土を掘削する。第3トレントは、墳丘裾溝状遺構の上がりが検出された。

9月8日(木) 天候: 晴

第1トレントは堆積土を掘削する。トレント西半は擾乱が多く、周溝西側の上がりが平面で明確に確認できない。

第3トレントはトレント東端で基盤層が下降していたため、掘削を行ったが壁面観察したところ土坑状の遺構であることが判った。

9月9日(金) 天候: 晴

第1・3トレントの写真撮影をする。

第2トレントは表土直下の堆積土を掘削する。墳丘盛土は検出できず。

第3トレント東部を、周堤帯の有無を確認すべく南側に拡張する。

9月12日(月) 天候: 晴

各トレントの水抜きを行う。第3トレントは拡張区の表土・堆積土を掘削する。

9月13日(火) 天候: 晴

第1トレント西端及び第2トレント北西を拡張する。表土剥ぎ・堆積土掘削を行う。

第3トレントは拡張区の堆積土を掘削する。

9月14日(水) 天候: 晴のち曇

第2トレント南壁西端(排水溝)で、墳丘盛土と推測される黒灰土を確認する。黒灰土の範囲を確認するため、拡張部分を平面的に掘り下げる。

第3トレントは、墳丘裾溝状遺構埋土を発掘する。須恵器壺体部破片が出土した。埋土完掘後、写真撮影をする。

9月15日(木) 天候: 曇

第1トレントの写真撮影を行う。

第2トレントは、引き続き拡張部分を平面的に掘り下げる。北西から南東方向にかけて墳丘盛土(黒灰土)が確認された。黒灰土の下層は疊層になっており、墳丘外側に向かって緩やかに下降する。盛土直上より須恵器壺体部破片が出土した。

9月16日(金) 天候: 晴

第2トレント写真撮影を行う。第1~3トレントの平面図を作成する。第1・2トレントのレベルリングを行う。

9月17日(土) 天候: 曇

第2・3トレントの断面図を作成する。香川県埋蔵文化財調査センター中里氏が来訪する。

- 9月19日(月) 天候: 曇時々雨
 引き続き、第1～3トレンチの平・断面図を作成する。
 第1トレンチのレベリングを行う。
- 9月20日(火) 天候: 曇
 第1トレンチ南壁中央部(周溝の肩推定部分)を南へ拡張するが、平面・断面ともに明確な周溝の上がりは確認できなかった。
- 第2トレンチは、下層確認のため排水溝を深掘りする。室内で図面の整理をする。
- 9月21日(水) 天候: 曇
 第1トレンチ拡張部分の写真撮影を行い、平・断面図を作成する。午後より重機による調査区の埋め戻しにとりかかる。
- 9月22日(木) 天候: 曇
 引き続き、調査区の埋め戻しを行う。調査道具の片付け・土器洗いを行う。
- 午後より、室内で図面の整理をする。
- 9月23日(金) 天候: 晴のち曇
 調査道具の片付け・土器洗いを行う。現場撤収。
- 9月26日(月) 天候: 晴
 室内で出土遺物の整理を行う。
- 9月27日(火) 天候: 晴
 室内で出土遺物の整理を行う。
- 9月28日(水) 天候: 晴
 室内で出土遺物の台帳を作成する。
- 9月29日(木) 天候: 晴
 室内で図面・写真の整理を行う。
- 9月30日(金) 天候: 曇
 室内で図面・写真の整理を行う。

第3節 古墳の立地

菊塚古墳は普通寺市街地から南西側に広がる瓦谷地区に位置する。この地区は有岡地区とも呼ばれており、低丘陵地帯が広がっている。この地区は有岡大池を水源とする弘田川上流域に該当し、多くの首長墳級の前方後円墳が集中する地域として著名である。この地は古代から聖域視されていたようで、集落遺跡があまり検出されない反面、青銅器埋納遺跡や祭祀遺跡、墳墓などが多く見つかっている(第2図)。

この地域は北側から西側にかけて、五岳山の一角である香色山(標高153.2m)、筆ノ山(標高296.0m)、我拝師山(標高481.0m)が連なっており、南側は丸亀平野の独立峰では最も高い大麻山(標高616.3m)の裾野が広がっており、西側の平野方向のみが開ける地形となっている。これらの山々の尾根上には前期古墳が点在し、標高50～80mの山裾部には後期から終末期の群集墳が密集成している。また平野部にも舌状に伸びる小丘陵が点在しており、その地形を利用して多数の古墳が築造されている。

菊塚古墳はこれらの平野部に広がる古墳のうち最も西側の平地に独立して築造されている。古墳は開墾や住宅建設に伴い前方部の大部分が消滅しており、菊理姫命を祀る菊主神社がある後円部のみが辛うじて残存しているに過ぎない。その後円部さえも周囲は大きく崖状に削平されるなど地形の変化が著しい。一方國場整備前の航空写真を観察すると、古墳の周囲には周庭帯の痕跡と推定される平面橋状の地割りが認められる。この部分は墳丘南側では西から東にかけて階段状に低くなってしまい、その比高差は0.7mを測る。墳丘の主軸は南西～北東方向を向いている。

墳丘の全長は推定で約59m、後円部直径約39m、周庭帯の全長は約90m、最大幅約70mを測り、丸亀平野でも屈指の規模を誇る。

第4節 調査の概要

今年度の調査は、前方部前端部における周溝の確認と前方部側辺部の後円部取り付き部分の幅の確定、後円部周溝の有無の確認を目指し、それぞれ第1・2・3トレンチを設定した。

まず第1トレンチは、前方部前端部および周溝推定ラインに直交するように配置した。平成15年度第9トレンチに重複し、さらにその西側7.0mまで拡張させたトレンチである。第2トレンチは前方部側辺部の後円部取り付き部分推定ラインを検出すべく、前方部に位置する家屋北側の畠地南東隅に配置した。第3トレンチは後円部中軸線上である平成16年度第3トレンチの東側に7.0m延長している。周溝・周庭・周堤帯の有無の確認を目的とした。

なお各トレンチの規模は調査の状況に応じて適宜拡張している。

第5節 調査の成果

①基本層序・遺構

第1トレンチ(第17図) 平成15年度調査で墳丘側である周溝の東肩を検出しており、今回はその周溝の西肩を検出するための調査である。トレンチの規模は、1.2m×12.0mを測る。土層は表土を除くと5層に大別できる。

第1層は周溝上層堆積土である。土層④・⑤が該当する。

第2層は周溝埋土である。周溝は第1層を除去したところで、東から西方向への落ち込みを検出した(平成15年度調査検出周溝東肩)。西肩の上がりは第1層上面より多数の搅乱があり(土層⑨～⑩、⑩・⑪・⑫)、判断するのが非常に困難であった。トレンチ北壁の断面で土層を観察すると、平成15年度調査で検出した周溝埋土下層である黒色極細砂(土層⑨)および灰色シルト(土層⑩)は、周溝東肩より4.0～4.5m付近で西へ上がる。しかしちょうどその地点で搅乱を受けており確定できない。そこで平面的に検証するため幅2.0mで南に0.3mに拡張した。黒色極細砂(土層⑨)および灰色シルト(土層⑩)は対する南壁側には続いておらず、拡張区東壁で収束する。土質は異なるが同じく黒色の土層⑩が周溝東肩より7.5mの地点で西へ上がっているのが北壁断面で確認でき、土層⑩も周溝埋土である可能性がある。ただし、この地点も平面部分が搅乱を受けており確定できない。

第3層は堆積土である。土層⑩・⑪が該当し、水平に堆積する。周溝埋土を土層⑨・⑩までとした場合第3層は周溝形成時以前の堆積土となり、周溝埋土を土層⑩まで含めると周溝上層堆積土となる。

第4層は墳丘盛土である。土層⑪～⑭が該当する。平成15年度調査時に検出している。

第5層は基盤層である。土層⑪・⑫～⑭が該当する。

第2トレンチ(第16図) トレンチの規模は、1.0m×9.0mを測る。調査途中より、トレンチ西部を2.0×4.0m北に拡張した。土層は5層に大別できる。

第1層は耕作土・床土である。土層①～③が該当する。

第2層は墳丘上層堆積土である。土層④～⑦、⑬・⑭・⑮・⑯が該当する。水平に堆積しており、土質の状況から判断して、土層④と土層⑤～⑦とで、土層④と土層⑬・⑭とで、土層⑬・⑭と土

層⑪とで時期差があるものと推測される。最上層である土層④上面で井戸を検出した。掘形は26mの円形(推定)で、井戸枠を西寄りに据える。井戸内埋土・掘形埋土の土質や所有者のお話から近現代のものであると考えられる。土層⑦・⑪と土層⑬・⑭は、間に井戸があるため相関関係を確認できなかった。墳丘直上堆積土(土層⑪)より須恵器壺片が出土した。

第3層は墳丘盛土である。土層⑮が該当する。トレンチ西部で墳丘直上堆積土(土層⑪)を除去したところ、基盤層の上面に黒褐色粘砂土(土層⑯)が南西から北東にかけて堆積していた。平成15年度調査第1トレンチで検出した黒褐色シルト質極細砂(土層⑦)に類似しており、同じく墳丘盛土であると判断した。なお、井戸内埋土・掘形埋土には第3層墳丘埋土が搅乱されたと思われる黒灰土ブロックが混入している。

第4層は墳丘裾堆積土である。土層⑯・⑰が該当する。第3層墳丘盛土は南西から北東にかけて落ち込み収束する。その墳丘裾の落ちに沿って第4層が堆積している。

第5層は基盤層である。土層⑯が該当する。検出レベルをみると南高北低・西高東低の地形になっている。

第3トレンチ(第17図) トレンチの規模は、1.5m×7.0mを測る。調査途中より、トレンチ東部を2.0×2.0m南に拡張した。平・断面図は平成16年度調査部分(第3トレンチ)と合わせて図化した。土層は5層に大別できる。

第1層は、耕作土・底土である。土層①・⑦・⑨・⑩が該当する。

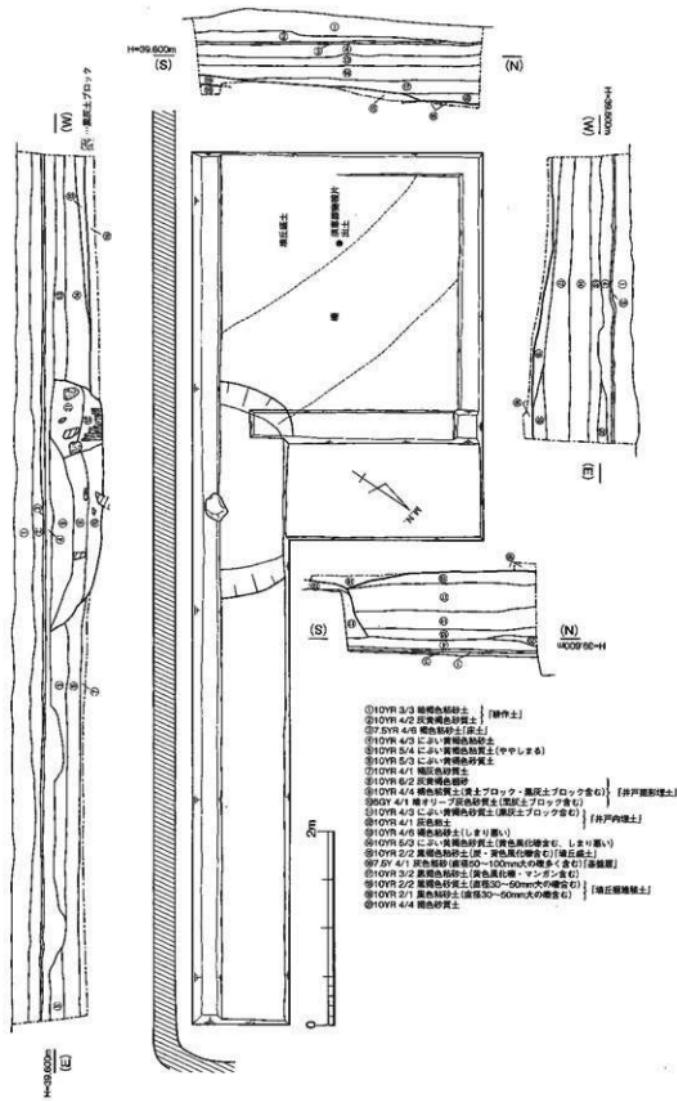
第2層は古墳周溝上層堆積土である。土層⑧・⑨～⑪・⑫・⑬が該当する。水平堆積している。

第3層は、古墳周溝埋土である。土層は⑭～⑯・⑰・⑱が該当する。第2層周溝上層堆積土を除去すると、墳丘裾に沿って東に落ち込みがあり、さらに墳丘裾より10.3m東側で立ち上がりが確認できた。古墳周溝であると判断する。周溝埋土は、東西両肩部分は墳丘盛土等周辺土砂が流出し周溝へ落ち込んでいる。そのため肩部分だけ窪んだ形状を成している。平成16年度調査ではこの西側の窪み部分のみを墳丘裾溝状遺構として認識していたが、今回の調査でさらに東側で立ち上がりがみられることから水平堆積している⑯・⑰・⑱についても周溝埋土であると判断した。周溝の深さは約0.4mである。周溝下層である土層⑯からは須恵器壺片が出土した。周溝底部からは自然木(樹種:マツ属複葉管束葉属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ヤマグワ)が多数出土しており、古墳築造後周溝付近に植生していた樹木の枝が落ち込んだものと推測できる。なお出土樹木の自然科学分析結果は付章3に掲載しているので、ご参照頂きたい。

第4層は、基盤層の遷移層である。土層⑯が該当する。水平に堆積する。トレンチ北東隅第4層上面で落ち込みを検出した。この落ちが古墳に伴う遺構(周堤帯など)か否かを確認するために南側にトレンチを拡張した。その結果土坑になることが判明し、このトレンチ内では周堤帯は検出されなかった。さらに東側には馬蹄形の地割が残存しており、周堤帯が存在する可能性もあるが、土地境界の石垣が崩落する可能性があり調査を断念した。第5層は、基盤層である。土層⑯・⑰・⑱・⑲が該当する。

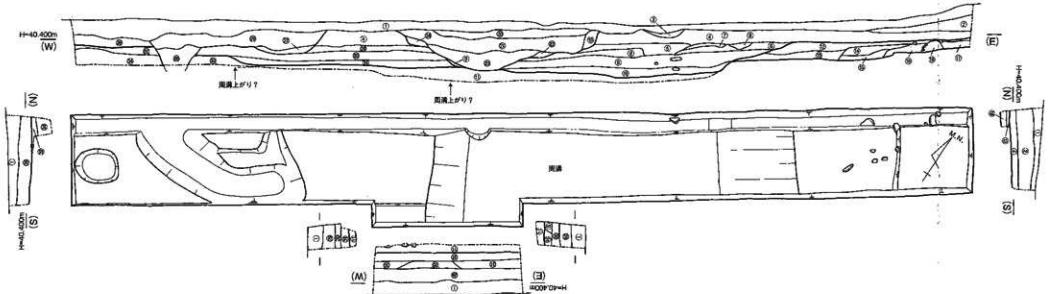
②遺物

第2・3トレンチより須恵器片が出土した(第18図)。1は須恵器壺体部破片である。第2トレンチ第2層墳丘直上堆積土(土層⑪)より出土した。外面は平行叩きのちカキ目を施し、内面は同心円の当て具痕が残る。2は同じく須恵器壺体部破片である。第3トレンチ第3層周溝下層(土層⑯)より出土した。外面は平行叩きのちカキ目を施し、内面は同心円の当て具痕が残る。

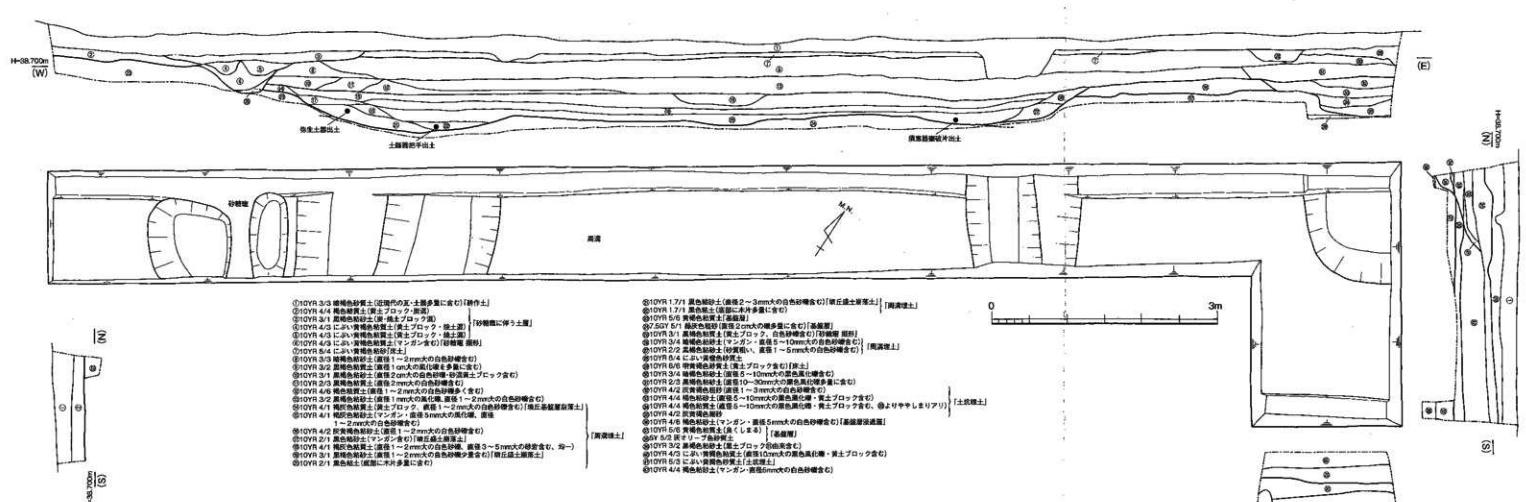


第16図 第2トレンチ平・断面図(1:50)

第1 トレンチ



第3 トレンチ



第17図 第1・3トレンチ平・断面図(1:50)

2個体とも調整・胎土が類似しており、
同時期の遺物である可能性が高い。

第6節 調査のまとめ

①各トレンチの検討

第1トレンチでは、前方部前端部周溝の立ち上がりが検出されることを期待したが、予想以上に搅乱を受けており周溝規模を確定させることができなかつた。可能性として周溝幅4.0~4.5mと7.5mの両案を掲

げておく。後円部周溝については第3トレンチの調査で東側の立ち上がりを確認した。平成16年度の調査成果と合わせると、後円部周溝幅は10.3mとなる。前方部前堀部第1トレンチ北側(平成15年度調査第9トレンチ)で検出した周溝幅は5.5mであり、3ヶ所の調査区で周溝幅に開きがみられる。ただし特に前方部は後世の削平や搅乱を受けており古墳築造時の遺構面がかなり削平されていると考えられる。そのことが比較的残存状況の良い後円部との数値の開きになって現れていると思われる。また第3トレンチで周堤帯は確認されなかつた。

第2トレンチでは平成15年度調査第1トレンチに統く前方部側邊部墳丘盛土のラインを検出することが出来た。

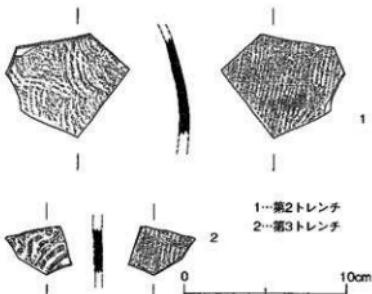
②墳丘復元案

以上のように墳丘北側およびその周溝規模をおおよそ把握することが出来た。これまでの墳丘測量やトレンチ調査により推測した復元案とほぼ合致する結果となっている。6年間にわたる調査が一応の完了をみたことから、ここで平成12年度から今年度までの調査を踏まえて再度復元案(第19図)を提示し、現時点での見解を述べる。

墳丘 後円部については平成12年度(第3トレンチ)・16年度(第1~4トレンチ)の調査で墳丘裾を検出した。玄室奥壁中心部を基点に直径39mの円周に復元することが出来る。これは平成13年度の墳丘測量の結果および、字限図や航空写真などのデータとも符合する。段築は墳丘測量図より後円部が2段築成となることが解る。テラスの幅は、最も良好に残存している墳丘北東部で約2.0mを測る。

前方部については、前方部前端の位置が平成15年度(第6~10トレンチ)調査成果より明らかになった。前方部長25mを測り、後円部を合わせた墳丘長は64mになる。同じく石屋形をもつ王墓山古墳は、後円部直径30m、前方部長16m、全墳丘長46mとなる。菊塚の方が、墳丘規模が大きく、後円部直径および前方部長の比率と比較して前方部が長い。

前方部の形状は、調査地が削平・搅乱を受けており確実な見解を得ることは出来なかつたが、平成16年度(第1・3・4・6トレンチ)および第17年度(第2トレンチ)の調査において前方部側邊部の墳丘裾ラインをおおよそ把握した。各トレンチには、墳丘盛土と推測される黒褐色土が検出され、その検出位置をもとに墳丘裾ラインを復元したが(前方部復元案A)、黒褐色土の残存状況が不良であり、確定させるには至っていない。ただし平成15年度(第2トレンチ)調査で検出さ



第18図 菊塚古墳出土土器実測図(1:3)

れた土は土質から墳丘土である可能性が高いため、少なくとも平成15年度第2トレンチよりも外側(北側)に、墳丘側辺部があったと推測される。これらのことと踏まえると、2通りの復元が想定できる(第19図)。

まず、調査で確認した北側側辺部を基準に復元したのが、前方部復元案A案である。この案では北側側辺部を直線的に後円部にまで延長すると、後円部端の主軸線上につながる。この復元案によると前方部北側隅部は第6トレンチ付近となる。ただし、この復元案ではくびれ部がかなり太くなり、また前方部幅も後円部直径を超える。次に墳形を重視して復元したのが、前方部復元案B案である。調査成果による根拠は薄いが、前方部幅を後円部直径とほぼ同じと推定して復元した。後円部直径と前方部長の比率を重視して作成した。この復元によると、墳丘中であると推測した平成15年度第2トレンチも内側に収まり矛盾しない。この復元では、北側側辺部を直線的に後円部まで延長すると後円部中心につながる。

いずれにせよ、前方部側辺部の墳丘裾ラインは復元案A案からB案の範疇に収まると考えられる。

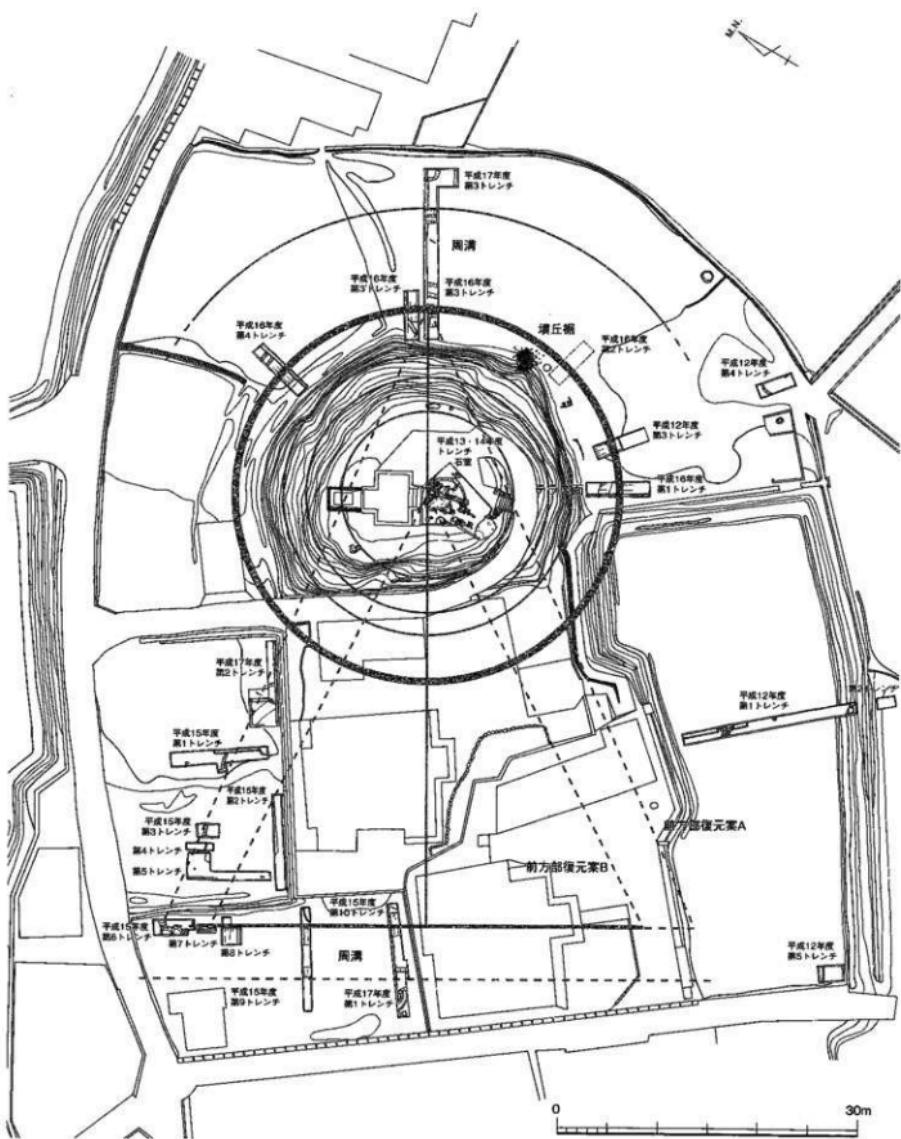
周溝 平成15年度(第10トレンチ)調査で前方部前端部の周溝の存在が明らかになった。周溝幅は5.5mを測る。さらに南側で周溝の幅を確定しようとしたが(平成17年度第1トレンチ)、擾乱が激しく4.0~7.5mの間に取まるという事しか解らなかった。また平成17年度(第3トレンチ)の調査では後円部にも周溝が存在することが明らかになった。周溝幅は10.3mになる。

前方部側辺部については周溝の立ち上がりを検出するところまで今回も調査出来なかつたが、第2トレンチ西壁および同トレンチ拡張区北壁の土層断面を観察すると、墳丘裾から基盤層が緩やかに下っており周溝が存在する可能性が高い。

これで古墳墳丘全周にわたり周溝が巡ることが明らかとなった。後円部・前方部前端部の調査結果から、周溝は基盤層を削り出して作られている。周溝幅は後円部と前方部で開きがあるが、これは前方部が後世の削平を受けているためであると考えられる。そのため前方部についても本来の周溝幅は10m近くあった可能性がある。

周堤 字限図や過去の航空写真では盾状の周堤が確認され、本来は存在していたと考えられる。予想される位置付近にトレンチを掘削したが(平成12年度第6トレンチ・平成17年度第3トレンチ)、明確に検出されなかつた。なお、古墳北側の高まりは現在盾状になつてないが、圃場整備前には盾状になっていたそうである。旧地形の残存ラインは、平成15年度調査第6トレンチ北側にある納屋北側角付近の土手状の高まり付近である。現地形でも古墳北側が高く南側が低くなっているが、おそらく北側周堤は基盤層削り出し、南側周堤(現在は削平されている)は盛土によって構築されていたと推測する。

菊塚古墳は、今年度の調査で一応の確認調査を終えた。前方部は後世の削平をかなり受けており確実な見解は得られなかつたが、墳丘の規模についておおよその数値を提示することが出来た。確認調査という性格上全面的な調査は行っていないため、今後史跡整備に向けた調査で検討する点も多い。特にくびれ部の位置は現状では確認することが困難であるし、墳丘の築造構造や石室前庭部に関しても今後確認する必要がある。



第19図 堤丘復元案(1:500)

付章1 平成14年度出土遺物

平成14年度調査で石室内から出土した遺物のうち整理作業が完了したものについて、紙面を借りて報告する。報告するのは、須恵器2点(器台付装飾壺1点・大型器台1点)である。今回の報告で石室内出土遺物のうち古墳に伴う土器の報告はすべて完了した。今後は昨年度未報告の装身具および、保存処理中の馬具・武具類などの整理作業を順次実施・報告していく予定である。

第1節 須恵器

須恵器は玄室床面上層では大半が破片で出土し、床面直上では完形に近い杯身・壺蓋、右袖付近と石屋形付近で壺や横瓶の破片が出土している。土師器は床面直上から高壺、壺、タコ壺型土製品が出土している。なお、須恵器のうち、杯身・壺蓋、高壺については平成14年度国庫補助報告書に、壺、壺、横瓶および土師器は平成16年度国庫補助報告書にて報告しているのでご参照願いたい。

【器台付装飾壺】 器台付装飾壺が玄室より1点出土している(第22図)。玄室床面上層および直上から複数の破片で出土した(第20・21図)。このうち底部周辺の破片の出土位置を検討すると、玄室南西側付近を中心に散布しているのがわかる。特に底部が輪状に検出された箇所(第21図トーン部分)は、最終埋葬時の原位置を保っていると考えられる。底部以外の破片は、玄室内ほぼ全域に破片で散らばっており規則性はない。このことは器台付装飾壺が立てられて底部が多少埋まっていたが、後世再利用時に上部を人為的に破損されたことを示している。石室崩落時などの破損ではなく、人為的に破損されたという根拠は、鹿の小像が左側壁の目地の間に埋め込まれていたこと、後述する大型器台の出土状況と明らかに異なった底部付近の出土状況からである。なお、床面上層では黒色土器など後世の再利用時の遺物も同一面で出土しており、今回紹介した須恵器2点の破損もこの段階であった可能性が指摘できる。

器台付装飾壺は、大型器台上に壺を結合した形態である。口径20.8cm、器高53.2cm、脚径26.9cmを測る。外反する壺口縁部は、若干肥厚した断面三角形を呈する。壺頸部には2条の凹線を上下2箇所に配し、上段凹線上側、下段凹線上側には波状紋をそれぞれ1条ずつ配する。下段凹線下側には垂直方向の櫛描紋を配する。櫛描紋は下側から上側に向かって刻まれている。頸部上段凹線上には、勾玉を模したと思われる三日月状の突起が等間隔に接合されている。残存している突起は4つであるが、配置を勘案すれば本来は計5つあったと推測できる。壺肩部は張らずに丸みを帯びている。その上面には鹿の小像が乗っている(後述)。

器台口縁は若干内湾ぎみに斜め上方へ伸び、口縁端部は若干下垂し、断面が不正な方形を呈する。外面には粗雑なカキメのち4条の波状紋が施されている。口縁部と脚台部の接合部には、断面三角形の突帯が作り出されている。脚台部は中央部や上側まで直下した後、大きく外反し安定度を高めている。4段透かし(上1段が長方形、下3段が三角形)を4方向に持つが、必ずしも等間隔ではなく、形状、高さも若干異なっている。脚台は2条×4組の凹線で区画されている。最も上の区画は櫛描紋で上下方向に装飾されている。櫛描紋は下側から上側に向かって刻まれている。上から2・3段目の区画はそれぞれ2条の波状紋が施されている。また上から4段目の区

画は他の区画よりも上下幅が広いため、波状紋は3条の波状紋が施されている。最も下の区画は、加飾が行われていない。

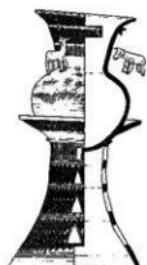
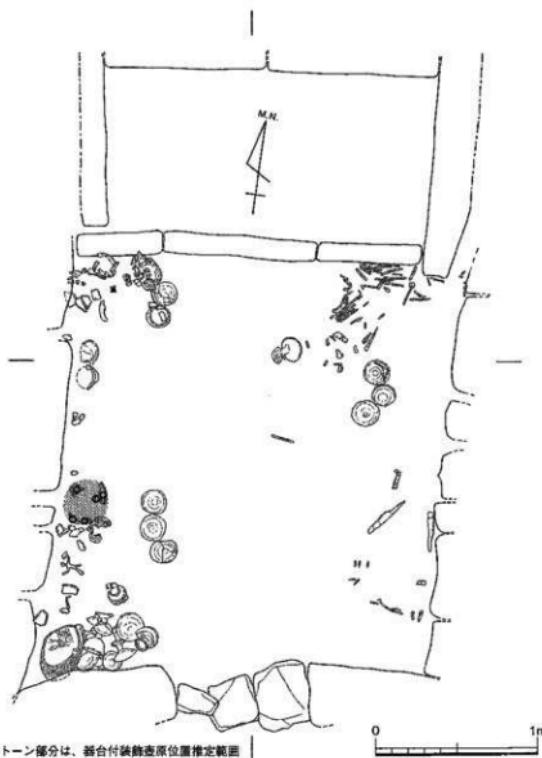
肩部上面の鹿の小像は3匹分の破片が残存するが、肩部の剥離痕跡からみて4匹あったことは確実である。図化したものは残存状態の良い雌鹿2匹である。この雌鹿はお互いに向かい合うような方向に立っている。この間に左向きの雄鹿がいる。この小像は僅かに角と後ろ足の断片が確認されただけであるが、本体に固着していた偶蹄目の足跡から向いている方向が確認できた。右向きの雌鹿は高さ5.8cm。両耳、左脚を欠失している。頭部は下げたままで歩行中の状態を表現している。左向きの雌鹿は高さ8.4cm。右耳、左後ろ足、左前足首などを欠失している。頭部を上げ、頸を右に傾け、静止した状態を表現している。この他にも小像の角と耳の破片が出土している。このことから残存していない小像のうち1匹は、雄鹿であったことが確実である。よって小像は雄雌それぞれ2匹、計4匹の鹿で構成していたと考えられる。

【大型器台】 大型器台が玄室より1点出土している(第23図)。一部は玄室床面直上からも出土しているが大部分が床面上層から複数の破片で出土した(第20・21図)。器台付装飾壺と同様に底部の出土位置・層位を検討したが、どの部位の破片も出土位置に規則性もなく、出土層位も床面上層からが大部分であった。底部の破片の中には、他の出土遺物上に覆い被さるような状況で出土するなど、器台付装飾壺とは異なった出土状況を呈する。このことから大型器台は、原位置から抜き取られた後に破損されたと考えられる。

大型器台は、口径32.4cm、器高41.0cm、脚径25.8cmを測る。若干外反する口縁部は、端部が丸みを帯び下側を肥厚させている。容量の大きな坏部は、上方の凹線付近から内弯する。外面には、上方および中央付近の2箇所にそれぞれ2条の凹線を配す。沈線で区画された箇所には、波状紋が1条施されている。中央付近の沈線下方には、ナデ消されやや不明瞭になった斜め方向の細かなタタキの痕跡が確認できる。坏部内面は上方が横ナデ、下方がナデ上げ、指オサエのち一部横ナデが施されている。なお坏底部は、欠損しているため形状は不明であるが、脚部との接合状況が観察できる。口縁部と脚台部の接合部には、断面三角形の突帯が作り出されている。脚台部は突帯から下側7.0cm付近まで直下した後、大きく外反し安定度を高めている。4段透かし(上1段が長方形、下3段が三角形)を4方向に持つが、必ずしも等間隔ではなく、高さも若干異なっている。脚台は上から順に2条・2条・1条・2条・2条の凹線で区画されている。最も上の区画は、板状工具の小口面を押し付けて施紋したと考えられる列点紋で上下方向に装飾されている。この区画の中央付近にやや強い目の横ナデが入っているため、部分的にはこの施紋が上下に分割されている。上から2・3段目の区画には、左斜め方向に歪んだ狭い間隔の波状紋がそれぞれ1条施されている。また上から4・5段目の区画には、右斜め方向に歪んだ広い間隔の波状紋がそれぞれ1条施されている。5段目の区画の波状紋は中央付近にごく弱い横方向のナデが筋状にあるため、部分的だが上下に分割されている。最も下の区画は、加飾が行われていない。脚台部はかなり歪みが生じており、不安定である。平面形も不整な円形となっている。

第2節 小 結

【須恵器について】 今回紹介した須恵器は、他の器種とほぼ同時期のものと評価できる。先述の

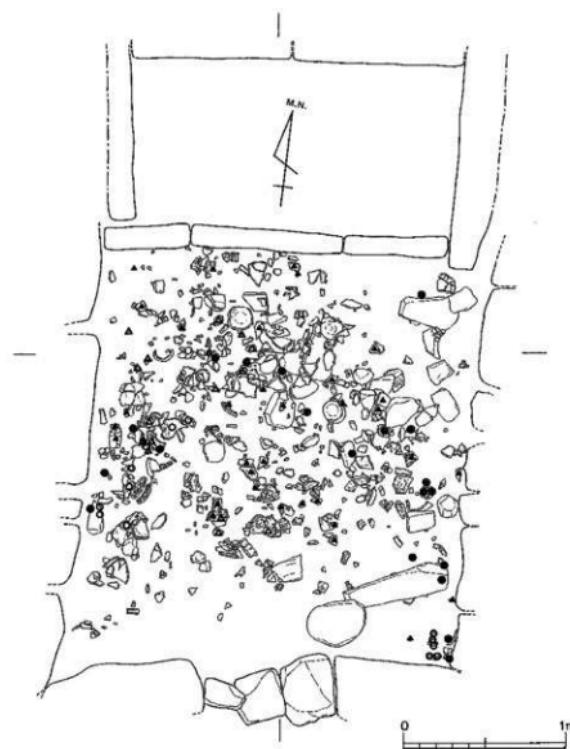


○…器台付装飾壺底部破片
●…器台付装飾壺表破片



△…大型器台底破片
▲…大型器台破片

第20図 主体部須恵器出土状況図①(床面直上) (1:30)

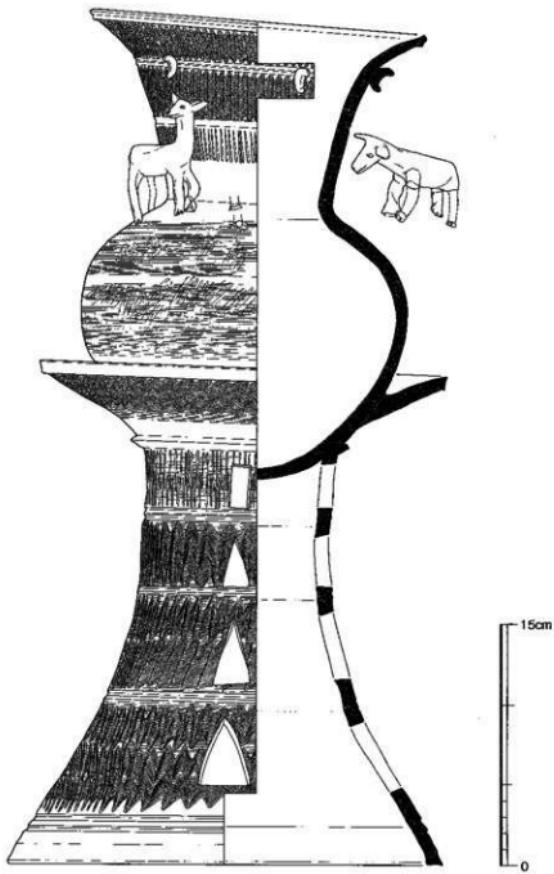


○…器台付装飾壺底部破片
●…器合付装飾蓋破片



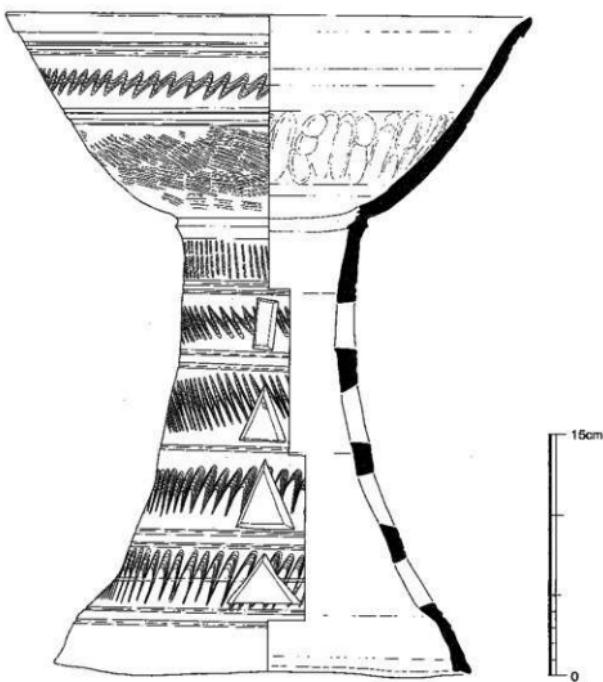
△…大型器台底部破片
▲…大型器合破片

第21図 主体部須恵器出土状況図②(床面上層) (1 : 30)



第22図 菊塙古墳主体部出土器台付装飾壺(1:3)

通り器台付装飾壺は底部の出土状況から最終埋葬時の原位置を推測することが出来た。一方、大型器台は調査当初、装飾壺と対になる位置に原位置があったと推測していた。しかし接合検討の結果、底部付近の破片で床面上から出土したものは皆無で、大部分が床面上層の、しかも他の遺物の上面に散布した状態で出土していることがわかった。いずれにしても器台付装飾壺と大型器台の大きさは他の遺物と比較しても突出しており、二個一対という意識の元で副葬されたことは間違いないであろう。二個一対をなす大型須恵器は石室入口の左右や被葬者頭部などの主要な位置に据えて祭祀を行ったことが推測される。このような例は一部では5世紀末頃から、多くは



第23図 菊塚古墳主体部出土大型器台(1:3)

6世紀前半頃から広がりを見せており、本古墳の年代観とも矛盾はない。ただし、本例のように異なるった器種で二個一对を構成している例は少数であり、その評価は今後の課題と言える。

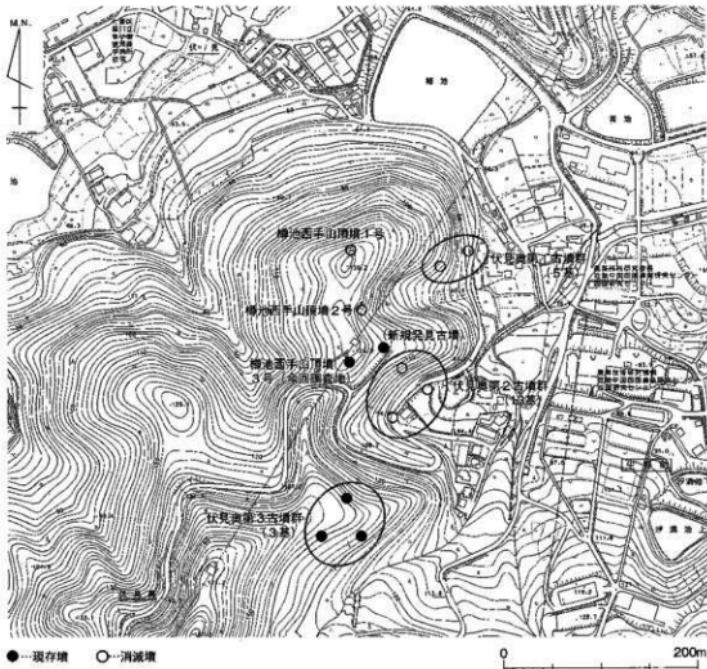
次に器台付装飾壺について記す。この器種は山田邦和氏の分類(山田1998)の装飾付壺I類、柴垣勇夫氏の分類(柴垣2003)のI 1 b類に該当する。この型式は山田氏の集成をみても類例が少なく(山田1998)、類似した型式のものは大阪府・兵庫県・鳥取県などで散見できる。香川県内からは同型式のものはないものの、計11点の装飾付須恵器が出土している。出土古墳は、普通寺市王墓山古墳、観音寺市母神山古墳群、綾川町浦山古墳群、まんのう町安造田古墳など、首長墳もしくは首長墳に準じたクラスからのみ出土している。この傾向は他地域の傾向と共通しており、一定以上の階層のみ副葬が可能な遺物であったと評価しても良いだろう。

第6章 樽池西手山頂墳3号

第1節 調査の経緯と経過

樽池西手山頂墳3号は、大麻山から北西に派生する尾根(樽池西手山頂)上に立地する。周辺は「伏見奥古墳群」と称し、かつては横穴式石室を主体部にもつ小規模な円墳が群集している状態であったが、開墾等で現在はその殆どが消滅している。近年隣接する尾根で開発行為が進んでいることから、現存している古墳の把握が必要であると考え、調査をするに至った。

調査期間は、平成17年2月10日～3月10日および11月1日～12月1日と2ヶ月にかけて行われた。現地調査は市教育委員会担当者を調査員として、奈良大学考古学研究室学生(平成16年度調査)・四国学院大学考古学研究部学生および地元作業員が参加した(個別氏名は例言に記した)。整理期間は調査中から適宜行い、平成18年3月31日に終了した。



第24図 調査地位置図(1:5,000)

調査日誌(抄)

平成16年度調査

2月10日(木) 天候: 晴

調査区の水準点測量を行う。調査区周辺の枝木の伐採、落ち葉の除去を行う。

2月14日(月) 天候: 晴

腐植土の除去を行う。その後畦を十字に設定、地区割りをし、流入土を掘り下げる。奥壁側は天井石から約10m下まで掘削した。玄門部から巻道部にかけては側石の残存状況が悪く、プランがはつきりしない。



第25図 流入土除去

2月15日(火) 天候: 曇のち雨

畦の断面図を作成し、除去する。さらに下層を掘削する。奥壁より炭化物を含む層を検出する。現地から東南に40mほど離れた地点で、山口君が横穴式石室1基を発見する。遺跡地図には明記されていない古墳である。周囲は消滅したものも含めて、他にも数多くの古墳が存在していたと考えられる。

2月16日(水) 天候: 曇時々雨

引き続き石室内流入土を除去する。A 1・B 1の地区では焼土と思われる黒く焼け締まった土層が堆積している。2・3区の境界付近は割石が多数散乱している。側壁が転落したものか、閉塞石か検討の必要あり。そのA 2区側壁部分から土師器坏が出土した。

2月17日(木) 天候: 曇

昨日の雨で石室内に溜まった水を除去する。石室埋土を掘り下げ、基底石と思われる石を検出した。2・3区の境界にある石材を平面図に図化し、レベリングする。

2月18日(金) 天候: 曇のち雨

石室内埋土の掘り下げ。2・3区の境界にある石材は閉塞石と思われる。

2月20日(日) 天候: 晴時々曇

昨日の雨で石室内に溜まった水を除去する。B 1区の掘削。埴丘測量のための杭打ちをする。主軸線の再設定を行う。新中軸線でセクションベルトを設定し、引き続き掘削する。

2月21日(月) 天候: 晴

A 2・B 2・3区流入土の掘削を行う。

2月22日(火) 天候: 晴

A 2・4区、B 3・4区流入土の掘削を行う。

2月23日(水) 天候: 晴

A 1区、B 1区床面上層堆積土の掘削を行う。

2月24日(木) 天候: 曇のち雨・雪

午後より雨・雪が降り、現場での作業を中止する。

2月25日(金) 天候: 晴時々曇

昨日の雨で石室内に溜まった水を除去する。

B 1区で検出した人骨を精査する。A 1区・B 1区およびA 1区・2区の境界ベルトの土を除去したところ、多量の人骨が出土した。午後からは、新たに検出した骨の精査を行う。人骨の周囲を掃除し、写真撮影をする。

2月26日(土) 天候: 晴時々曇

土井ヶ浜ミュージアムの松下氏が人骨の取り上げに来訪。松下氏の所見によると人骨は2体分である。



第26図 人骨取り上げ

2月27日(日) 天候: 晴

1・2区を床面まで引き続き掘削する。4区は流入土を除去した後、炭混黒褐土の掘削を行う。

奈良大学文化財学科考古学研究室の植野浩三先生が来訪された。



第27図 指導風景

2月28日(月) 天候: 晴時々曇

床面上層堆積土の掘削を行う。

3月1日(火) 天候: 晴

1・2区は床面まで掘削を行う。

3月2日(水) 天候: 晴時々曇

羨道入口の遺物出土状況の作成とレベリングをした。

石室内を清掃した後、石室の遺物出土状況の写真撮影を行う。

3月3日(木) 天候: 曇のち雨

石室に残る遺物の取り上げを行う。その後石室の写真撮影を行ったが、雨のため途中で断念する。光波を使用して、石室実測の割付の練習をする。

3月4日(金) 天候: 曇

光波を使用して、石室実測の割付を行う。

午後より、奥壁・左側壁および仕切石の実測をする。



第28図 石室実測

3月5日(土) 天候: 晴

引き続き奥壁・左側壁および仕切石の実測をする。

午後より、右側壁の実測にとりかかる。

3月6日(日) 天候: 晴時々曇

墳丘測量を行う。石室基底部平面図および縦・断面図を作成する。

3月7日(月) 天候: 晴

引き続き墳丘測量を行う。

3月8日(火) 天候: 晴

石室の埋戻しを行う。

3月9日(水) 天候: 晴

道具の片づけを行う。

3月10日(木) 天候: 雨

石室内で出土遺物の水洗・注記・接合を行う。

図面の整理をする。



第29図 墳丘測量

平成17年度調査

11月1日(火) 天候: 曇のち晴

発掘調査用具の準備をする。古墳周辺の草刈りと落ち葉を除去する。

昨年度の調査で石室内に充填した土糞を取り出す。

11月2日(水) 天候: 晴

前庭部調査区の設定をする。前庭部の腐植土を取り除き、その下層の堆積した流出土を除去する。

土器の破片が多く出土する。

11月4日(金) 天候: 晴

羨道部で検出した炭混黒褐色土の範囲を確定するため、前庭部の部分を炭混黒褐色土上面まで掘

り下げる。炭混黒褐色土の範囲は開口部付近までである。この土は後道石敷きから開口部床面上面に東半を中心堆積しており、最終段階の閉塞石下層までに至っている。

11月7日(月) 天候: 晴

開口部付近墳丘裾で、石列を検出する。墳丘裾列石若しくは墳丘内列石の可能性を考え石列が続くか墳丘にビンボールを刺して確認したが、存在しなかった。

11月8日(火) 天候: 晴

前庭部の掘削を行う。出土より古墳副葬品と思われる須恵器のほか10・11世紀代の土師器を検出する。後世の再利用によるものか。普通守市役所の海道氏が見学に来る。墳丘北側部分に周溝を確認するためのトレンチ(北トレンチ)を設定する。

11月9日(水) 天候: 晴

ひきづき前庭部の掘削を行う。後道石敷き下層から開口部にかけて葛道・墓壇の掘形と思われる落ちを検出する。埋上は、黒褐土で上面には古墳石材の破片が堆積する。

11月10日(木) 天候: 晴

北トレンチの掘削を行う。トレントの中央部分で周溝埋土と思われる黒褐土を検出する。

県埋蔵文化財センターの片桐孝浩氏来訪。

11月11日(金) 天候: 曇のち雨

前庭部床面検出状況の写真を撮る。前庭部床面遺物出土状況図を作成する。出土土器のレベリングを行う。

午後は雨のため作業は中止する。

11月14日(月) 天候: 晴

北トレントの周溝埋土を掘削する。土師器(10・11世紀代か?)が出土した。

前庭部縦断・横断畦の土層断面図を作成する。写真撮影を行う。縦断・横断畦の出土部分をはずす。

11月15日(火) 天候: 晴

前庭部縦断・横断畦の床面堆積土の部分をはずす。

11月16日(水) 天候: 曇のち晴

午前中は、室内で土器洗いを行う。午後より現

地作業を行う。

墳丘の規模を確定するため、墳丘西側にトレント(西トレント)を設定する。

11月17日(木) 天候: 晴

西トレントの腐植土・堆積土を除去する。

前庭部は、墓道は東側に曲がって平面検出された。検出状況を写真撮影する。確認のため、縱横の断ち割りサブトレントを入れる。断ち割りの断面からみても東に曲がると判断した。

11月18日(金) 天候: 晴

墓道部分の敷石を実測し、レベリングする。写真撮影を行う。閉塞石の見通し図(玄空側から)を作成する。

西トレントの堆積土を除去する。

11月21日(月) 天候: 晴

閉塞石の見通し図(墓道側から)を作成する。墓道部分の敷石の床面縦断面図を作成する。西トレントにサブトレント(排水溝)を入れ、墳丘を断ち割る。

11月22日(火) 天候: 晴

西トレント西半で周溝の肩を検出する。周溝埋土を掘削する。トレント東半壁面では墳丘盛土の堆積状況が確認できた。

11月24日(木) 天候: 晴時々曇

北トレントの写真撮影を行う。

前庭部墓道断ち割りの断面写真を撮る。

11月25日(金) 天候: 晴時々曇

北トレントの平・断面図を作成する。レベリングを行う。西トレントの写真撮影を行う。県文化行政課の信里芳紀氏来訪。

11月29日(火) 天候: 曇

西トレントの平・断面図を作成する。レベリングを行う。墓道埋土を掘り下げる。墓道平・断面図を作成する。掘削後の写真撮影。北・西トレントの埋め戻しを行う。

11月30日(水) 天候: 晴

古墳石室内と前庭部の埋め戻しをする。

発掘道具の片付けを行う。

12月1日(木) 天候: 晴

室内で、出土遺物の洗浄を行う。

第2節 調査の方法

調査は2ヶ年にわたり行われた。平成16年度は横穴式石室の調査および墳丘測量、平成17年度は周溝および前庭部の調査を実施した。

調査地調査前の状況は、墳丘は山林で覆われ、石室内は流入土で埋没し、奥壁の天井石一石と奥壁・側壁の上から1・2段目の石材のみ露出している状況であった。

調査の手順としては、まず掘削のため必要最低限の樹木を除去し、石室および前庭部は中軸線に縦断畦、奥壁より1.5m間隔で横断畦を設定し、流入土の除去を行った。作業効率のため適宜、土層断面の観察・縮尺10分の1での図化および写真撮影を行いながら畦を除去し、下層の掘削に努めた。床面の遺物出上面で一旦精査し、縮尺10分の1で出土状況の図化および写真撮影をし、地区ごとに番号を付け取り上げた。壁体および床面、閉塞石の実測は縮尺10分の1にて行った。写真撮影は各段階において適宜行った。なお確認調査という性格上、遺構の保存を考え床面石敷きの取り上げや閉塞石の解体は行わず、現状での把握に努めた。前庭部については墓道の検出・掘削を行った。石室墓壇の検出および掘削は壁体・床面保存のため実施しなかった。

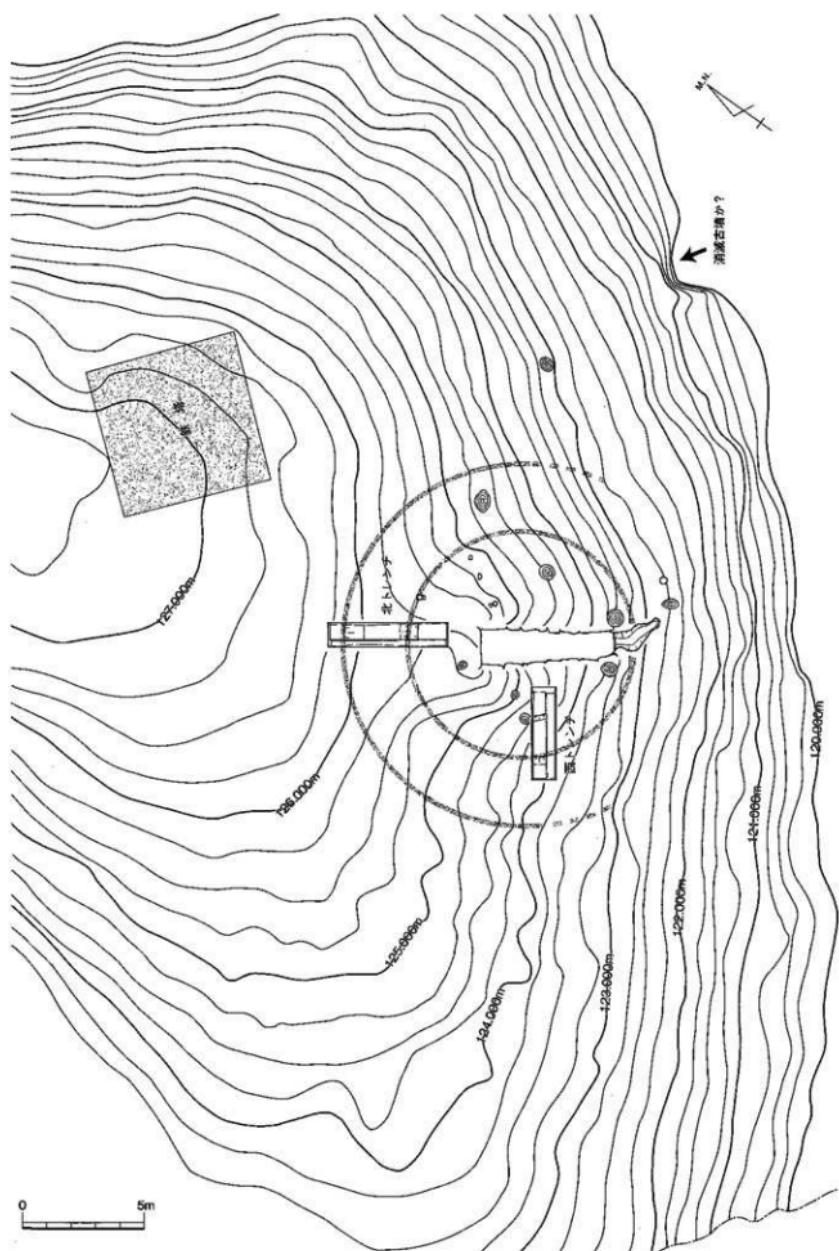
墳丘裾の調査は、石室中軸線北側延長部分と仕切石横断西側延長部分にそれぞれトレーナーを設置し、墳丘裾の位置・周溝の規模を確認した。今回の調査で墳丘は裾部分のみの掘削に留めたため、墳丘築造構造までは確認していない。

墳丘測量は光波と平板を用いて行い、縮尺100分の1で図化した。

調査終了後は石室崩落の危険性を防ぐため、土表・盛土にて埋め戻し保護措置を行った。

第3節 古墳の立地

樽池西手山頂墳3号は、普通寺市南西部に立地する大麻山から北西に舌状に派生する尾根上(樽池西手山頂)に位置する。尾根の東斜面には伏見奥第一古墳群、南東斜面には伏見奥第二古墳群があり、その尾根に南接する尾根北斜面には伏見奥第三古墳群が存在する(第24図)。一昔前は「南方の大麻山中腹からこれを遠望すれば百穴の如く開口して頗る壯觀であった(矢原1973)」が、戦後の開墾で現在はその殆どが消滅してしまった。消滅墳も含めると現在認定されている古墳だけでも、伏見奥第一古墳群で5基、伏見奥第二古墳群で13基、伏見奥第三古墳群で3基を数える。樽池西手山頂墳3号はその名前の通り、樽池西手山頂に築かれた3つの古墳のうち一番下手南側に作られた古墳であったが、残る上手北側2基の古墳(樽池西手山頂墳1号・2号)は既に消滅している。調査にあたり周辺を踏査したが、1号・2号は現在ではその痕跡すら留めていない状況であった。また踏査の結果、3号から東へ40m下った斜面で横穴式石室を一基、新規に発見した(第24図)。いかにこの場所が古墳の密集している地域だったかが窺える。現在残存している古墳は殆どが古墳時代終末期の横穴式石室を持つ小規模な円墳であり、尾根上・斜面より下界を望むように不規則に多数築造されている。樽池西手山頂墳3号を含め、終末期の群集墳として位置付けられる。



第30図 塗丘測量図およびトレンチ配置図(1 : 200)

第4節 調査の成果

①墳丘・周溝(第30図)

古墳は山頂よりやや南へ下った緩やかな斜面上に築造されている。現状で円形の高まりがあり円墳であることが確認できる。開口部より約4.0m程下ったところで急勾配になる。

墳丘裾は、石室中軸線北側延長部分に北トレンチ、仕切石横断西側延長部分に西トレンチを設定した。

北トレンチ(第31図) トレンチの規模は、1.0m×5.0mを測る。土層は4層に大別される。

第1層は、表土である。土層①・②が該当する。

第2層は、周溝埋土である。土層③・⑤～⑦が該当する。周溝は奥壁より北に2.2mから4.8mの区間基盤層を掘り込む。幅は2.6mを測り、最深部は奥壁より北に4.0mの地点で0.7mを測る。埋土は墳丘側からの流れ込み(土層⑨・⑪～⑬)、周溝外側からの流れ込み(土層⑩・⑭～⑯)と水平堆積(土層③・⑤～⑧)に分けられ、数時期にわたって埋没したと考えられる。土層⑫より土師器坏(第36図4)が出土した。

第3層は墳丘盛土である。土層⑮～⑯が該当する。水平堆積しており締まりは悪い。

第4層は基盤層である。暗褐色砂質土で非常に良く締まる。

西トレンチ(第31図) トレンチの規模は、1.0m×3.8mを測る。土層は4層に大別される。

第1層は、墳丘盛土上層堆積土である。土層①・⑦が該当する。

第2層は、周溝埋土である。土層②～⑥・⑯が該当する。中軸線より4.4m西の地点で掘り込みが始まる。周溝の深さは0.40m、幅は立木がありこれ以上西に扯張することが困難であったため確定できなかった。埋土は墳丘側から周溝へ向かって流れ込むように数回にわたり堆積している。

第3層は、墳丘盛土である。土層⑨～⑫が該当する。水平堆積している。

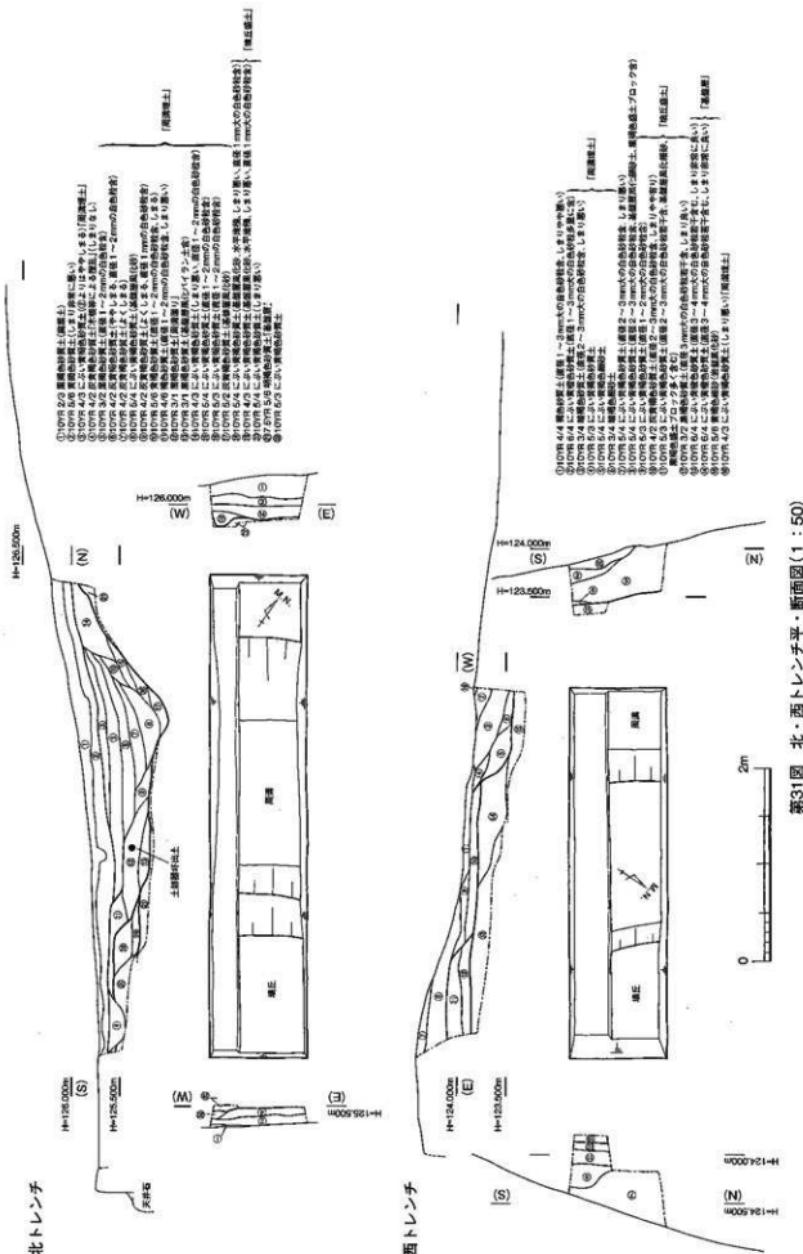
第4層は、基盤層である。土層⑬～⑯が該当する。にぶい黄橙色砂質土・黄褐色細砂で非常に良く締まる。

2ヶ所のトレンチ調査で、墳丘の規模は約9.5m、周溝の幅は2.6mを測ることが明らかとなった。なお当古墳より17.0m南東に斜面を切り落として形成された窪み(第30図矢印部分)があり、別の横穴式石室が存在していた。

②前庭部(第33・38図)

3.0m×3.0mのトレンチを設定し、床面まで掘削を行った。土層の堆積状況については、石室内埋土層とともに後述する。床面で墓道を検出した。幅は約0.7mで開口部より1.0m付近で東に折れる。深さは最深部で0.15mを測る。墓道埋土上面は安山岩の破片が散逸している。ちなみに石室内床面下層には、墓道に続き墓壇が構築されていることが窺える。遺物出土状況は、床面および床面上層堆積土(土層⑬・⑭・⑯)を中心に出土した。殆どが碎片で、散逸した状況で出土した。

また開口部左袖付近で安山岩の石材を4石連なる状態で検出した。墳丘裾列石若しくは墳丘内列石の可能性を考え、さらに裾円周上に石材が配置されているか推定部分にピンボールを刺し確認したが、他の石材は検出されなかった。検出した4石は墳丘裾列石・墳丘内列石ではなく、義道・閉塞石など石室壁体の石材を後世に搔き出したものと推測される。



第31図 北・西トレシチ平・断面図(1:50)

③横穴式石室(第32図)

天 井 天井石の石材は花崗岩である。石窓の石材は天井石以外すべて安山岩である。天井石は、奥壁の1石のみ残存している。丸みを帯びた形状である。露出していたため表面はかなり風化している。

他の天井石は周辺にも存在しないことから、意図的に抜き取られ運び去られたものと考える。

奥 肇 基底石は2石である。大形の石材で最大面を設置面に据えている。上面の高さは124.000mに揃える。

基底石より上の石材は中形のものを用いている。最上段および上段2段目の石材はある程度目地を揃えるが、間の石材は左面に小形の石材を充填するなど規則性はみられない。床面から天井石までの高さは、1.50mである。

左右側壁との関係は、基本的に奥壁を設置した後側壁を据えているが、上段では奥壁に側壁の石材を渡している。

側 肇 玄室左右側壁とも基底石は各4石である。大型の石材を使用し、上面の高さは123.800mに揃える。この高さは玄門および羨道基底石とほぼ一致する。

基底石より上の石材は、奥壁側は部分的に中形のものを用いているが、それ以外は小形のものを使用している。積み方は乱雑で、目地を通す意識はなかったと思われる。壁体はその殆どが最大面を設置面とする横位に使用されているが、玄門近くの小形石材の一部は壁体間を充填するよう縦位および斜めに用いられている。

壁体の重複関係を検討すると、基底石から上段までいずれも奥壁側から羨道側に積まれていることが窺える。

奥壁側より2.0~3.5m羨道側の区間は壁体間に隙間がみられる。特に右側壁は基底石を除き石材がほとんどない部分がある。石室内埋土土層の項目で後述するが、この箇所は石室内が擾乱を受けている。本来から隙間があったというよりも、後世の搅乱が起因しているものと推測する。

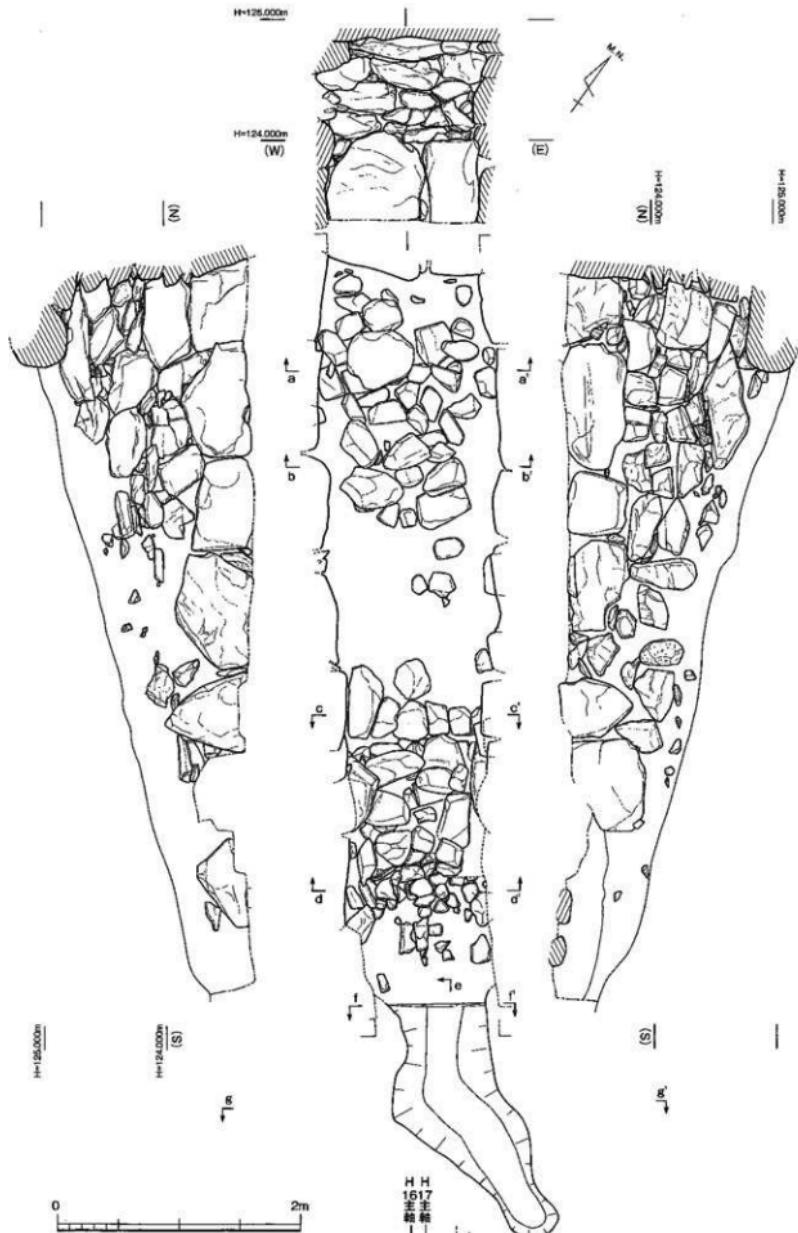
なお側壁実測図は、奥壁・床面石敷・閉塞石等で壁体が隠れる部分があることから、左右壁面からの見通し図を図化した。

玄 門 玄門は奥壁より約3.5m南側に位置している。奥壁より5石目の基底石のみが左右ともに三角形を呈しており床面には横方向に列石が配置されていることから、列石を仕切石と判断し、5石目の基底石は玄門立柱であると解釈する。互いに向かい合うように、床面には垂直に設置され、高さは他の基底石と一致する。

仕切石 玄門床面に、最大面を設置面とし縦位に6石連なり配置されている。石材の長辺は0.6~0.2mのものまであり、羨道側の辺を揃え設置している。

羨 道 羨道は基底石のみ残存する。左側羨道は1石、右側羨道は2石であるが、床面敷石の範囲や墓壙の平面プランを勘案すると、本来は3石あった可能性が高い。高さは他の基底石と一致する。

閉塞石 玄門南で閉塞石を検出した(第34図)。最下層は仕切石に南接し横方向に列石状に配置する。その後開口部側から乱雑に上に重ねていく。石材は小形のものから中形のものまで様々である。重層単位を検討すると、少なくとも3回にわたり積み重ねており、石材間に充填されている土砂の違いから、積み重ねの単位は時期差を反映していると思われる。一番外側の閉塞石の下層には須恵器坏が挟まれている。



第32図 石室実測図(1 : 40)

平面プラン 石室は単室構造である。石室主軸は磁北より約35°西偏し、南東方向に開口する。石室の平面プランは、奥壁の幅・玄室中軸幅・玄門幅を比較すると、1.3m・1.5m・1.1mとやや胴張りの形態である。羨道幅は1.1mで、玄室に比べ若干狭い。無袖式の横穴式石室である。石室残存長は6.0mを測り、このうち玄室長は3.7m、羨道長は2.3mである。

床面 玄室床面は3層構造になっている(第33図)。まず、最下層は黄褐色砂質土で良く締まる。基盤層置土の可能性が高い。その上に0.10~0.20m大の小形の平石を敷き隙間を黒褐色粘土で充填し、平滑になるよう仕上げている。現状では石敷きは玄室北部奥壁側でのみ検出され、南部には石が殆ど残っていない。しかし玄室南部床面には石据付け若しくは抜き取りの痕跡があり、石敷きは玄室床面全面にあったと推測する。おそらく後世の攪乱で抜き取られたものと考えられる。玄室北部奥壁側ではさらにその直上に大形の平石を数枚配置する。

石室埋土層(第33図) 石室上部の紛失により、石室内には流入土が堆積していた。調査前の時点では奥壁上段より2・3石目の高さまで土砂が堆積しており、側壁は完全に埋没していた。

まず玄室部分の土層は10層に大別される。

第1層は腐植土である。土層①~③・⑫が該当する。

第2層は玄室内流入土上層である。土層④~⑥が該当する。

第3層は玄室内流入土中層である。土層⑦~⑨が該当する。土層⑦は板状に割れた安山岩礫を多く含むことから石室上部石材を搅乱の際打ち欠いていることが窺える。

第4層は玄室北部(奥壁側)焼土層で、石室再利用に伴う土層である(写真図版13-3)。土層⑩・⑪が該当する。土層⑮は黒褐色炭でよく締まる。土層⑭はその炭を多く含むにぶい黒褐色粗砂である。土層の状況から土層⑮は石室の再利用時に火を焚いた跡と考えられ、土層⑭はその後の堆積土であると推測する。土層⑯は奥壁から左右側壁北部に沿って堆積しており、火を焚いた時発生した炭を後から奥壁・側壁側の隅に寄せたと推測する。なお、土層⑯黒褐色炭は炭化物同定のため自然科学分析を行い、その詳細は付章3に掲載した。第4層を除去した際、同底面より中型の石材を3石検出した(写真図版13-4)。再利用時に意図的に配置されたものなのか、周辺の側壁が崩落したものなのかは定かでない。

第5層は玄室内流入土下層である。土層⑬が該当する。玄室南部から北部奥壁側へ向かって流れ込んでいる。褐色粗砂で雲母・炭を含み、締まりは悪い。土器破片を多く含む。同じく玄室南部の左右側壁は石材が少なく取り外されたような状態であることから、土層⑬は後世の攪乱に伴うもので、玄室南部より壁体を一部取り除いて奥壁側へ侵入したと判断される。

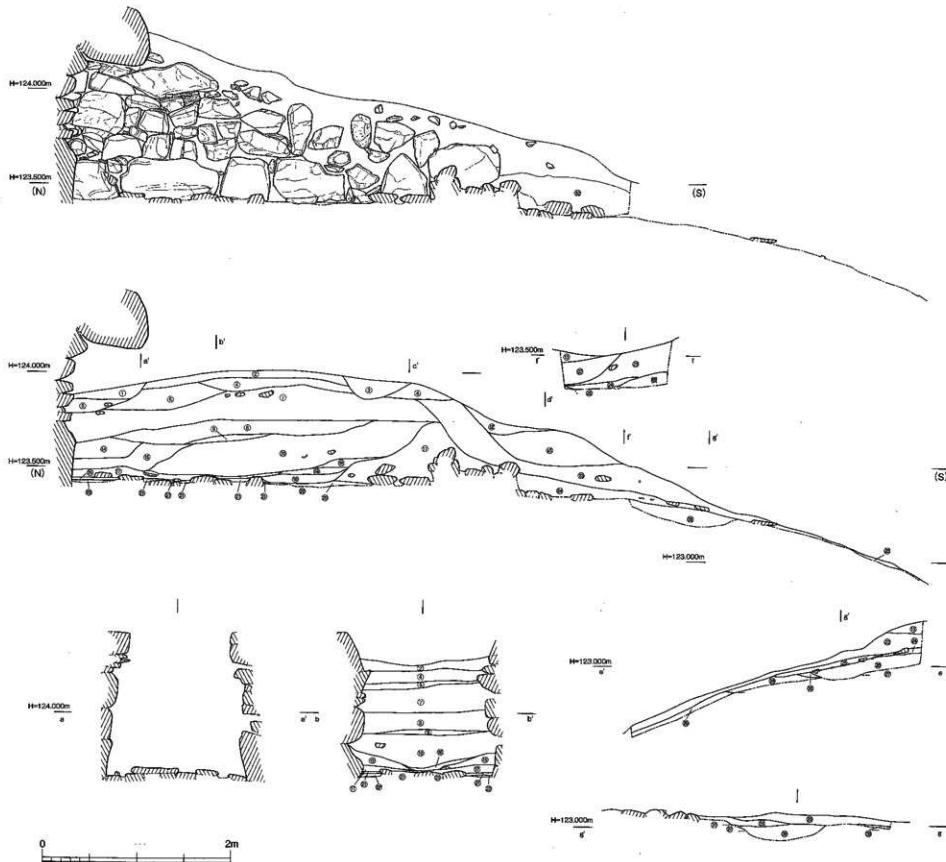
第6層は玄室内流入土最下層である。土層⑭~⑯が該当する。攪乱後の堆積土であると推測される。

第7層は閉塞石充填土である。土層⑰が該当する。今回閉塞石の解体は行わなかったため詳細は不明であるが、上層⑰は閉塞最終段階の充填土である。

第8層は最終床面(大形平石)直上間層である。土層⑱が該当する。灰褐色粘土である。

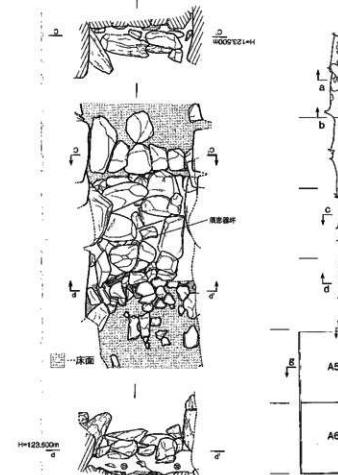
第9層は石敷き隙間充填土である。土層⑲が該当する。小形平石の隙間に粘土層を充填し床面が平滑になるよう仕上げている。

第10層は床面置土である。土層⑳が該当する。基盤層に近い土質である。おそらく墓壙を構築した際基盤層を掘削した土をそのまま利用したものと思われる。土層⑳も本来土層⑲と同じく床面置土の面であったと考えられるが、後世の攪乱を受けている。

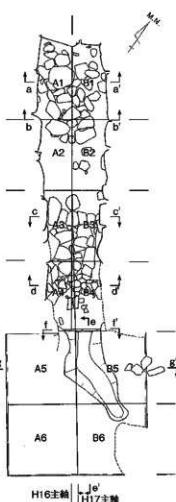


第33図 石室内および前庭部 埋土土層断面図(1:40)

- ①10Y 3/2 黒褐色砂質土
- ②10Y 3/2 黒褐色砂質土
- ③10Y 3/2 黒褐色砂質土
- ④10Y 3/2 黒褐色砂質土(淡土色ブロック・灰斑)
- ⑤10Y 5/4 一二二、六角形砂質土(淡土色ブロック・灰斑)「玄室内地入土上層」
- ⑥10Y 2/2 黒褐色砂質土(淡土色・灰色・白色の混合したもの)
- ⑦10Y 4/4 黑褐色砂質土(淡土色・灰斑)
- ⑧10Y 4/4 黑褐色砂質土(淡土色・灰斑)「玄室内地入土中層」
- ⑨10Y 4/4 黑褐色砂質土(淡土色・灰斑)「玄室内地入土下層」
- ⑩10Y 3/2 黒褐色砂質土
- ⑪10Y 3/2 黒褐色砂質土(淡土色)
- ⑫10Y 2/2 黑褐色砂質土(淡土色ブロック・灰・じしょ)
- ⑬10Y 4/4 黑褐色砂質土(淡土色)
- ⑭10Y 4/4 一二二、六角形砂質土(淡土色・灰斑)
- ⑮10Y 5/4 黑褐色砂質土(よし・くろ)
- ⑯10Y 3/4 黑褐色砂質土(土色)
- ⑰10Y 3/4 黑褐色砂質土(土色)
- ⑱10Y 2/2 黑褐色砂質土(土色)
- ⑲10Y 4/4 黑褐色砂質土(淡土色)
- ⑳10Y 4/4 黑褐色砂質土(淡土色・灰斑)
- ㉑10Y 5/4 一二二、六角形砂質土(淡土色・灰斑)
- ㉒10Y 2/2 黑褐色砂質土(淡土色)



第34図 閉塞石 立面図(1:40)



第35図 調査区地区割り図

羨道から前庭部にかけての土層は9層に大別される。

第1層は羨道部分の流入土上層である。土層⑬が該当する。玄室部分の流入土が玄室から羨道へ向かって流れ込んでいる。

第2層は左側羨道部分の攪乱土である。土層⑭が該当する。平面は土坑状の円形を呈す。炭混じり黒褐色土である。土器破片を多く含む。

第3層は羨道から前庭部にかけての出土である。土層⑮が該当する。玄室部分の流入土が玄室から羨道へ向かって流れ込んでいる。

第4層は羨道部堆積土である。土層⑯が該当する。土器破片を含む。

第5層は前庭部出土である。土層⑰が該当する。土器破片を含む。

第6層は墓道埋土である。土層⑱が該当する。黒褐色砂質土である。墓道埋土上面には安山岩破片が散逸しており(写真図版20-6)、石室石材を加工した痕跡が覗える。墓道埋土からは、土器は殆ど出土していない。

第7層は前庭部堆積土である。土層⑲~⑳が該当する。斜面に沿って自然堆積している。

第8層は墳丘盛土流出土である。土層㉑が該当する。

第9層は基盤層である。土層㉒が該当する。褐色粗砂である

遺物出土状況(第36~38図) 玄室内からは土器・鉄器・人骨が出土した。

土器は、第2~7層および第8層最終床面(大形平石)直上間層、最終床面(大形平石)直上・石敷き(小形平石)直上、第9層石敷き隙間充填土上面、第10層床面置土直上より出土した。床面付近での出土状況は完形のものが多く、比較的原位置に近い状態を保っていると思われる。第8層最終床面(大形平石)間層および最終床面(大形平石)直上より2回目の追葬時の土器が、第10層床面置土直上より初葬時の土器が出土した。

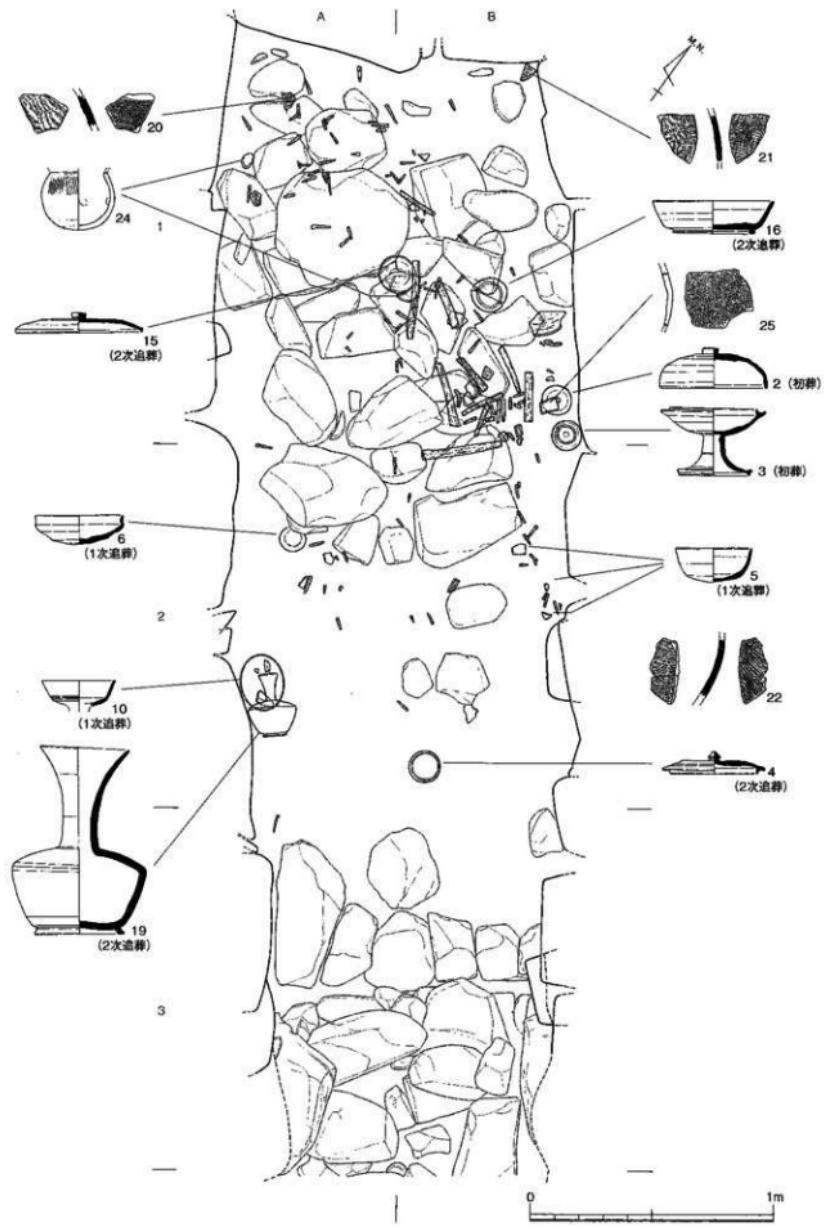
鉄器は、第8層最終床面(大形平石)直上間層および最終床面(大形平石)直上・石敷き(小形平石)直上、第9層石敷き隙間充填土上面より出土した。

人骨は第6層玄室内流入土最下層土層㉓および第8層最終床面(大形平石)直上間層より出土した。

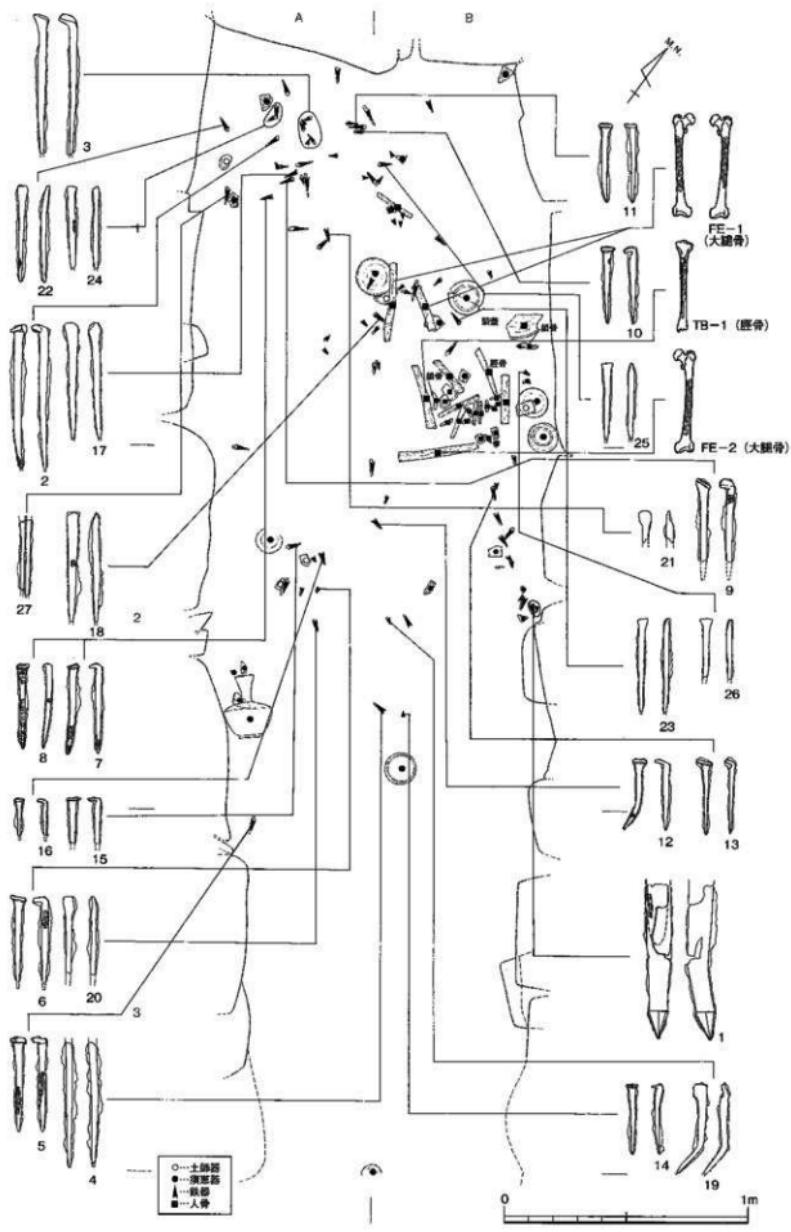
羨道部から前庭部にかけては土器破片が散逸した状態で出土した。追葬もしくは後世の攪乱時に玄室内より掻き出されたものと判断される。原位置は保っていないと思われるものが殆どであるが、墓前祭祀等と推定される土器の配置はみられなかった。ただし同器種の土器が2個体ずつ羨道部から前庭部にかけて4セット出土している。

3面の床面・石敷き・配石と各遺物の出土状況の相関関係を勘案すると、2回目の追葬時の床面(最終床面)は大形平石直上となる。ただしこの大形平石は配置から棺台である可能性も考えられる。

また初葬時の床面は床面置土直上であることから、1回目の追葬時床面は石敷き(小形平石)直上である可能性が高い。



第36図 玄室遺物出土状況図①(1 : 20)



第37図 玄室遺物出土状況図②(1:20)

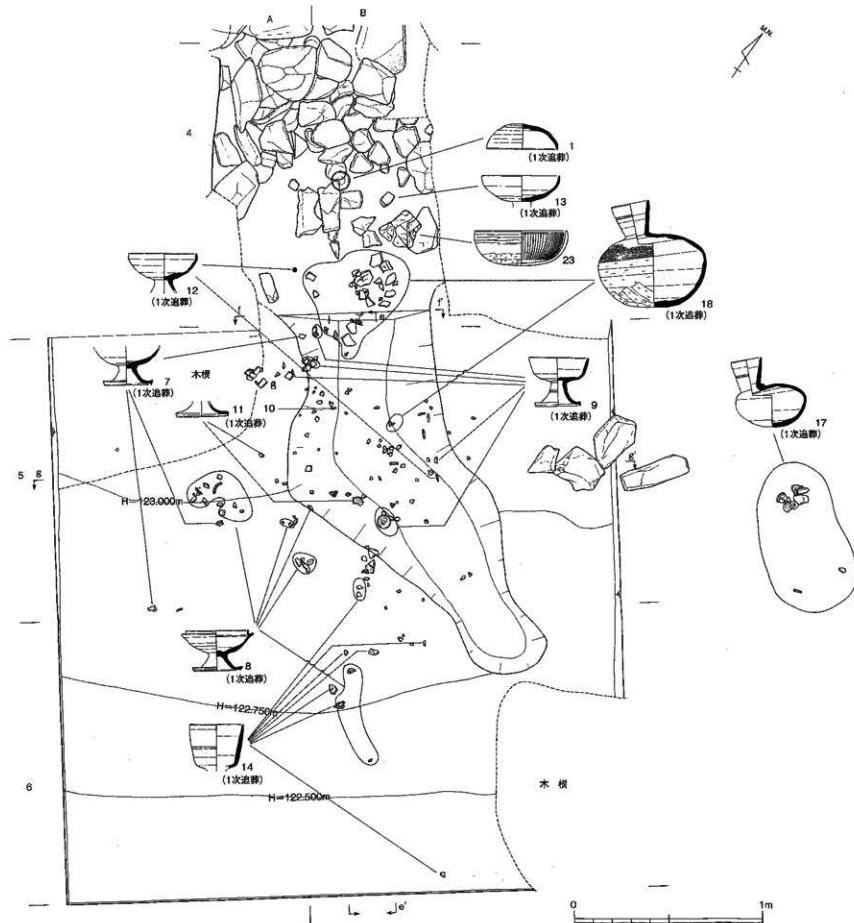
④遺物

出土した遺物は、土器・鉄器・人骨である。人骨の所見については、松下氏より玉稿を賜り、付章2に掲載しているのでそちらを参照されたい。

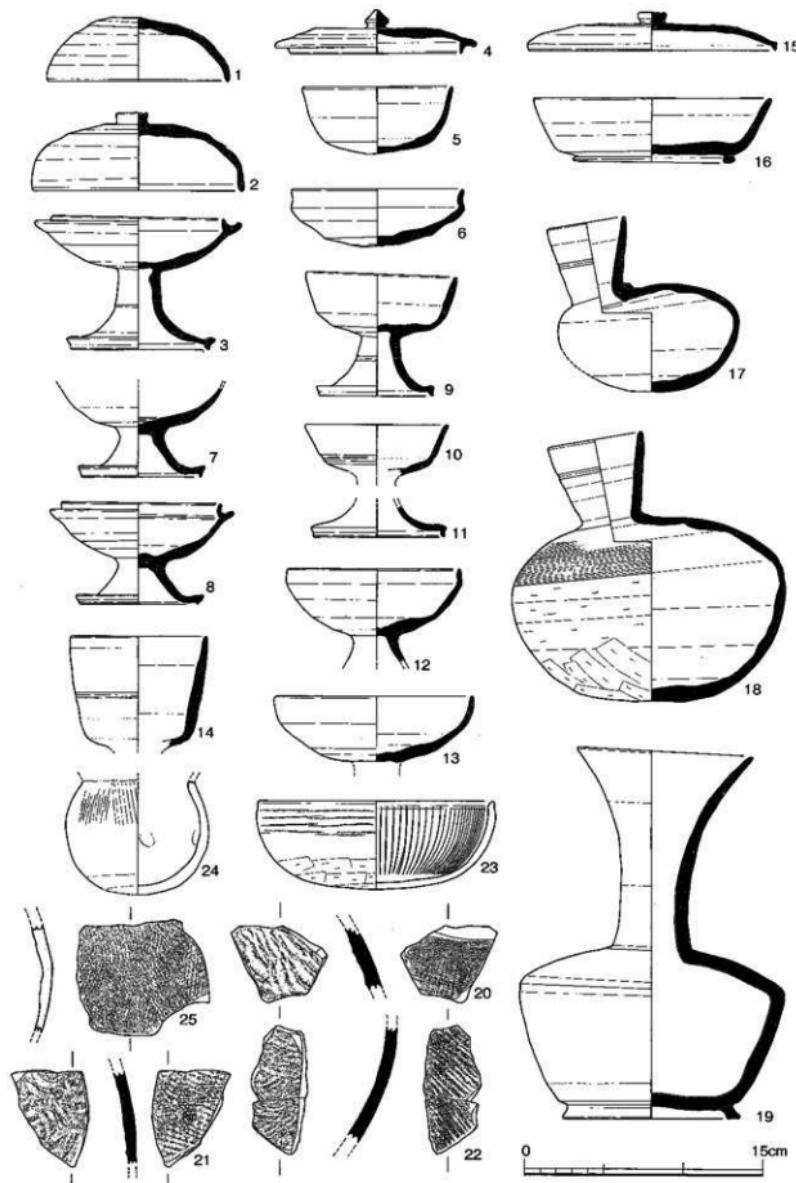
土 器

土器は石室内および前庭部を中心に出土した(第36・38図)。全部で約30個体存在する。初葬や追葬など古墳被葬者の埋葬に伴うものと後世の攪乱若しくは再利用に伴うものとに分かれる。なお古墳埋葬に伴う土器の年代観については、香川県内における7世紀の土器編年について様相1~4にまとめた信里氏の分類(信里2002)に準拠した。

古墳埋葬に伴う土器(第39図) 1は須恵器壺蓋である。口径11.4cm、器高4.9cmを測る。天頂部と体部境の稜は完全に消滅し、丸みを帯びた形態である。壺身になる可能性もある。口縁端部は丸く收める。天頂部外面はヘラ切り後未調整である。様相2に該当する。2は須恵器有蓋高壺蓋である。扁平な摘みを有し天頂部と体部境の稜線は若干残る。口縁端部は丸く收める。天頂部外面の1/2程度回転ヘラ削りを施す。3は須恵器有蓋高壺である。壺部は口縁(たちあがり)が受け部より若干上方に突出する。脚部は長脚で中央に一条の沈線を施し、端部は下方と外上方に摘み出す。壺部底部外面は2/3程度回転ヘラ削りを施す。2と3は口径値や型式的特徴からセッタ関係になると推測される。両者ともTK209型式に該当する。4は須恵器壺蓋である。宝珠摘みを有し、かえりは受け部より下に突出する。天頂部外面は回転ヘラ削りし平坦に仕上げる。様相2に該当する。5は須恵器壺身である。口径9.4cm、器高4.2cmを測り、口径が小さく器高が深い。箱型の形態であるが底部が若干丸みを帯びる。底部外面はヘラ切り後未調整である。様相2に該当する。6は須恵器壺身である。口縁を強く押さえナデしているため体部に屈曲を生じる。壺蓋になる可能性もあるが、この様な形態の土器は綾川町打越窯や三豊市三野古窯址群でも確認されており、窯跡から出土する蓋・身の割合やセッタ関係、窯詰めの方法などから、蓋を伴わない身であることが指摘されている(信里2002)。香川県下でみられる壺身のタイプのひとつといえるため、ここでは壺身として報告する。底部外面はヘラ切り後未調整である。7は須恵器有蓋高壺である。接合が困難だったため図化できなかったが、同一個体として受け部・たちあがりの破片が存在する。壺部は底部がやや丸みを帯び深手である。外面に1/3程度回転ヘラ削りを施す。受け部・たちあがりは矮小化している。脚部は低脚で端部は折り返し面を持ち、下方に摘み出す。8は同じく須恵器有蓋高壺である。接合が困難なため合成復元している。壺部は底部がやや丸みを帯び深手である。外面に1/2程度回転ヘラ削りを施す。受け部・たちあがりは矮小化している。脚部は低脚で端部は面を持ち、若干下方に摘み出す。7・8は法量・形態的に類似している。型式的には3の有蓋高壺よりも後出のものと考えられる。様相1に該当する。9は須恵器無蓋高壺である。壺部は箱型を呈し、底部外面を回転ヘラ削りする。脚部は低脚で端部は折り返し面を持ち、下方に摘み出す。10は須恵器無蓋高壺部である。箱型を呈し、底部外面を回転ヘラ削りする。体部下半に沈線を施す。11は須恵器無蓋高壺脚部である。脚部下半のみ残存する。低脚で端部は折り返し面を持ち、下方に摘み出す。10・11は胎土・焼成が酷似しており、同一個体の可能性が高い。様相2に該当する。12は須恵器無蓋高壺である。壺部はやや深手の楕形を呈しており、体部上半に稜をもち口縁部にかけてやや内弯する。焼成は不良である。13は同じく須恵器無蓋高壺である。壺部のみ残存する。壺部はやや深手の楕形を呈しており、体部上半に稜をもち口縁部にかけて若干内弯する。底部外面に1/3程度回転ヘラ削りを施す。焼成は不良である。12・13



第38図 羨道・前方部遺物出土状況(1:20)

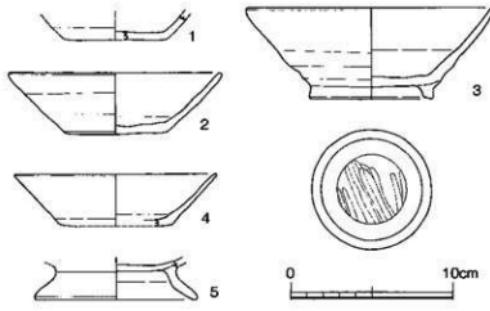


第39図 榛池西手山頂墳3号出土土器実測図①(1:3)

は様相2に該当する。14は台付碗である。坏部のみ残存する。接合が困難なため図上復元している。深手のワイングラス状の形態である。口縁端部は若干内弯する。体部中程に沈線を一条施す。様相2に該当する。15は須恵器坏蓋である。口径15.4cm、器高2.4cmを測る。扁平な摘みを有し、口縁部はかえりを持たない。口縁端部は下方に摘み出しており、鈍い稜を成す。天頂部外面は1/2程度回転ヘラ削りを施す。16は須恵器坏身である。口径14.75cm、器高4.1cmを測る。体部は直線的に外傾し口縁端部は丸く收める。高台は底部やや外側に貼り付けており、形状は短く退化の傾向にある。底部外面は回転ヘラ削りを施す。15・16は口径が合致する点、焼成がお互いにやや不良であることや型式的特徴からセット関係になると推測される。様相4に該当する。17は須恵器平瓶である。最大径は11.2cmを測る。頸部から口縁部にかけてやや内弯し、肩部は丸みをおびる。底部はやや平底を呈す。頸部から口縁部中程に沈線を一条施す。底部外面はヘラ切り後未調整である。様相2に該当する。18は須恵器平瓶である。最大径は17.0cmを測る。頸部から口縁部にかけてやや内弯し、肩部は丸みをおびる。底部はやや平底を呈す。頸部から口縁部中程に沈線を一条施す。外面は肩部にカキ目を施し体部下半は回転ヘラ削り、底部は手持ち削りを行う。様相2に該当する。19は須恵器長頸壺である。口縁部は外反し、端部は丸く收める。肩部は体部の上方に位置し、やや丸みを持つ。高台はハの字状に踏ん張った形態をしている。体部下半外面は回転ヘラ削りを施す。様相3～4に該当する。20・21・22は須恵器壺破片である。外面にカキ目(20・21)および平行叩き(21・22)、内面に同心円の當て具痕が残る。23は土師器坏である。口縁部は罐部内側に面を持ち、外側上方に若干摘み出す。出土した時点で既に粉砕しており接合が困難なため、残存している部分を元に合成復元している。体部は丸みをおび、底部はやや平底である。体部上半外面はミガキを施し、底部外面は削りを行う。内面には一段の放射状暗文を施す。24は土師器小形壺である。口縁部は欠損する。摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、体部外面はハケ目が確認できる。底部外面はナデを施す。25は土師器壺体部破片である。外面にハケを施す。

後世の攪乱若しくは再利用に伴うもの(第40図) 1・2・4は土師器坏である。1は玄室A2区流入土、2は玄室B1区床面上層堆積土、4は北トレンチ周溝埋土より出土した。体部は直線的に外傾し底部は平底を呈す。体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切りを行う。3・5は高台付碗である。3は玄室A3区流入土より出土した。体部は直線的に外傾し、口縁端部で若干内弯する。高台はほぼ直立気味に貼り付けられ、端部を摘み出すように仕上げる。外面は体部を回転ナデ調整し、底部は幅3mm程度のミガキを施す。5は前庭部A5区より出土した。高台部のみ残存する。2.0cmと長く、ハの字状に広がる形態である。

1～3・5は胎土・焼成が類似しており同時期のものである可能性が高い。9世紀後



第40図 椿池西手山頂墳3号出土土器実測図②(1:3)

第1表 棚池西手山頂墳3号 出土土器観察表

右神岡寺①…第2回・②…第40回、()内数字は復元値

辨認番号	地区名	部位・遺物名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調			調査		胎土	焼成	
								外面	内面	断面	外面	内面			
①-1	B4	表道端 泥瓦土 (土層③)	須恵器 壺蓋	11.4	4.1	-	100	25Y 7/1 灰白	25Y 8/1 灰白	25Y 8/3 淡黄	回転ナデ後、 へラ切り(左回り)、ロクロ は右)未調整	回転ナデ	密	直径1~2mm 人の黒色砂 粒、白色砂粒 を若干含む	良好
①-2	B1 横断 壁	床面直上 (土層② 上面)	須恵器 壺蓋	13.2	4.9	-	約100	25GY 5/1 オリーブ灰	N8/ 灰白	N8/ 灰白	回転ナデ後、 天頂部回転へ ラ切り(左回 り)、ロクロは 左)、つまみ 貼付焼	回転ナデ	密	直径1mm大の 黒色砂粒を多 量に含む	良好
①-3	B1 横断 壁	床面直上 (土層② 上面)	須恵器 壺蓋	10.7	8.4	8.7	99	5B 6/1 青灰	5B 6/1 青灰	-	回転ナデ後、 底部回転へラ 切り	回転ナデ、 底部多方 向ナデ	密	直径1~2mm の白色砂粒を含 む	良好
①-4	B2	玄室内 流入土 屋下層 (土層③)	須恵器 壺蓋	10.65	-	量大様 12.6	100	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	-	回転ナデ後、 天頂部回転へ ラ切り(左回 り)、ロクロは 右)、つまみ 貼付ナデ	回転ナデ	密	直径1~2mm の白色砂粒を含 む	良好
①-5	B2	大形平石 直上側面 (土層③)	須恵器 壺身	9.4	4.2	6.8	50	25Y 8/1 灰白	25YR 7/2 明赤灰	-	回転ナデ後、 底部へラ切り 未調査	回転ナデ	密	直径1mm前後 の砂粒を含む	不良
①-6	B1	床面直上 (土層② 上面)	須恵器 壺身	10.6	3.6	-	100	5B 6/1 青灰	5B 6/1 青灰	-	回転ナデ後、 へラ切り(右 回り)、ロクロ は左)未調整	回転ナデ、 底部一方 ナデ	密	直径1~4mm 大の白色粒を多 量に含む	良好
①-7	A5	表道～ 前庭部 流出土 (土層③)	須恵器 壺身	-	残存 5.65	(7.5)	60	7.5Y 6/1 灰	7.5Y 6/1 灰	7.5Y 6/1 灰	回転ナデ後、 环頂部回転へ ラ切り	回転ナデ	密	直径2mm以下 の白色粒を含 む	良好、 堅硬
①-8	A5	表道～ 前庭部 流出土 (土層③)	須恵器 壺身	(10.0)	6.4	7.4	70	25Y 6/1 黄灰	25Y 6/1 黄灰	-	回転ナデ、回 転へラ切り、 底部未調査	回転ナデ、 底部未調 査	密	直径1~2mm の白色粒を含 む	良好
①-9	B5	高蓋上部 (土層② 上面)	須恵器 壺身	9.4	7.7	7.1	80	5Y 6/2 灰オ リーブ	5Y 7/4 浅黄	-	回転ナデ後、 底部回転へラ 切り、脚部貼 付ナデ	回転ナデ	密	直径1mm前後 の黑色粒を多 く含む	良好
①-10	A2、 B3 横断 壁中	(上層) 表道～ 前庭部 流出土 (土層③)	須恵器 壺身 壺蓋	8.9	-	-	环形 70	N 3/0 暗灰、 N 3/0 灰	N 3/0 暗灰、 N 3/1 灰	N 3/0 灰	回転ナデ後、 环頂部回転へ ラ切り(左回 り)、ロクロ は右)	回転ナデ	密	直径1mm以下 の白色粒を含 む	良好、 堅硬
①-11	B5	墓道上部 (土層② 上面)	須恵器 壺身 脚部	-	-	8.2	脚部 50	N 3/0 暗灰、 N 3/0 灰	N 3/0 暗灰、 N 3/1 灰	N 3/0 灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径1mm以下 の白色粒を含 む	良好、 堅硬
①-12	A4、 B5 横断 壁中	表道～ 前庭部 流出土 (土層③)	須恵器 壺身	10.7	残存 5.8	-	60	5Y 7/1 灰白	5Y 7/1 灰白	-	回転ナデ、脚 部貼付ナデ	回転ナデ、 ナデ(环底 部)	並	直径3mm以下 の白色・黑色 粒を含む	やや 不良
①-13	B4	表道部 泥瓦土 (土層③)	須恵器 壺身	(12.2)	残存 4.2	3.0	50	10BG 6/4 に近い 暗青	10YR 6/4 に近い 黄橙	10YR 6/4 に近い 黄橙	回転ナデ後、 底部回転へラ 切り	回転ナデ、 底部未調 査	並	直径2mm以下 の褐色・茶 色を含む	不良、 軟質
①-14	B6	表道～ 前庭部 流出土 (土層③)	須恵器 台付碗	(8.5)	残存 7.1	(6.2)	40	7.5Y 6/1 灰	N 6/0 灰	N 6/0 灰	回転ナデ	回転ナデ	やや 密	直径1mm以下 の黑色粒を含 む	良好
①-15	A1 横断 壁	大形平石 直上	須恵器 壺蓋	15.4	2.4	-	100	10YR 7/3 に近い 黄橙	10YR 7/3 に近い 黄橙	-	回転ナデ後、 天頂部回転へ ラ切り	回転ナデ	-	直径1mmの 砂塵を多く含 む、直径2~ 3mmの白色粒 を若干含む	不良

押出番号	地区名	層位・遺構名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調			調整		胎土		焼成
								外面	内面	断面	外面	内面	密		
①-16 B1	大形平石 直上	須恵器 环身		14.75	4.1	9.5	99	25Y 8/1 灰白	25Y 8/1 灰白	-	回転ナデ後、 底部回転ヘラ 削り	回転ナデ	密	直径1~4mm の大白色砂粒 を若干含む	やや 不良
①-17 C5	墳丘盛土 波川下 (土層②)	須恵器 平版		4.8	11.05	2.4	80	75Y 5/1 灰 (上) 25Y 7/4 浅黄 (下)	25Y 7/4 浅黄	25Y 7/4 浅黄	回転ナデ後、 底部ヘラ切り 未調整	回転ナデ	やや 密	直径1mm以下 の黑色粒を含む	良好、 堅致
①-18 B4	奥座敷 埋立土 (土層②)	須恵器 平版		5.9	16.9	4.6	95	75Y 6/1 灰	N 7/0 灰	N 7/0 灰	回転ナデ後、 底部下半回転 ヘラ削り、 底部手持ちヘ ラ削り、体部 上半カキ目、 体部上半に凹 き?の痕跡有 り、腹部から 先端上半にかけ 自然輪付着	回転ナデ	密	直径1~2mm の黑色粒を含む	良好、 堅致
①-19 A2	玄室内 流入上 段下層 (土層③)	須恵器 長颈甕		11	23.4	11	100	N 5/0 灰	N 6/0 灰	-	回転ナデ後、 底部下半回転 ヘラ削り(右 回り)、ロクロ は左)、底部 高台貼付けナ デ	回転ナデ	密	直径1~2mm の大白色砂 粒・黒色砂粒 を多く含む	良好
①-20 A1	大形平石 直上 (土層②)	須恵器 甕		-	-	-	-	N 5/0 灰	N 5/0 灰	N 5/0 灰	カキ目	同心円 当真痕	密		良好
①-21 B1	大形平石 直上 (土層②)	須恵器 甕		-	-	-	-	N 5/0 灰	N 5/0 灰	N 5/0 灰	平行叩き、カ キ目	同心円 当真痕	密		良好
①-22 B2	玄室内 流入人 道下層 (土層②)	須恵器 甕		-	-	-	-	N 5/0 灰	N 5/0 灰	N 5/0 灰	平行叩き	同心円 当真痕	密		良好
①-23 B4	奥座敷 埋立土 (土層②)	土師器 环	(14.7)	(5.6)	-	80	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	体部ミガキ、 底部手持ちヘ ラ削り	放射状 暗め	密		良好	
①-24 B1	大形平石 直上 通N15 の下	土師器 小形甕		-	残存 7.25	-	50	5YR 5/6 明赤褐	5YR 5/6 明赤褐	5YR 5/6 明赤褐	体部上半ハケ メ、体部下半 ナデ	指オサエ 粗	直径1~5mm の白色粒を多 く含む		良好
①-25 B1	大形平石 直上 (土層②)	土師器 甕		-	-	-	-	5YR 3/2 暗赤色	5YR 3/2 暗赤色	5YR 3/2 暗赤色	ハケメ	ナデ	粗		良好
②-1 A2	流入人 道	土師器 环		-	残存 1.6	(6.9)	40	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	回転ナデ、底 部ナデ	回転ナデ	密	直径1mm以 下の褐色粒を含 む	良好
②-2 B1	玄室内 流入上 段下層 (土層③)	土師器 环		13.0	3.8	6.3	95	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	回転ナデ、 底部ヘラ切り (左回り、ロ クロは右)未 調整	回転ナデ	密	直径3mm の大白色砂 粒・赤色砂粒 を若干含む	良好
②-3 A3	玄室内 流入下 段(土層③)	土師器 高台付 甕		15.0	5.6	7.3	95	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	回転ナデ、高 台貼付ナデ、 ヘラミガキ	回転ナデ	密		良好
②-4 北トレ ンチ	周溝土 (土層②)	土師器 环	(12.4)	3.2	(7.0)	10	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	回転ナデ、底 部ナデ	回転ナデ	密	直径1mm以下 の褐色粒を少 量含む	良好	
②-5 A5	洪流 一部 直上 (土層③)	土師器 高台付 甕	-	高台 20	9.9	高台 60	75YR 7/6 橙	75YR 7/6 橙	75YR 7/6 橙	ナデ	ナデ	密		良好	

半～10世紀代に推定される。4は13世紀代に該当する。

出土土器の年代は、大きく4時期に分かれる。

1期は初葬の段階である。第36図2・3が該当する。TK209併行期に相当し、6世紀末～7世紀初頭に位置付けられる。他の埋葬段階に比べ初葬段階の土器は2点と少なく、坏類が存在しない。追葬時および後世の搅乱若しくは再利用の段階で石室内から持ち出された可能性がある。

2期は1回目の追葬段階である。1・4～14、17・18が該当する。様相1・2(TK217・TK46、飛鳥I～III併行期)に相当し、7世紀中頃に位置付けられる。この時期の土器が最も出土個数が多いが、1期同様坏類の割合が少ない。7・8は有蓋高坏であるが、通常様相1の段階において編年的に有蓋高坏は消滅している。しかし前段階である1期の有蓋高坏より型式的に後出するものであり、ここでは2期の範疇に入れたが、2期の土器は時期がさらに細分される可能性もある。また2期の土器の特徴として同じ器種・形式のものが2個体ずつセットになっている(7と8、9と10・11、12と13、17と18)ことが挙げられる。なお閉塞石中に須恵器坏を検出した(第32図)。遺構(閉塞石)保存のため取り上げは行わなかったが、おそらく第36図1と同じ形態のもので坏蓋若しくは坏身になり、様相2に該当すると推定される。

3期は2回目の追葬段階である。15・16、19が該当する。様相3～4(TK48・TK21、飛鳥IV・V併行期)に相当し、7世紀末～8世紀初頭に位置付けられる。

20～25は1期～3期中に該当する。

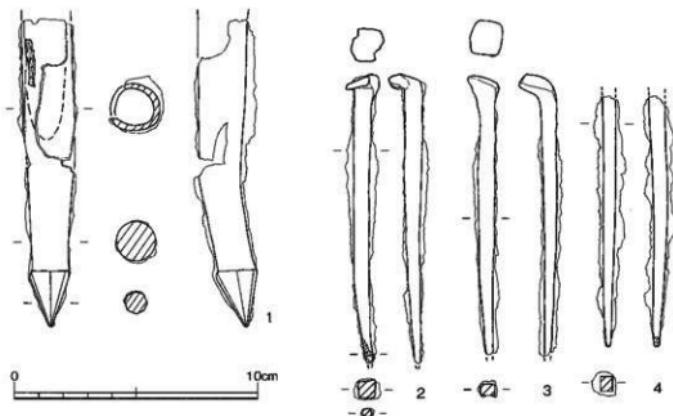
4期は後世の搅乱若しくは再利用の段階である。第37図1～3・5が該当する。9世紀後半～10世紀代に位置付けられる。

鉄器

鉄器は、玄室奥壁側(北部)を中心に出土した。石突1点の他はすべて鉄釘である。出土位置は玄室内のみで、羨道・前庭部からの出土は皆無である。

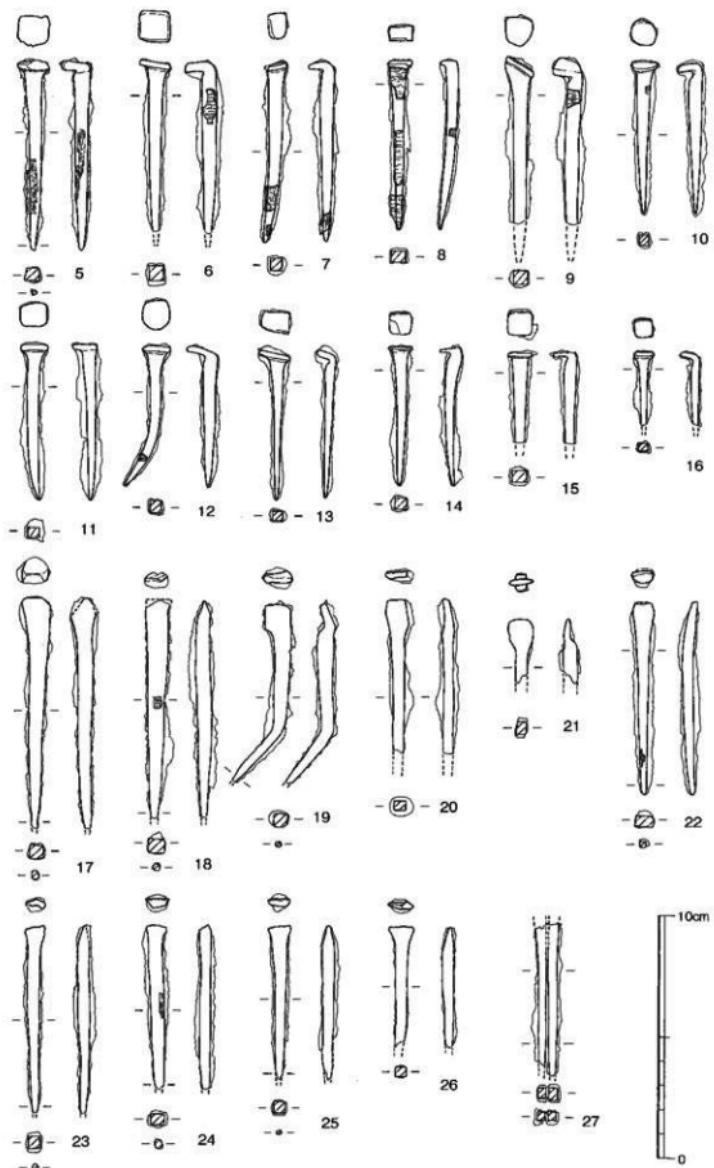
石突(第41図1) 石突は玄室内南東部(B2区)側壁際、追葬面直上から1点出土した。残存状態は悪く、特に袋部の欠損が激しい。折れが生じているため正確な数値ではないが、現状では全長12.7cmを測る。断面形態は袋部から先端付近に至るまでが円形で、先端においては面が作り出されている。明瞭ではないが、八角形を呈すると考えられる。袋部内面には木目が石突の主軸に対し平行して入っているため、柄に装着された状態で副葬されていたことがわかる。目釘孔は袋部の残存状態が悪いため、確認することができなかった。調査において鉄製の目釘が確認できなかつたので、留め具として目釘が使用されていたとすれば、木製のものであった可能性も指摘できる。表面には木質などの付着は確認できなかつた。形態は石突であるが、本来対になるはずの鉄鉗の身が出土していない。他の出土遺物もほぼ最終追葬時の原位置を保っていると考えられることから、鉢身は元々、副葬されていなかつとも推測でき、この遺物には刺突具としての機能が付与されていたとも推測できる。

鉄釘(第41図2～4・42図) いずれも玄室内床面より出土した。鉄釘は破片数で120点以上を数える。このうち頭部が残存するものは50点、先端部が残存するものは54点を数える(重複含む)。最終追葬時の埋納状態を保っているとするならば、約60本の鉄釘が使用されていたことが予想される。このうち、比較的の形態を保っている27点の図化を行った(第41図2～4・第42図5～27)。鉄釘は頭部の形態より2種類に分類が可能である。すなわち鉄棒の片側を打ち伸ばして



第41図 椿池西手山頂墳3号鉄製品実測図①(1:2)

平らにし、それを屈曲させて頭部を作り出したもの(I類)と、鉄棒の両側もしくは片側を平たくしたままで折り曲げずに頭部としたもの(II類)である。I類は頭部が平面方形の形状を呈する。II類はI類の頭部が欠損している可能性のものも存在しているが、明らかに欠損していないものについては、II類に含めた。また鉄棒の両側を平たくしたものと、片側を平たくしたものとでは、頭部の形状、全長、太さなどの差異が認められなかったので、あえて細分は行っていない。I類は31点、II類は19点を数える。また、長さからも大中小3種類に分類できる。以下便宜的に10cm前後を大形品、8cm前後を中形品、6.5cm前後を小形品と細分することにする。大形のものは断面が方形をなすが、長方形のものから正方形に近いものまである。中形・小形のものは、断面が方形をなすものが大部分である。また、頭部の形状との対応関係についても検討を行ったが、明確な差異は認められなかった。棺材と考えられる木質が付着したものは12点しか確認されず、残存状態はきわめて不良である。鉄釘に対して木目が直交しているもの(横目)が8点(第41図2・4・6・8~10・12・18)、平行しているもの(綫目)が4点(第42図5・7・22・24)ある。長さの差異は、すなわち木棺の使用箇所の差異と理解することができ、木目の付着方向と併せて、木棺のどの部分で使用されていたか復元できる可能性がある。なお、鉄釘の出土状況を考慮すると、鉄釘が埋葬当初の原位置を保っていたとは言い切れないが、今後、釘の出土位置、状態、出土層位、さらに人骨の出土状態を詳細に検討することによって、棺体配置の復元が出来る可能性がある。



第42図 樺池西手山頂墳3号鉄製品実測図②(1:2)

第2表 樽池西手山頂墳3号 出土鉄製品観察表

遺物番号	種別	出土地区	出土層位	法量(()は残存部の数値) 長さ(cm) 頭部径(cm)	木質の状態	形態	備考
1	石突	B2	流入土最下層	[12.70] [2.05]	残存頂部より0.8~29cmの間に縦目で付着		
2	鉄釘	A1	石數(小形平石) 直上	[11.90]	1.35	残存頂部より11.0~12.0cmの間に縦目で付着	頭部I類
3	鉄釘	A1	石數(小形平石) 直上	[11.55]	1.30		頭部I類
4	鉄釘	A2堆上	流入土(土層⑩)	[10.35]	0.55	残存頂部より9.1~10.4cmの間に横目で付着	頭部欠損
5	鉄釘	A3	閉塞石充填土 (土層⑪)	7.80	1.30	残存頂部より4.1~6.4cmの間に縦目で付着	頭部I類
6	鉄釘	A2	流入土	[7.05]	1.25	残存頂部より1.1~2.55cmの間に横目で付着	頭部I類
7	鉄釘	A1	大形平石直上	7.40	0.75	残存頂部より5.05~6.1~6.7~7.2cmの間に縦目で付着	頭部I類
8	鉄釘	A1	大形平石直上	7.00	0.95	残存頂部より0.3~1.6~2.9~5.1~5.6~7.0cmの間に横目で付着	頭部I類
9	鉄釘	A1	大形平石直上	[6.90]	L1.15	残存頂部より1.3~2.1cmの間に横目で付着	頭部I類 先端部欠損
10	鉄釘	A1	石數(小形平石) 直上	6.20	1.10	残存頂部より0.9~1.35cmの間に横目で付着	頭部I類
11	鉄釘	A1	石數(小形平石) 直上	6.45	1.10		頭部I類
12	鉄釘	A2堆上	石數隙間充填土 上面(土層⑩・上面)	5.90	1.15	残存頂部より4.4~4.8cmの間に横目で付着	頭部I類
13	鉄釘	B2	流入土被下層	6.20	1.20		頭部I類
14	鉄釘	B2	流入土	5.75	0.90		頭部I類
15	鉄釘	A2	石數隙間充填土 上面(土層⑩・上面)	[3.70]	1.00		頭部I類 先端部欠損
16	鉄釘	A2	石數(小形平石) 直上	[3.05]	0.75		頭部I類
17	鉄釘	A1	大形平石直上間層 (土層⑫)	[9.55]	1.20		頭部II類
18	鉄釘	B1	大形平石直上間層 (土層⑫)	[8.95]	(0.95)	残存頂部より3.9~4.5cmの間に横目で付着	頭部I類
19	鉄釘	A2堆上	流入土(土層⑩)	[7.35]	1.05		頭部II類
20	鉄釘	A2	流入土(土層⑩)	[6.35]	0.75		頭部II類 先端部欠損
21	鉄釘	A1	大形平石直上間層 (土層⑫)	[2.65]	1.00		頭部II類 先端部欠損
22	鉄釘	A1	石數隙間充填土 上面(土層⑩・上面)	8.00	0.90	残存頂部より6.1~6.9cmの間に縦目で付着	頭部II類
23	鉄釘	B1	大形平石直上間層 (土層⑫)	[7.80]	1.80		頭部II類
24	鉄釘	A1	石數隙間充填土 上面(土層⑩・上面)	[6.80]	0.85	残存頂部より2.7~3.8cmの間に縦目で付着	頭部II類
25	鉄釘	B1	大形平石直上間層 (土層⑫)	[6.35]	0.90		頭部II類
26	鉄釘	B1	大形平石直上間層 (土層⑫)	[5.00]	1.00		頭部II類
27	鉄釘	A1	大形平石直上間層 (土層⑫)	[6.30]			頭部・先端部欠損・2本が倒着

第5節 調査のまとめ

樽池西手山頂墳3号は、ほぼ南東に開口する無袖式の横穴式石室を埋葬主体とする円墳である。墳丘は流出や削平を受け石室も上部が崩落しているが、床面の遺存状態は比較的良好で多数の遺物が出土した。以下、発掘調査および整理作業において明らかになった点を記す。

墳丘形状・規模	円 墳	9.5 m	周 溝	2.6 m
石室形態・規模	無袖式	石室長 6.0 m	玄室幅 1.1 ~ 1.5 m	玄室長 3.7 m
		羨道幅 1.1 m	羨道長 2.3 m	
		墓道幅 0.7 m	墓道長 2.1 m	
出土遺物	土器（須恵器・土師器）	鐵器（石突・鉄釘）	人骨（男性2体）	
埋葬時期	初葬（6世紀末~7世紀初頭）	1次追葬（7世紀中頃）	2次追葬（7世紀末~8世紀初頭）	
再利用・搅乱	9世紀後半~10世紀			

造構について

古墳は山頂を約25m下った緩やかな傾斜面を利用し、斜面を切り込み石室を構築している。墳丘は斜面に盛土を継ぎ足すかたちで形成されている。

玄室は若干胴張り形を呈し、縦に長い。追葬時より玄室内には石敷き（小形平石）を敷く。奥壁側はさらにその上に大形平石を配置する。玄室と羨道の境は仕切石を設置する。羨道は玄室幅よりもやや狭く、長さは短い。羨道には玄室よりも小ぶりの敷石を敷く。玄室と羨道間には閉塞石が存在する。石室内埋土土層より、石室内は後世（9世紀後半~10世紀代）に再利用・搅乱を受けていることが解かる。

周溝は墳丘北辺（後端）部分に、基盤層を掘り込み形成される。

前庭部は東へと折れる墓道が取り付く。

遺物について

遺物は、須恵器・土師器、石突・鉄釘、人骨が出土した。

出土土器の年代は、大きく4時期に分かれる。1期は初葬の段階で、6世紀末~7世紀初頭に位置付けられる。2期は1回目の追葬段階である。7世紀中頃に位置付けられる。3期は2回目の追葬段階である。7世紀末~8世紀初頭に位置付けられる。4期は後世の搅乱若しくは再利用の段階である。9世紀後半~10世紀代に位置付けられる。

出土鉄器は、層位関係から追葬時（7世紀中頃もしくは7世紀末~8世紀初頭）に伴うものと判断される。鉄釘は棺釘に使用されたと考えられるが、出土本数から木棺は2棺あったと推測される。出土状況から完全な原位置を保っているとは考えにくいが、玄室奥壁寄りに長軸方向に2棺配置されていたのではないかと思われる。

人骨は、2回目の追葬時（7世紀末~8世紀初頭）に伴うものと推定される。男性2体分の被葬者と思われる人骨が出土した。2体の人骨の先後関係は不明である。出土状況から後世の再利用や搅乱時に、左側壁側に搔き寄せられたものと推測される。

今回、大麻山北東麓における古墳時代終末期の群集墳のひとつを確認調査した。今まで周辺の終末期古墳群について、存在は知られているものの正確な数や位置は把握されておらず、発掘調査された古墳はなかった。そのため今回の調査データは、周辺の古墳群を解明する上で有益な資料となり得るであろう。近年周辺で開発が進んでいることから、今後は詳細な分布調査を実施し、古墳群の正確な数や位置、築造時期を把握することが望ましい。

付章2 香川県善通寺市樽池西手山頂墳3号出土の古墳人骨

松下孝幸*

【キーワード】：香川県、古墳人骨、横穴式石室、保存不良、男性

第1節 はじめに

香川県善通寺市善通寺町に所在する樽池西手山頂墳3号の遺跡確認調査が、2005（平成17）年におこなわれ、横穴式石室内から人骨が検出された。古墳は石室壁体一部が露出しており、残存していた人骨の保存状態は著しく悪いものであった。

筆者が調査に携わり報告書を書いた香川県での古墳人骨は、坂出市鶴ヶ峰古墳から出土した人骨しかない（松下2001b）。この古墳は瀬戸内沿岸に位置しており、瀬戸内海交通の要衝地をどのような古墳人が押さえていたかを考察する上では貴重な資料となるものと考えられ、人骨の形質的特徴が注目されたが、結果は、短頭型で、低・広顔、低身長の男性古墳人であった。

今回検出された古墳人骨の保存状態はよくなかったが、一部計測や観察ができるものがあったので、人類学的観察や計測をおこなったところ、興味ある所見も得られたので、その結果を報告しておきたい。

第2節 資 料

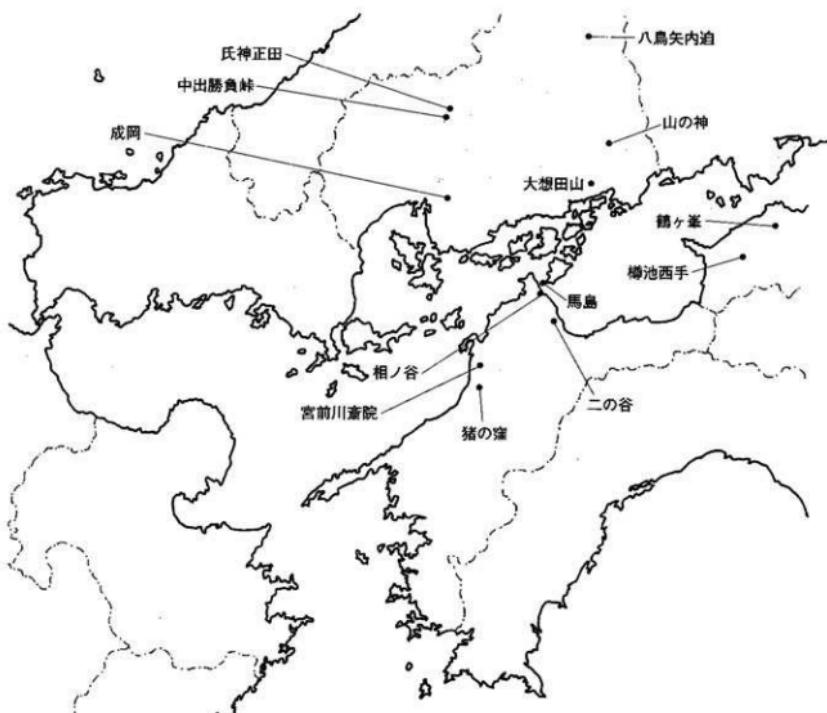
造構は横穴式石室で、南東方向に開口している。今回の調査でこの古墳の内部主体である横穴式石室から複数体の人骨が検出された。人骨は玄室の奥壁に向かって右側に残存していた。埋葬状態を保った人骨ではなく、すべて散乱状態で保存状態は悪い。現場で確認できたのは、頭蓋、大腿骨4本（右：2本、左：2本）、脛骨2本（左右不明）、上腕骨1本（左右不明）、鎖骨2本（左右不明）である。大腿骨4本のうち2本（FE-1）は屍床から浮いた状態で出土したが、その他の人骨は屍床直上で検出された。屍床直上の人骨群は潰れており、おそらく盗掘時に踏みしだかれたものと思われる。

頭蓋は頭蓋冠（SK-1）で、頭頂部が下になった状態で検出された。大腿骨は対をなすものが2組存在した（FE-1、FE-2）ので、2体分である。脛骨は左右1対と思われる所以、1体分である。鎖骨も左右1対であろう。従って、今回の調査で出土した人骨は大腿骨の数から2体分（いずれも男性）と推測される。各骨番号と性別は第3表に示すとおりである。なお、石室内には、土器、釘などが残存していた。

この古墳の築造は6世紀末から7世紀初頭と推測されているが、その後7世紀に追葬がおこなわれ、さらに9世紀後半から10世紀にも再利用されていることが判明している。今回出土した人骨は、出土状況から7世紀末～8世紀初頭に追葬された人骨と推定されている。人骨の年齢は推定できなかったが、参考までに年齢区分を第4表に示した。

*Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]



第43図 遺跡の位置 (1 / 25,000) (Fig. 43 Location of the Taruikenishitesancho tumulus
No. 3, Zentsuji City, Kagawa Prefecture)

計測方法は、Martin-Saller (1957) によった。人骨の発掘調査は、筆者の他に松下真実が、人骨の整理・復元・計測値の計算などは松下玲子、中野江里子、磯部美恵子が担当した。

第3表 出土人骨一覧 (Table 3. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考
SK-1	不明	不明	頭蓋
FE-1	男性	不明	大腿骨
FE-2	男性	不明	大腿骨 骨体が大きい。
TB-1	男性	不明	脛骨 骨体が大きい。
HU-1	不明	不明	上腕骨
CL-1	不明	不明	鎖骨

第4表 年齢区分 (Table 4. Division of age)

年齢区分	年齢
未成人	乳児 1歳未満
	幼児 1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児 6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年 16歳～20歳 (蝶形頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年 21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年 40歳～59歳 (60歳未満)
	老年 60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

第3節 所 見

SK-1 (性別・年齢不明)

頭蓋冠の一部が残存していたにすぎない。保存状態が悪く、詳細は不明である。

CL-1 (性別・年齢不明)

左右不明の鎖骨の一部が残存していた。保存状態が著しく悪く、様態は不明である。

HU-1 (性別・年齢不明)

左右不明の骨体が残存していた。保存状態が著しく悪く、大きさの推定もできない。性別・年齢は不明である。

FE-1 (男性・年齢不明)

左右の骨体が残存していた。計測ができたのは左側のみで、計測値は、骨体中央矢状径が26mm(左)、横径は29mm(左)で、骨体中央断面示数は89.66(左)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はきわめて悪い。骨体中央周は85mm(左)で、骨体は小さくはない。性別は大腿骨体の径が大きいことから男性と推定した。年齢は不明である。

FE-2(男性・年齢不明)

両側残存していたが、保存状態は悪い。骨体は圧押されて計測は両側ともできないが、骨体はかなり大きい。性別は大腿骨体の径がかなり大きいことから男性と推定した。年齢は不明である。

TB-1

おそらく左右の骨体と思われる。保存状態は悪く、骨体は潰れているが、観察したところ骨体は大きい。おそらくFE-2と同一個体と思われる。

第4節 考 察

大腿骨

男性の左側大腿骨(FE-1)が計測できたので、この計測値を周辺の資料と比較してみた。第5表は大腿骨の比較表である。香川県の資料としては坂出市の鶴ヶ峰古墳人骨しかないので、愛媛県、広島県の資料と比較してみた。骨体中央周は85mmで、この値は猪の窪B、二の谷2号墳よりは大きいが、陣開、猪の窪A、鶴ヶ峰よりは小さく、山の神に一致し、氏神正田、成岡、中出勝負崎とも大差ない。骨体中央断面示数は89.66で、この示数值は二の谷2号墳について小さく、粗線や個体両側面の後方への発達はよくない。骨体の大きさは平均的な大きさと考えてよい。FE-2は計測はできなかったが、骨体はかなり大きい大腿骨である。最近、このように骨体の径が著しく大きな大腿骨を時折見かけるようになった。香川県ではまだ見ていないが、愛媛県では猪の窪Aが92mmとやや大きく、広島県では陣開が98mmで著しく大きい。FE-2もこれらに匹敵する可能性がある。

第5節 要 約

香川県善通寺市善通寺町にある樽池西手山頂墳3号の遺跡確認調査で、2005(平成17)年に横穴式石室内から人骨が検出された。人骨の保存状態は悪く、残存量も少なかったが、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

1. 残存していたのは頭蓋、大腿骨4本(右:2本、左:2本)、脛骨2本(左右不明)、上腕骨1本(左右不明)、鎖骨2本(左右不明)である。残存していたのは少なく見積もって2体分の男性人骨である。
2. 人骨は考古学的所見から7世紀末~8世紀初頭の古墳時代人骨と推定されている。
3. 大腿骨は2体のうち1体は、骨体の径がかなり大きかった。
4. 脛骨の径もかなり大きいものであった。
5. 2体の男性被葬者のうち1体は古墳人としては普通の大きさであるが、もう1体はかなり屈強な男性であった。
6. 本古墳から出土した人骨は少なくとも男性2体分の人骨であった。保存状態が悪く、形質的特徴を明確にすることはできなかったが、下肢骨の径がかなり大きな人骨がみられた。本古墳の周辺域にはまだ古墳が存在するようなので、今後資料の増加をまち、本古墳群の地域的な位置づけと被葬者の形質的特徴との関連を考察していきたい。

第5表 大腿骨計測値(男性、右、mm) (Table 5. Comparison of measurements and indices of male right femora)

	梅池西手3号 古墳人 香川県 解剖市	二の谷 古墳人 愛媛県 今治市	猪の瀬 古墳人 伊豫県 伊豫市	山の神 古墳人 広島県 府中市	氏神田 古墳人 広島県 千代田町 (依下)	陣 間 古墳人 広島県 本郷町 (依下)	成 園 古墳人 広島県 5号人骨 5号人骨
	FE-1 (依下)	FE-1 (依下)	FE-1 (依下)	2号標2号 A B (公尺)	n M (地田)	1号 (依下)	2号標入骨
6. 骨体中央矢状径	26 (右)	29 (左)	23	30 27	28	1 27	33 (左)
7. 骨体中央横径	29 (左)	26 (左)	27	29 24	26	1 27	27 (左)
8. 骨体中央周囲	85 (左)	87 (左)	81	92 80	85	1 84	98 (左)
6.7 骨体中央断面示数	88.66(左)	111.54(左)	85.19	103.45 112.50	107.69	1 100.0	117.86 (左)
							103.70

第6表 大腿骨(男性、右) (Femur)

	梅池3号 FE-1 男性 右
1. 條大長(右)	-
2. 自然位全長(右)	-
3. 最大髌子長(右)	-
4. 自然位髌子長(右)	-
5. 骨体中央矢状径(右)	26
6. 骨体中央横径(右)	27
7. 骨体中央周囲(右)	85
8. 骨体上横径(右)	-
9. 骨体上横径(左)	-
10. 骨体1矢状徑(右)	-
11. 矢状直徑(右)	-
12. 鍾状状徑(右)	-
13. 鍔闊(右)	-
14. 頸體直徑(右)	-
15. 頸橫徑(右)	-
16. 頸失状徑(右)	-
17. 頸闊(右)	-
18. 頸體直徑(左)	-
19. 頸橫徑(左)	-
20. 頸闊(左)	-
21. 上顎側(左)	-
8/2 長度示数(右)	-
6/7 骨体巾矢状面示数(左)	89.66
10/9 上骨体断面示数(左)	-



FE-1 (大腿骨・男性)

FE-2 (大腿骨・男性)

TB-1 (脛骨・男性)

第44図 柳池西手山頂堆3号出土人骨
人骨の疾存図(アミかけ部分)
(Fig.44 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



第45図 樽池西手山頂墳3号出土人骨
大腿骨(向かって左：FE-1〔男〕、向かって右：FE-2〔男〕)
(The Femurs excavated from the Taruikenishitesancho tumulus No. 3)

謝 辞

＜掲筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた善通寺市教育委員会の皆様に感謝致します。＞

参考文献

1. 池田次郎、他、1984：広島県氏神正田遺跡出土の古墳時代人骨について。広島県山県郡千代田町氏神正田遺跡発掘調査報告：13-18。
2. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart : 429-597.
3. 松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第II地区出土の人骨。朝田墳墓群V(山口県埋蔵文化財調査報告64) : 179-206.
4. 松下孝幸、他、1992：東広島市助平古墳出土の古墳・中世人骨。西城第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書I(東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集) : 127-134.
5. 松下孝幸、他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第II地区出土の人骨－総括篇－。朝田墳墓群VI(山口県埋蔵文化財調査報告69) : 219-242.
6. 松下孝幸、1984：広島市芳ヶ谷3号墳出土の古墳時代人骨。広島市安佐南区祇園町所在広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告(広島市の文化財第30集) : 61-68.
7. 松下孝幸、他、1985：東広島市大槻3号遺跡出土の古墳時代・中世人骨。大槻遺跡群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集) : 117-122.
8. 松下孝幸、他、1986a：歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峰墳墓群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集) : 201-212.
9. 松下孝幸、他、1986b：中出勝負峰墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峰墳墓群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集) : 213-244.
10. 松下孝幸、1990a：広島県の古人骨。みよし風土記の丘、No40:1-4. みよし風土記の丘友の会.
11. 松下孝幸、他、1990b：広島県西城町八鳥矢内迫横穴墓群出土の古墳時代人骨。西城町教育委員会文化財報告書第2集 : 33-65.
12. 松下孝幸、他、1991a：広島県竹原市鶯の森遺跡出土の弥生～古墳時代人骨。鶯の森遺跡発掘調査報告(付編) : 1-40.
13. 松下孝幸、他、1991b：広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生～古墳時代人骨。手島山墳墓群(広島県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告第93集) : 61-80.
14. 松下孝幸、他、1991c：広島市城ノ下A地点遺跡出土の古墳時代人骨。(財)歴史科学教育事業団調査報告第2集 : 54-59.
15. 松下孝幸、1993：広島県本郷町陣開遺跡出土の古墳時代人骨。陣開遺跡(本郷町教育委員会文化財調査報告書第2集)付編 : 1-5.
16. 松下孝幸・他、1995：愛媛県今治市相の谷古墳群出土の古墳時代人骨。相の谷古墳群杉谷支群埋蔵文化財発掘調査報告書(埋蔵文化財発掘調査報告書第57集) : 41-54.
17. 松下孝幸、1997a：福岡県犀川町古川平原古墳出土の古墳時代・近世人骨。古川平原古墳群(犀川町文化財調査報告書第5集) : 82-98.
18. 松下孝幸、1997a：広島県府中市打堀山遺跡A地点出土の弥生・古墳時代人骨。打堀山遺跡A・

- B地点(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第147集) : 47-50.
19. 松下孝幸、1997b : 広島県東城町梶平塚第2号墳出土の古墳時代人骨。梶平塚第2号墳発掘調査報告書(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第150集) : 53-60.
20. 松下孝幸、1998a : 広島県福山市法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳出土の弥生・古墳人骨。法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第166集) : 52-58.
21. 松下孝幸、1998b : 広島県府中市山の神・池ノ迫遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。山の神・池ノ迫遺跡群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第165集) : 75-105.
22. 松下孝幸、1999 : 広島県尾道市大想田山2号古墳出土の人骨。大想田山古墳(尾道市埋蔵文化財調査報告第28集) : 21-35.
23. 松下孝幸、2000a : 広島県八千代町新宮第2古墳出土の人骨。新宮遺跡群発掘調査報告書(八千代町埋蔵文化財調査報告書第1集) : 95-108.
24. 松下孝幸、2000b : 愛媛県今治市二の谷2号墳出土の古墳時代人骨。旦遺跡・宮之前遺跡・長沢石打遺跡・長沢1号墳・長沢6号墳・二の谷2号墳・鉢又古墳群・郷桜井西塚古墳(一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書IV)(埋蔵文化財発掘調査報告書第87集) : 232-249.
25. 松下孝幸、2001a : 広島市成岡第2号古墳出土の人骨。成岡A地点遺跡((財)広島市文化財団発掘調査報告書第6集) : 71-83.
26. 松下孝幸、2001b : 香川県坂出市鶴ヶ峰古墳出土の人骨。坂出市内遺跡発掘調査報告書(平成12年度国庫補助事業報告書 鶴ヶ峰古墳、讃岐国府跡(開法寺遺跡)、讃岐国府跡) : 27-48.
27. 松下孝幸、愛媛県今治市馬島長山1号墳出土の古墳人骨。(投稿中)

付章3 菊塚古墳・樽池西手山頂墳3号から出土した木材・炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

第1節 はじめに

今回の分析では、菊塚古墳・樽池西手山頂墳3号から出土した木材・炭化材の樹種についての同定作業を行った。以下にその結果を述べる。

試 料

試料は、菊塚古墳の後円部周溝内埋土より出土した自然木5点(No.1～5)と樽池西手山頂墳3号から出土した炭化材2点である。菊塚古墳の後円部周溝内埋土より出土した自然木については、5点の中から4点(No.1～4)について同定を実施する。樽池西手山頂墳3号の炭化材は、No.5とNo.6にそれぞれ4～5片の炭化材が入っており、それぞれから2点、合計4点を選択する。

第2節 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

炭化材は、自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

第3節 結 果

樹種同定結果を表1に示す。菊塚古墳の自然木4点は、針葉樹1種類(マツ属複維管東亜属)と広葉樹2種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ヤマグワ)に同定された。樽池西手山頂墳3号の炭化材4点は、針葉樹2種類(マツ属複維管東亜属・針葉樹)と広葉樹1種類(タニウツギ属)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

第7表 樹種同定結果

No.	遺跡	遺構	内容	状態	樹種
1	鹿塚古墳	後円部周溝埋土	自然木	生木	マツ属複維管束亞属
2	鹿塚古墳	後円部周溝埋土	自然木	生木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	鹿塚古墳	後円部周溝埋土	自然木	生木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	鹿塚古墳	後円部周溝埋土	自然木	半木	ヤマグワ
5	御池西手山頂墳3号	A1・B1(土層⑤)	炭化物(枝状)	炭化材	広葉樹(鉄孔材)
6	御池西手山頂墳3号	B4(上層⑥)	炭化物(平材)	炭化材	針葉樹
7	御池西手山頂墳3号	B4(上層⑥)	炭化物(丸材)	炭化材	マツ属複維管束亞属
			炭化物(板状)	炭化材	マツ属複維管束亞属

マツ属複維管束亞属(*Pinus subgen. Diploxyylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は柔組織、仮道管、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には儲歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

針葉樹

軸方向組織は仮道管のみで構成され、観察した範囲では樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、観察した範囲では樹脂道、仮道管は認められない。放射柔細胞の細胞壁は保存が悪く、数珠状の肥厚の有無等は不明。また、分野壁孔は、スギ型に近い形状が見られ、少なくとも窓状壁孔ではないが、保存が悪く詳細不明である。放射組織は単列、1-10細胞高。

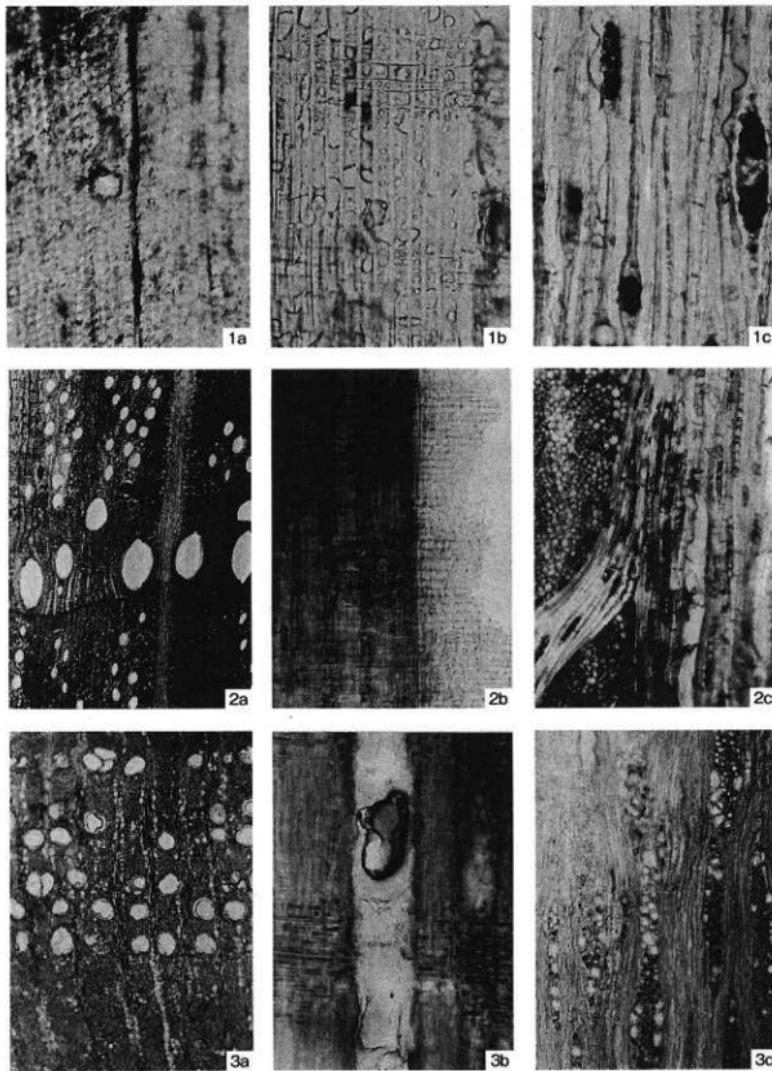
以上の結果から、少なくとも上記複維管束亞属とは異なる針葉樹である。軸方向組織が仮道管のみで構成され、放射仮道管・水平樹脂道を持たない種類としては、マツ科のモミ属、コウヤマキ科のコウヤマキ、イチイ科のイチイおよびカヤがある。このうち、カヤとイチイは、仮道管内壁にらせん肥厚を持つ。らせん肥厚は比較的保存が悪い試料でも観察できるが、今回の試料ではらせん肥厚が全く認められないため、少なくともカヤとイチイは除外される。また、コウヤマキは、分野壁孔が窓状となるが、今回の試料は窓状ではないと判断されるため、コウヤマキも除外される。残るのはモミ属1種のみであることから、今回の試料はモミ属の可能性があるが、保存が悪いためにモミ属の特徴である放射柔細胞壁の数珠状の肥厚が観察できない。そのため、本報告では、モミ属の可能性を指摘した上で針葉樹として報告する。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-3列、孔圈外で急激に管径を減じ、小道管は単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

ヤマグワ(*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圈部は3-5列、孔圈外への移行は緩やかで、晩材部では最初単独、後に2-4個が塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。



1 マツ属複維管束亞属(試料番号1)

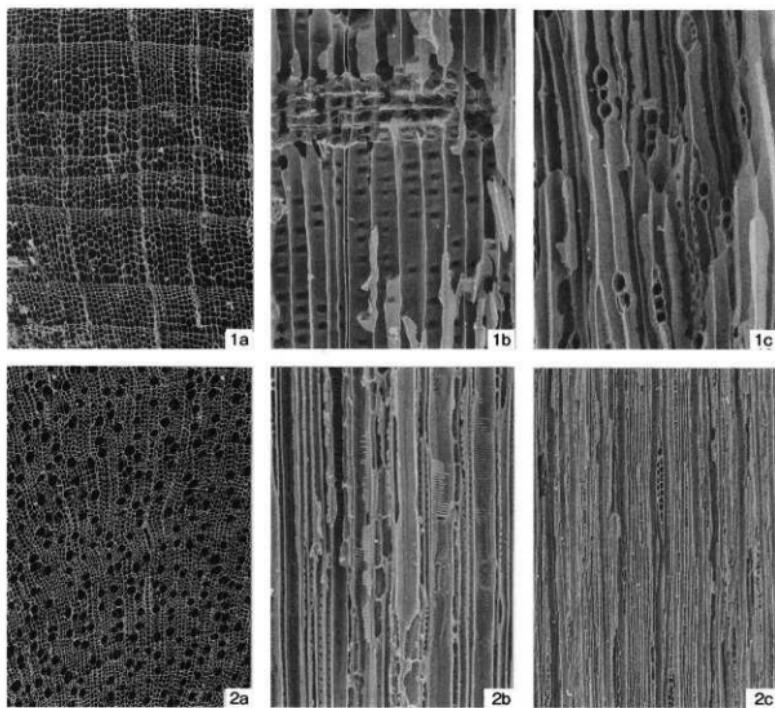
2 コナラ属コナラ亞属クヌギ節(試料番号3)

3 ヤマグワ(試料番号4)

a:木口, b:径目, c:板目

■ 200 μm:2-3a
■ 200 μm:1a-2-3b,c
■ 100 μm:1b,c

第46図 菊塚古墳の木材



- 1 针葉樹(試料番号6)
2 タニウツギ属(試料番号6)
3 ヤマグワ(試料番号4)
a:木口, b:径目, c:板目

第47図 植池西手山頂墳3号の炭化物

タニウツギ属(*Weigela*) スイカズラ科

散孔材で、道管はほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

第4節 考 察

菊塚古墳後円部周溝埋土から検出された材化石は、針葉樹のマツ属複維管東亜属、落葉広葉樹のクヌギ節、ヤマグワと同定された。このうちクヌギ節とヤマグワは、後背湿地や川辺等の湿った場所に多く分布する傾向がある。複維管東亜属にはアカマツとクロマツがあるが、いずれも典

型的な陽樹であり、砂地、湿地、岩地などの悪環境でも生育可能である。

ところで菊塚古墳に隣接した地点での古墳時代の花粉分析データについては、管見の限り存在していない。丸亀平野の全域に対象空間を広げた場合には、当該期墳の概要的な古植生について、これまでに考古遺跡で実施された花粉分析結果からある程度推測することが可能である。川西北七条遺跡・川津川西遺跡の花粉分析結果から、弥生時代末～古代には、丸亀平野の遺跡を取り巻く台地・丘陵や山地斜面において、カシーナラ林を中心としてコウヤマキ、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属などの針葉樹が混在する林分が存在していたことが推定される(パリノ・サーヴェイ株式会社、1997・1999)。

今回、同定された樹種は、上記のような林分に普通に存在する種類である。但し、マツ属複維管束亞属、コナラ属コナラ亞属クヌギ節、ヤマグワは、いずれも陽樹であり、暖温帯における二次林の構成要素である。今回、試料が採取されたのは、築造時に地表面の大きな攪乱を伴う古墳周溝内である。このことに着目すると、これらの樹種は、古墳築造後に伴い裸地やそれに近い状態となった領域に成立した二次林の可能性がある。

一方、櫛池西手山頂墳3号の炭化材は、玄室奥側部でタニウツギ属とモミ属の可能性がある針葉樹、羨道部でマツ属複維管束亞属に同定された。以上の分析結果から、玄室奥側部と羨道部では、炭化材の樹種構成が異なる可能性が示唆される。

なお、玄室奥側部で確認された樹種のうち、タニウツギ属は、林縁部等の開けた場所に生育するが、大きくても樹高3-4m、根元径で6-8cm程度であり、大木になるような樹木ではない。針葉樹については、径が小さいことから、枝等が利用された可能性がある。羨道部で確認されたマツ属複維管束亞属は、上述した生態性が指摘される。

引用文献

- 林 昭三、1991、日本産木材 顕微鏡写真集。京都大学木質科学研究所。
- 伊東 隆夫、1995、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ。木材研究・資料31、京都大学木質科学研究所、81-181。
- 伊東 隆夫、1996、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ。木材研究・資料32、京都大学木質科学研究所、66-176。
- 伊東 隆夫、1997、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ。木材研究・資料33、京都大学木質科学研究所、83-201。
- 伊東 隆夫、1998、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ。木材研究・資料34、京都大学木質科学研究所、30-166。
- 伊東 隆夫、1999、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ。木材研究・資料35、京都大学木質科学研究所、47-216。
- 鳥居 謙・伊東 隆夫、1982、図説木材組織。地球社、176p。
- パリノ・サーヴェイ株式会社、1997、川西北七条I遺跡周辺の古植生。
- 「四国横断道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 三条黒島遺跡 川西北七条I遺跡」、301-309、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公团。
- パリノ・サーヴェイ株式会社、1999、川津川西遺跡の花粉分析報告。
- 「四国横断道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津川西遺跡 飯山一本松遺跡」、247-253、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・日本道路公团。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編)、1998、広葉樹材の識別 I AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト。
- 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修)、海青社、122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .